
魔女狩り～出会い編～

FUSE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女狩り〜出会い編〜

【Nコード】

N0461B

【作者名】

FUSE

【あらすじ】

ごく普通の学生の主人公が変な紋章に選ばれてしまい、魔女狩りという組織に入れられ、魔法使いを絶滅させていく学園バトルファンタジー小説？

プロローグ

皆は魔法使いを信じるだろうか？

タネもなく手から炎を出したり、雷を呼び出すアレだ。

俺も当初この学校に来るまでは全く信じていなかった。

魔法学校という、いかにもうさんくさい所に転校するまでは・・・

現に俺は普通の一般人なのだが、変な紋章に選ばれたせいで、その学校に週に1度通わなくてはいけなくなった。

しかし、そこで教えられたのは、魔法ではないある力を使った特殊な技だった。

あの俺を選んだ変な紋章っていうのは、『ソウルイーター』という呪われた紋章らしく、魔法使い退治には持ってこいとのことだ。ん？魔法使い退治？

その真相は俺が神兵に昇格してから教えられた。

その前にこの学校のシステムみたいのを説明しなくてはならない。まず、普通の学校のトップの学園長のことを、ここではメシアという。

だがそのメシアの姿を誰も見たことない。当然、俺も見たことはない。

次に生徒会にあたるのが、ここでは幹部会と言う。

幹部会は全員で5人いて、生徒のほとんどはこの幹部会から指示を仰いでいる。

その幹部会の5人に一人づつ、直々の部下というか家来がいる。それが神兵だ。

それ以外のことを信徒という。当然生徒のことも信徒と呼ぶが、先生も信徒に含まれるらしい。

つということは神兵のほうで、魔法学校の先生よりえらいということになる。

神兵に昇格した俺は、この魔法学校の本当の意味を教えられた。魔法学校つというのは表向きで、本当は『魔女狩り』という組織らしい。

この世の魔法使いを全滅させる組織。
前にも言ったが、俺たちは魔法学校に通っているものの、魔法など使えない。

ただの一般人より強く、不思議な能力をもってるだけだ。
その元一般人に魔法使いを狩れだど？冗談も休み休みにしてほしい。

でももう後戻りはできないらしく、断れば狙われると脅され、しぶしぶそれを了承した。

そして神兵になってからの、初めての仕事を言い渡された。

第1話：神兵への昇格

俺の名前は鬼庭隼人。今はわけあつて魔女狩りの神兵をしている
それで今から神兵になつて始めての指令を受けるため、別室に移
動中だ

「よう、隼人！お前も今から指令もらいに行くのか？」

話し掛けてきたのは俺と同じ神兵の烏丸鋭霧^{からすま えいむ}だ

赤髪で無作為に前髪を立てていて、俺の本当の学校の制服を着て
いた

因みにこれは余談だが、俺にはこの魔法学校以外にもちゃんと
した、皆と同じ普通の学校にも通っている

そんでもつて、こいつは俺のクラスメイトだ

「まあ、そんな嫌そうな顔しねえで、一緒に歩こうぜ」

烏丸はそう言つて俺の肩に手を回した

俺はそれを必死に振りほどこうとするが、烏丸は逆に巻きつこう
として離れん

こんな所誰かに見られたら、誤解される恐れがあるから、早く脱
出できるよう試みたが遅かった

後ろから聞き覚えがある女の子の声が聞こえた

「仲がいいですね？」

げ・・・相馬^{そうま}和^{なごみ}こいつも俺と同じ神兵で、向ここの学校では同

じ学年だがクラスは違う

容姿は太ももまで伸びる紺色のサラサラの髪の毛で、両肩に髪の毛を
たらしていて、右側だけ束ねている

腰にはかなりの業物の日本刀2本がぶら下がっていた

「いや、これはこいつが勝手に・・・」

俺は烏丸を必死の思いで引き剥がし、説明したけど、俺の考えす
ぎだったのか、相馬さんには本当に仲のいいとしか受けなかったら

しい

とりあえず、俺たち3人はそのまま司令室に到着した

司令室には残りの神兵2人がもう来ていた

くれない さつきあさぎり よつこつ
紅皐月と朝霧耀綱だ

この2人も一応向こうでも同じ学校なのだが、紅は後輩で、朝霧は先輩にあたる

部屋の奥には幹部会の5人が座っていた。ここで幹部会5人の紹介をしよう

幹部会のトップ水無月龍二みなづき りゅうじ赤髪のオールバック。長さは肩まであり、茶色い瞳をしている

どんな能力かは知らないが、トップというくらいだから、すごい能力の持ち主なんだろう。神兵は烏丸だ

次に幹部会の1、2を争う光明寺大和茶髪こうみょうじ やまとでボサボサ頭。緑の瞳をしていて、眼鏡をかけている

棒術を得意とし、手から如意棒を召喚できるし、魔力の化身メデューサをも召喚できるすごい人。神兵は俺だ

残りの3人は同じくらいの強さらしい

やすい ちやう
安井沙耶水色の髪でボサボサショートヘア。青い瞳

能力も不明。神兵は相馬さんだ

くおんじ まさゆき
久遠時真幸茶髪で首の所まで髪の毛が伸びており、黒い瞳をしている

いつもスマイル顔で、まったく取り乱さないらしい。魔力の化身イクシオンを召喚できる。神兵は朝霧先輩だ

さなだ みさと
最後に真田美里黄色い髪のポニーテール。おろせば腰の辺りまである。緑の瞳

そして、最悪なことに俺と同じ学年同じクラスときた。神兵は紅だ
以上幹部会の5人の紹介終了！

ってほとんど能力とかは俺の上司である光明寺さん以外わからないんだけど……

「さて、全員そろったことだ、指令を言い渡す」

最初に口を開いたのは幹部会のリーダー水無月さんだ

「あなたたちにはAランクまでの魔法使いを狩ってもらいます」

Aランクとは大体高層ビルを1秒で破壊できるほどの力を持つ者だ
数値言々と魔力値が5000以下ってことかな

「まあ、早々Aランク以上の魔法使いが現れることはないと思います
すし、片っ端から倒してください。では・・・」

幹部会の奴らは指令を言うだけ言って去って行ってしまった

「初めての指令が人殺しとは感じ悪いなあ」

「まあ、そんな頑張らんでええから、気楽にやるとき！」

俺がついグチをこぼしてしまったのを、光明寺さんに聞かれてしまっ
てたらしい

「別に殺しても事故扱いになるんやし、人殺しとかきにせんでええ
！じゃあ期待しとるからな」

そう言って、光明寺さんも去っていった

「やっぱり幹部会の人たちはすごいね」

「なんか次元が違うっていうか」

「俺なんか今まで足がすくんで動けなかったし」

紅と朝霧と烏丸は緊張が解けたのか、そんなことを話してた

「明日からまたいつもの生活に戻るのですね」

相馬さんが安心しきった顔で話し掛けてきた

「そうだといいいけどな」

俺がそう答えると相馬さんは不思議そうな顔をした。どうやら指
令をまったく聞いてなかったらしい

「まあ、いつも通りと変わりないだろ」

相馬さんの代わりに俺が2人分狩ればいいことだ。そう思い俺は
相馬さんに、指令のことは言わないことにした

「じゃあまた明日！」

「おー！」

俺はこうして2日ぶりに家に帰った

そして明日からは、また普通の学生生活が始まる……はず

第1話：神兵への昇格（後書き）

文章力が乏しくてすみません

ちよっと一気にキャラを出させすぎたかなと、今でも悩み中ですw

第2話：久しぶりの学校（前書き）

神兵に昇格した隼人たちの学校生活
普段とはかわりないはずのだが・・・

第2話：久しぶりの学校

「隼人くく！早く起きないと遅刻しちゃうよく！」

この声で起されるのはいつもの日課だ

因みに今、俺を起してくれてるのは幼馴染の氷室亜矢ひむろあやだ

一人暮らしをしているため、毎朝朝食を作りに来てくれるついでに起してもらっている

「あゝ、今起きた・・・」

俺はいつも通りの生返事をし、制服に着替え支度を亜矢と家を出た朝食は作ってくれてるものの、起きるのが遅く弁当行きになる始末「ほくら、早くしないと遅れちゃうよ」

「わかってるって！ってかなんか嬉しそうだな？」

「だって、隼人と学校に行くの久しぶりだもん！」

ピンク色の髪を靡かせ、俺の一步前に出て振り返って言った

そういやあ、神兵になるとかで結構家を空けてたからなあ

学校には出席停止の届を出してたから、そんなには気にしてなかったけど確かに久しぶりだった

「朝からいちやつくヒマがあつたら、俺にも誰か紹介してくれよ」

せつかく懐かしみの余韻に浸ってる所を烏丸に邪魔された

「烏丸くんおはよ！」

「よお！」

烏丸は右手を上げ軽く挨拶をした

「あ、隼人に鋭霧！今日は学校に来たんだ」

またしても後ろから声をかけられた

声の正体は俺の大親友の陽河光喜ひかわこうきだ

背が小さく大きく見せるためか、いつも前髪を逆立てている「てつきりくたばったかと思っただぜ」

この嫌味を言ったのは、光喜の隣にいる、兄の悠夜ゆうやだ
腰まで黒髪を伸ばし、いつも黒い服装に身を包んでいる
学校の不良共をまとめている、いわばトップだ

俺も一回サシで勝負したけど、嘗めてかかったせいか引き分けて
おわちまった

「お前に勝つまでくたばる気はねえよ」

俺は悠夜に思いつきりガンを飛ばしてやった

だが、悠夜は冷め切った表情で、学校へと向かっていった

「あの態度ム力つく！後ろから殴り倒したるかいい！」

「まあまあ……」

俺が右拳を上に見上げ悠夜に殴りかかる所を、光喜と亜矢に止められ、俺は怒りを抑えた

因みに陽河兄弟はこの二人だけではない

一つ上のクラスに一人、そして一つ下のクラスに一人いる。そして

悠夜と光喜は双子で俺らと同じ学年だ

合計4人兄弟ということだ。まあ俺には関係ないことだけどな
まあ、こんなそんなで烏丸と光喜らとバカやってるうちに学校に着いた

当然モタモタしてたせいで遅刻俺と烏丸だけ遅刻扱いされた

光喜は滑り込みセーフで亜矢は女の子だからしょうがないと許したバカ教師

これは明らかえこひいきだろ？

つというわけで1限目は廊下でバケツを持ち、烏丸と立たされるハメに……

「なんで俺達だけなんだよ！まあ別に教室にいても授業受けるしないしこつちでも悪かないか」

「悪いに決まってるだろ！」

めちゃくちゃ楽観的な考えな烏丸が羨ましく思えた1時間であった

「昼休み」

「ねえ、もうお昼だよ！お弁当食べに行こうよ」

誰かが俺の体を揺すってきた

「ねえってば！みんなもう屋上へ行っちゃたよ」

俺はその声と頭の激痛に目を覚ました

「いつてー！ー！」

俺が机にうつ伏せて寝ている状態から起き上がると何冊もの辞典が転がり落ちた

そういえば2限目から寝たおしてたんだが、こんなにも殴られてたのか……

「隼人、やっと起きた！もうみんないつちゃったよ」

亜矢が弁当二つを俺に見せた

「今から屋上行ってもあいづらがうるさくて口ク食えねえだろ。中庭で食おうぜ」

俺はそう言い、中庭に移動した

「ねえ、あの人の格好なんか変だよ」

亜矢が目の前にいる人を目で合図してきた

黒いローブで身を隠し、フードまでかぶって、明らか学校とは縁がない格好だった

「無視だ、無視！」

俺は亜矢にそう呟き、そのまま歩き続けた

そしてすれ違う瞬間……

「この指令は対抗戦でもあるのですよ」

俺の耳にそういう言葉が入り込んできて、振り向いた時には黒いローブの人はいなかった

「あの人いないよ」

亜矢が怯えたながら、俺にしがみついていた
「ノンキに飯とか食ってる場合じゃねえかな？」

俺はそう呟くも、やっぱり弁当は食うことにした
「腹が減っては戦はできぬ、って言っしな！」

第2話：久しぶりの学校（後書き）

ある人のオリキャラを使わせてもらってます

その人のキャラクターの登場許可を貰うために少々投稿が遅れてしまいました。

第3話：謎の女

そんなこんなで昼休みの出来事を忘れ、放課後になってしまった。俺は部活はやっていないが、屋上に集まるのがいつものことだ。

屋上に着いた時にはいつものメンバー、烏丸、相馬さん、朝霧先輩、皐月が既にいた。

「魔法使いを狩るっていうものの、そう簡単に見つかるわけないだろ」

みんなは昨日の事について話しているらしい。

「早速任務の話か？熱心だな」

俺はそう言い、烏丸の隣に座った。

「つてかよお、お前黒いローブの女を見たか？」

烏丸に意外な質問をされ、俺は少々手間取った。

「お前も見たのか？」

「お前もつてことはやっぱ見たのか」

みんな様子だと多分全員にあのこと言っただろう。

「対抗戦・・・一体どういうことなのでしょう」

相馬さんがそう言った時、微かだが背後から魔力を感じた。

「おい！」

「わかつてる。俺らの話を聞いていたのかわからないが、向こうは明らかに一瞬魔力を貯めた」

朝霧先輩は何事もなかったかのように、平静を保ちながら言った。

「とにかく油断するな。襲い掛かってきたら、俺らも一斉攻撃だ」

つという作戦を練り、背後に隠れている奴が攻撃を仕掛けてくるのを待った

だが、攻撃を仕掛けてくる気配は全くなかった
「何をしているんですか？」

攻撃を仕掛けてくるどころか、話し掛けられた。

俺は立ち上がり振り返った。

そいつは昼休み見かけた、黒いローブの女だった。

「あ・・・」

「お前は！」

全員予想外の相手に呆気にとられた。

『封結』

「な・・・」

黒いローブの女がその一言を言うと、急に身体が重くなり、立っているのがやっとの状態だ。

「何をしたお前！」

烏丸が女に叫んだ。

「フフツ、神兵と言っても所詮その程度ですか。これでは信徒とあまり変わりませんね」

信徒とか神兵とか魔女狩りの用語を並べるとは、こいつ一体何者なんだ。

「もうダメ・・・」

「私も」

俺が必死に頭の中を整理していると、相馬さんと皐月の弱音が聞こえてきた。

俺は励まそうと2人の方に顔をやると・・・

「おい！どうしたんだよ！」

2人は石になったみたいに関心なくなっていた。

「お前2人に何をした」

息を切らしながら俺はその女に叫んだ。

「魔力が低い証拠です。グランドを見てみなさい」

女の言うとおりにグランドを見てみると、そこは人が人形みたいになって固まっていた。

「魔力のない者は私が結界を張った瞬間固まっています。さああなたたちはあと何分持つかしら」

「何が目的だ？」

朝霧先輩は魔力を高め応戦状態に入った。

「目的？フッフ、あなた達が潰しあわないから、私達が手を下したまでですよ」

「だからどうして俺らが潰しあう必要があるんだよ！」

『アースシェイカー』

烏丸が魔法で地面を伝って女に攻撃をしようとしたが、途中で途切れた

「はあはあ・・・やべえ、魔力の消費が激しすぎる」

「どうやら、ここで魔法を使うのはやめといた方がいいみたいだな。使えない神兵はいらないってことです。」

「つということは4人はお払い箱ということか？」

「そういうことです。信徒に降格させるのも屈辱だと思うので、殺してあげます」

のっけからこんな大ボスとかアリなのか？

俺はそう思いながら意識が段々薄れていった。

「その辺にしたらどうや？」

「メシア様もお遊びが過ぎます」

「幹部会？それにメシア様って・・・」

女の背後に幹部会の光明寺さんや水無月さん達がいた。

「そろそろこの結界を解除していただけませんか？この子達がかわいそうですよ」

「しょうがないですね。貴方がそういうってことは、何か考えでもあるのでしょうか」

『封結解除』

女はそう呟き結界を解いた。

「はあはあ、死ぬかと思っただけ」

「あれ？私達は一体？」

皐月たちも元に戻り、俺は地面に寝そべった。

「久遠時さん、その女の人ってまさか……」
朝霧先輩が恐る恐る聞いた。

「この方が魔女狩りのトップのメシア様です。顔は隠されていますけどね」

いつものスマイル顔で久遠時さんが説明した。

「それでこいつらを生かしたってことは何か考えあるんですよね？」

「はい。この子達を片桐一家滅亡計画のメンバーに加えたいと思います」

「これでこいつらが役に立つたら、5人とも神兵と認めたくてくれよ」

久遠時さんと光明寺さんの説得でメシア様は頷いた。

それにしても、せっかく元の学校生活に戻れたと思ったら、また修行かあ

しかも今度は命がけみたいだし……
はあ……今度はいつ戻ってこれるやら

第3話：謎の女（後書き）

めちゃ×2間が空いてしまってすみません。

この話からまた週1づつ投稿していく予定なのでヨロシクお願いします。

第4話：片桐一家滅亡計画始動（前書き）

片桐一家滅亡計画に同行することになった隼人たち
この後一体どうなるのか？

第4話：片桐一家滅亡計画始動

意外にも学校の出席停止の許可はすんなり取れた。

この前とつたばっかなのに、また取れるって卒業とか大丈夫なのか？

っと心配していること呼び鈴が鳴った。

多分烏丸達だろう。

その前に俺たちがこれから行う計画について話しておこう。

片桐一家滅亡計画とは、最初幹部会5人だけで動く隠密な計画だったらしいが

幹部会の一人朝霧先輩の上司、久遠持さんがメシア様に頼んで、一緒に行動を共にすることになった。

片桐一家がどういうやつらなのかは、移動中に説明してくれるらしい。

ピンポーン ピンポーン ピンポーン

「そんなに鳴らさなくても起きて・・・」

「おはよう！隼人！鍵忘れて入れなかったんだ」

目の前には烏丸達ではなく亜矢がいた。

「あれ？そんな格好で・・・お出かけ？」

亜矢が俺の服が制服じゃないのに気づいた。

「あのさ、俺また1週間ぐらい学校休むことになったんだ」

「えっ！どうして」。また変な事件に巻き込まれて大怪我して帰ってくるんじゃないの？

それにそんなに休んで大丈夫なの？今度も烏丸君達と一緒になの？」

亜矢のマシガントークを聞き流しつつ、俺は家の鍵を閉め、烏

丸達が早く来ることを願った。

「ねえ、私も一緒に行っちゃダメかな？」

「はあ？・・・すまん、今なんて？」

俺は聞き違いだと信じてもう一度尋ねた。

「わ・た・し・も行ってもいいかな？」

自分に指を指しながら、『私も』の所を強調して、俺の目の前で言った。

「ダメに決まってるだろ。いつ帰ってくるかわかんないだし、それにお前は出席停止の手続き済ましてねえだろ」

「一週間ぐらい休んでも平気だもん」

亜矢はすねた子供のように言った。

「一週間もいなくなったら、親が心配するだろ？」

「隼人と一緒だと大丈夫だもん。」

参った。亜矢も半泣き状態になり、手の施しようがなくなってきた時、やっと救世主が来てくれた。

「悪い、遅れちゃった！！他の皆は駅で待ってるから早く・・・って取り込み中だったか？」

「おい！！！！」

俺と半泣きの亜矢を見て、逃げようとする烏丸を捕まえ、なんとか亜矢をここに残すように頼んだ。

「亜矢ちゃん、男ってのはな、女に帰りを待っててもらうと嬉しい生き物なんだよ」

おいおい、どういう説得をしてるんだよ。

「そうなの？」

亜矢が俺のほうに視線を向けた。

「う、うん。」

「ほら、だから亜矢ちゃんはここで隼人の帰りをまっとうしてくれな

いかな？」

「わかった。じゃあ気をつけてね」

俺は烏丸の説得に感服しながらも、みんなの待つ駅前に急いだ。

「遅いぞ何やつとつてん！はよう乗らな電車きてまうやろ」

俺の上司、光明寺さんが切符を俺に投げつけて、ホームへ走った。なんせ片桐一家の家は山奥で2時間に1本しか電車がないらしい。なんとか予定の電車には乗れたが、小一時間水無月さんたちに注意されたのは言うまでもない。

「それでは、計画の内容を言い渡す」

電車内で水無月さんが一人の男の写真を取り出した

「片桐源次郎だ。片桐一家のトップと言ってもいい奴だ」

60〜70年代で白髪のアールバックで、右目に眼帯をしていて、タキシードを着ていた。

「それとそいつの孫が3人。計4人が片桐の血を引く生き残りだ」

「たった4人ですか。わざわざ幹部会が動く必要あるんですか？」

烏丸が嘗めきったような言い方をした。

「ほお、ではお前は倒せるのか？片桐と言ったら3大魔法使いの血筋だぞ」

「因みに残り二つは？」

俺が恐る恐る聞いた。

「陽河と天枷だ。この名字の魔法使いには気をつけろよ」

「ただの同姓の人と間違えたらだめだよ」

最後に相馬さんの上司、安井さんが付け加えた。

確かに、俺のクラスには陽河も天枷もいるし、魔法使いじゃないだろうし、人違いだろうと俺は自分なりの答えを出した。

「つで烏丸、どうなんだ？」

「無理です」

即答かよ。つと突っ込みたい勢いだつたがやめておいた。

「それでその片桐源次郎、他3名の片桐一家だが、敵が泣こうがわめこうが簡単に殺しが出来る情の欠片もない鬼だ。

もし捕まったりでもしたら、即あの世行きだから気をつけろよ」

「冷酷残虐で現代の独眼竜とも言われています」

また水無月さんのあとに安井さんが付け加えた。

「それで分かつてると思うが4人を殺すのが今回の計画だ。お前たちには孫の2人を任せようと思う」

そう言つて2枚の写真が手渡された。

「お、女？」

驚いたことに2人とも16〜20ぐらいの女の子だった。

一人は黒髪のロングヘアーで頭の上にリボンをつけている。もう

一人のほうは黒髪のショートヘアーだ。

「そんな驚くことないだろ。それにもう一人の方は男だ。そっちは

厄介そうだから俺らに任せろ」

「頼んだで」

光明寺さんのその一言で計画の説明は終わった。

【立入禁止】

電車を降り、30分ぐらい歩いた所に【立入禁止】と書かれた看板が立ててある山道に着いた

「この頂上に片桐一家がひそんどるはずや」

その山は木が密集していて、中に入るとほとんど日の光が差し込まなくて、不気味に明るかった。

「ダメ、これ以上進めない」

皐月の上司でもある、俺と同じクラスメイトの美里が急に立ち止まった。

「やっぱり結界が張られてますか」

久遠寺さんがあごに右手を添えながら、結界に左手を当てた。

「何言ってるんですか？普通に通れますよ？」

烏丸は結界が張られているだろうと思う所を、すんなりと通ってしまった。

「あなたたちを連れてきて正解だったようです。ここは僕たちみたいに魔力が高すぎる者を拒むようですね」

久遠寺さんがそう言って、俺たちのほうを見た。

「無茶はせんでええ。ただ中に入って結界を解いてきてくれ」

ええ・・・マジっスか？・・・

「できるだけこっちで自力で解除してみるけど、時間がかかりそうなの」

美里が魔方陣みたいのを空に描きながら、結界を解こうとしていた。

「っというわけで頼むな」

「無茶はしなくていいから」

っということ、俺と烏丸と相馬さんと朝霧先輩と皐月は、山奥へと進まされた。

それより、この結界の解除方法教えてもらってないんですけど・・・

・

第4話：片桐一家滅亡計画始動（後書き）

唯一の戦力の幹部会との別行動

5人は生きて戻れるのか？（え？

第5話：結界を解きに・・・（前書き）

魔法使い片桐一家を滅ぼしに行つた隼人達。
そして結界を解くために幹部会との別行動。
隼人達は無事結界を解けるのだろうか？

第5話：結界を解きに・・・

「ぐはー！なんでこんな山奥に谷とかあるんだよ！」

光明寺さんと別れたから30分ほど山を登った所に、深い谷底があった。

その端に大きな洋館と言った方が正しいと思うほどの館があった。

「こんなところ落ちたら絶対死ぬー！」

「いいからさっさと進め！」

明らか間違ったルートを進んでるような気がしてならないんだが、烏丸がこつちと言い張るから来てみりやこれだ・・・

「着けばいいんだろ！着けば！館はもう見えてるんだ。迷うはずないだろ」

烏丸は自信満々にそう言い、先頭を歩いていった。

「思ったんだけど、もし片桐一家と鉢合わせしたらどうするの？」
相馬さんが痛い所を質問してきた。

「問題はそれだよなあ。俺らじゃあ齒も立たないと思うし」
ひらきなおってるよ、こいつ・・・

「そのときは幹部会の皆さんが助けてくれますよ」
皐月はそんな樂觀的な考えができていいよなあ。
つと、話してるうちにその館に到着した。

「でけえ・・・」

「間近で見ると大きいものですねえ」

「でもボロくねえか？」

「確かに・・・」

館と言うより、幽霊屋敷みたいな感じだった。

壁はボロボロだし窓ガラスは割れているはで、とても人が住んでるようには見えなかった。

「とりあえず中に入ってみようぜ。久遠時さんたちが入れなくして
る結界の装置もここにあるんだろっし」

朝霧先輩が俺らを前にして、恐る恐る進んだ。

つて後輩を先に進ませるんですか!!

「それより本当にこんな所にあんな美女2人も住んでるのかよ？」

烏丸が水無月さんから受け取った、片桐源次郎の孫娘の写真を眺
めていた。

「幹部会が動くほですし、確かな情報なのでしょう」

相馬さんがそう言い、辺りに散らばっている家具を調べていた。

「誰が来る」

皐月のその一言で俺らの動きが一瞬にして止まった。
確かにまだ遠いがどこからか足音が聞こえてきた。

ボタン

「ギャーーーーー」

「キャーーーーー」

「おい!!」

急に入り口の扉が閉まり、烏丸と朝霧先輩と皐月は逃げ出してし
まった。

「たかがドアが閉まったくらいで・・・」

俺はその閉まった扉を開けようとするが全く動かなかった。

「うそだろ・・・」

どうやら俺たちは閉じ込められてしまったらしい。

しかもさっきの足跡は徐々に近づいてきている。

「ここにいたらまずいなあ・・・」

俺はこの場を去ろうとした瞬間、誰かに足を捕まれた。

「ギャーーーーー」

「隼人君、私、私」

俺の足を掴んだのはその場に座り込んでいた相馬さんだった。

「な、なにしてるんだよ」

すごい上がった心拍数を必死に押さえながら、共に座り込んだ。

「足がすくんじやって・・・」

「アハハ・・・実は俺も」

「・・・・・・・・・・」

一時の沈黙。

「烏丸~~~~！戻って来い！朝霧先輩！見捨てないで下さいよ！」

「皐月ちゃんお願い戻ってきて！」

必死に逃げ去った3人に助けを求めたが、俺たちの声が虚しく響いただけだった。

足音はすぐそこまできている。こうなったら戦うか

『ソウルイーター・裁きの剣^{（ツバキ）}』

俺は暗黒の剣を召喚し、やっとのおもいで立ち上がり、剣を構えた。

「ねえ、これって人の足跡じゃないと思うんだけど」

相馬さんの言うとおりよく聞くと、足音がペチャペチャと・・・

「ウガーーーーー」

「で、でたーーーーー」

俺は再びその場から去ろうとするが、相馬さんが俺の足に纏わりついて離れない。

「クソ！なんでゾンビなんかがいるんだよー！」

俺はやケクソになって、ゾンビに切りかかったが呆気なく倒してしまった。

「なんだ、見掛け倒しか・・・」

ゾンビをやつつけた後、相馬さんも立てるようになったし、烏丸達を探すことにした。

「それにしても奥に進むにつれて、ゾンビの数多くなってないか？
今では襲ってくる何匹ものゾンビを普通に倒している。

まあ、弱いと分かれればこっちのものだけだな。

「本当に幽霊屋敷とはビックリですね」

「相馬さんはゾンビとかは怖くないのか？」

「怖くないよ。多分皐月ちゃんがすごい怖がってると思うよ」

「あゝなんか想像つく」

俺は皐月が怯えてる中、烏丸と朝霧先輩がゾンビと戦ってる姿を想像し、笑ってしまった。

「それより、私のこと相馬さんじゃなくて、和って呼んでほしいなあ。私だけ隼人君って名前と呼んでるのに・・・」

「いや、俺あんま名前と呼ぶのは好きじゃないんだ」

「うそだ」

これは本当に本当だ。亜矢は名前で呼ばないとむくれるから仕方ないし、皐月は毎日不幸の手紙をくつ箱に置いていくからしょうがなく呼んでいるだけだ。

それに悠夜とか光喜の場合も兄弟だから名字で呼んだらややこしいしな。

「まあ、名前で呼ぶのは特別な奴だけだ」

「あゝそれって私はどうでもいいってことですか？」

「そんなことない・・・って・・・ええ？」

俺は相馬さんの方に目をやると同時に、隣の部屋の窓に何故か人体模型がへばりついていた。

「ギャーーーーー」

俺たちは人体模型に追われながらも、また全速力で逃げ帰った。これが夜だとマジ怖いぞ。

「つてあれ？相馬さん？」

俺は一緒に逃げてきた相馬さんがいないことに気づいた。

「うわ、何処かに置いてきちまった！」

俺は急いで逃げて来た道を引き返した。

相馬さんが心配だからでもない、男が逃げたからでもない、ただ一人が嫌だったからだ。

「相馬さん！」

間一髪、人体模型に襲われかけた瞬間、『裁きの剣』で切り倒した。

だが、その人体模型はゾンビみたいに簡単に死んでくれなくて、切った部分がまたくっついて、復活しやがった。

「相馬さん、ここは俺に任せて早く逃げて！」

「何言ってるの！？それでも私、隼人君と同じ神兵なんだから」

「女に守ってもらうほど俺は弱くないって」

俺は相馬さんを強引に逃がし、人体模型に向かって剣を構えた。

「神兵の名は伊達じゃないことをみせてやるぜ！！」

俺は再び切りかかったが、人体模型はその場に落ちていた鉄パイプを拾い、受け止めた。

「俺とやろうつてのか？上等だ！！俺は喧嘩は強い方なんだぞ」

相手はたかが人体模型。人間である俺、しかも神兵の俺が負けるわけがない。

「おりゃー」

大きく振りかぶって、人体模型の首を吹き飛ばしたが、それと同時に左肩に激痛が走った。

「そりゃ反則だろ？」

人体模型は頭が吹っ飛んでも尚、俺に襲い掛かってきた。

しかも、いつの間にか人体模型以外にゾンビやらマネキン人形やらに囲まれていた。

「数が多ければいいと思うなよ！見せてやるよ、俺の本当の力を！」

『ソウルイーター・冥怖^{めいふ}』

人体模型とその他は俺の自称最強魔法をくらって、跡形もなき吹き飛ばす予定だったが

何故かソウルイーターは暴発して、自ら爆発して、俺はそのまま気を失ってしまった。

第5話：結界を解きに・・・（後書き）

力が暴発して気を失ってしまった隼人。
このあと一体どうなるのか？

第6話：音葉と琴葉（前書き）

敵に囲まれ、ソウルイーターの力で一掃しようとしたが暴発してしまい隼人は気を失ってしまった。

第6話：音葉と琴葉

ここは一体・・・

そうか俺はあの時まだ使い慣れてないソウルイーターの力を使つて・・・

「・・・・・・・・だから」

ん？なんか話し声が・・・

「ダメって言うてるでしょ！怪我人なんだから」

「あ！起きた」

俺が目覚めると薄暗い個室、目の前には黒髪の腰までのロングヘアの女の子と

黒髪の肩ぐらいまでのショートヘアの女の子がいた。
ってかどこかで見たことあるような。

「ほら、お姉様がいろいろ調べるから」

「だって相手は敵なんだよ。何か持つてるかもしれないし」

思い出した！こいつら片桐源次郎の孫娘の2人。

つということは俺は捕まったのか・・・？

噂では泣こうがわめこうが簡単に人を殺せると聞いたけど、全然そんな雰囲気には見えないんだけど

「おい、もしもっし」

「あ、え？」

不意に話し掛けられたせいで、恥ずかしいぐらい変に高い声で返

事をしてしまった。

「大丈夫？もう！お兄様が無茶するから」

女の子が暗闇の方へ向かって言った。

「俺は何もしたらん。そいつが勝手に自爆したんだ」

奥から黒髪でスポーツ狩りの男の人が出てきた。

歳は二十歳前後くらいでネックレスやらピアスなどアクセサリ―をハデにつけていた。

「それよりお前、あいつらの仲間か？」

男はいつ撮ったのかわからない、幹部会の人たちがこの館に入ろうとしている写真を俺に見せてきた。

まずいなあ、このまま仲間だと言えば瞬殺かもしれないし、しかし裏切るわけにもいかない・・・

その前にこの写真が本物だとしたら、もう結界は解けたってことか。

「どうなんだ？」

男が俺の首にナイフを突きつけてきた。

「そんなので脅してるつもりか？」

「なんだと？」

男は俺の首にナイフをかすらせた。

首からは静かに血が流れ落ちた。

「やめて」

髪の毛の長い方の女の子が俺に覆い被さってきた。

「琴葉、そこをどけ！」

「怪我人に怪我させてどうするんですか？お兄様もおじい様みたいなやり方をしないで下さい！」

「琴葉・・・」

男の方が折れたと思い、安心しかけた時に、また誰かこの部屋に入ってきた。

「瞬、音葉、琴葉、出るぞ!!」

その男は片桐源次郎だった。

「ん？人質がいるのか？」

源次郎がそう言つと、手が緑色に変化し、魔物みたいな手になつていった。

見た瞬間有言わずに殺しにかかるつてマジでやばいなあ……縛られてはいないが、抵抗しても意味なさそうだし……

「おい、クソジジイ！こいつは俺らが交渉用のために捕らえたんだ！勝手なことするんじゃないやねえ」

「お兄様……」

何故か知らないがさっきまで俺をナイフで脅していた男が俺を庇ってくれていた。

「交渉？クカカカ、笑わせるな！お前はあいつらに何を望む！こんな下っ端を捕らえたぐらいで向こうが下手に出ると思わんことだな」

源次郎はそう言い残して去っていった。

「あのジジイが!!もうちょっと考えて行動しろよな」

若い男もブツブツ独り言を言いながら、部屋を出て行った。

「ごめんね、あの2人はいつもあーなの」

「そうだ！自己紹介がまだでしたね。私は琴葉。片桐琴葉です。琴葉って呼んでください」

髪の長い方が言った。

「私はこの子の姉の音葉よ。因みにさっきの兄が片桐瞬。普段はやさしいんだけどね」

琴葉に続いて髪の短い方も自己紹介した。

ってか何故敵である俺にこんなに馴れなれしいんだ？
悪いやつじゃないのはなんとなくわかるんだけどなあ。
ここは俺もしとくべきか？

つと考えるる時にまた向こうが口を開いた。

「君は鬼庭隼人君だね？幹部会、光明寺大和の神兵の」
「な……」

俺はとつさに身構えた。可愛い女の子と油断してたが、一応こいつらも片桐の血を引く奴らだからな。

「そんな警戒しなくてもいいよ。私達はそんなことしないから」
つと微笑みかけてくれた。

「どつという意味だ？」

「みすみすあなたたちを死なすわけにはいかないってこと」

どうやらこの子達は俺たちが負けることを前提に話してるらしい。
「言つとくけど、光明寺さんらは俺みたいにそう簡単にはやられないぞ！」

しかもあの幹部会5人が揃えば敵なしって言われてるぐらいだ」

俺は幹部会のことを自慢げに話したが、彼女たちは俯いたまま顔を横に振った。

「それでもおじい様には敵わないわ」

ドカーーーーーン

琴葉がそう言ったと同時に近くの方からものすごい爆発音が聞こえてきた。

「始まったみたいね。とにかく隼人君は……」

俺は琴葉の言う事を無視し、その部屋を飛び出した。

「どこいく気なんですか？まだ怪我が……」

「戦う気がないなら急いでここから離れろ！」

俺は彼女達にそう言い残し、爆発が聞こえた方に急いだ。

あの子達はほつといても害はない。害があるのは源次郎とあの男だ。

そう確信した俺は、爆煙の中に飛び込んだ。

まっさきに目に入っただのは幹部会の5人だ。あと烏丸達も相馬さんも一緒だった。

「隼人！無事だったのか！」

俺を最初に見つけた烏丸がそう言い、俺のほうに近づいてきた。それに続いて他の皆も集まってきた。

「無事でよかったわあ」

「こんなことで死んでもらったら困るからな」

「すみませんでした」

俺は幹部会の人たちに謝り、相馬さんの近くに寄った。

「心配したんだからね」

「ごめん」

よく見ると涙目で肩を小刻みに震わしていて、今にも抱きしめたかった。

「涙の再会はこの世でやれ!!」

爆煙が消え、そこから瞬が飛び出してきた。

カン

「あの世で涙の再会をするんはあんたとあんたのじいさんらや!!」
光明寺さんが如意棒で瞬の攻撃を受け、弾き返した。

「ここはあの人たちに任せて、俺たちはあの女の子を探そう」
烏丸がそう言い、俺たちを幹部会との戦いの場から引き離そうと

した。

「待ってくれ。あの子達ほっておいても大丈夫だ」

俺は烏丸を呼び止めた。

「ほっておいても大丈夫ってどういうことだ？」

朝霧先輩が俺に問い掛けてきた。

俺は捕まっていたときのことを、皆に話した。

「信用できないな」

「あいつたちの策略じゃないのか？」

「あの源次郎の孫だしねえ」

「イイ！俺もあの子達にやさしくされてみてえ」

烏丸以外は琴葉達のことを疑った。

無理もないか、俺も会うまではそういう奴だとは思いつかなかった。
しな。

「ほんとに大丈夫だ！あの子達は……」

【メテオフレーム】

俺が話してる最中にどこからか無数の火の玉が飛んできた。

「敵襲か？どうやら信用するのは無理みたいだな」

朝霧先輩がそう言い、周囲に氷で出来たつららを召喚した。

言い忘れたが、朝霧先輩の能力は氷の属性の特殊技を使うことが出来る。

烏丸は土、皐月は火、相馬さんは強化の属性だ。

俺は朝霧先輩と同時にソウルイーター発動の準備をし、敵を確認した。

「つな……」

見間違いだとも思えた。さっきの攻撃は音葉の魔法だった。

側には琴葉と源次郎もいた。

「おいおい隼人！話が違うみたいだが？」

烏丸も応戦の準備をし、地面の土を自分の身体に貼り付け、岩の鎧を纏った。

「クカカカカ、まずはお前たちから血祭りに上げてくれるわ！」

源次郎は自らの右手を巨大な鉈に変えて、俺たちの方へ飛んできた。

「なんだあの魔法！」

「は、はい……」

ブシャッ

隣から生暖かい液体が飛び掛ってきた

「カッカッカ、まずは一人」

いつの間にか朝霧先輩の胸が源次郎に切り裂かれていた。

あの液体は血だったのか……

俺は瞬時に源次郎との間合いをとろうとした瞬間、ものすごい風圧に押された。

「ぐわぁ」

一部屋、二部屋、の壁を突き抜け、ようやく止まった。

「あなたの相手を私です」

「音葉……」

第6話：音葉と琴葉（後書き）

いよいよ、本格的な戦い！

何故音葉達は敵に回ったのか？

第7話：ソウルイーターの能力（前書き）

味方だと思った音葉たちの突然の不意打ちを受けた隼人。
しかも味方と離れ離れになり音葉と一騎打ちに！
この勝負の行方は？

第7話：ソウルイーターの能力

「どうして？」

音葉は崩れた壁にもたれかかっている俺に問い掛けてきた。

「なにがだ？」

俺はそのままの姿勢で問い返した。

どうしてと聞きたいのはこっちのほうだった。

まさか戦うことのない相手と戦うハメになってしまったのもあるし、1番痛いのは裏切られたからだ。

いや、俺が勝手にあの2人のことを信じていただけか……

「どうして、ここから出て行かなかったの？」

「出ていくもなにも、俺はお前たち、音葉達を殺しに来たんだ。出て行ってほしいなら

俺じゃなくて幹部会の人に言ってくれ」

俺は服についたホコリをはたきながら立ち上がった。

その時、一瞬立ちくらみのような感覚に陥ったが、すぐに治ったから気にはしなかった。

「私は一人でも多くの人を助けたかった。なのに……」

【シャドウフレア】

音葉の手のひらから無数の黒い火の玉が現れ、俺に飛ばしてきた。助けたいんだっただけで逃がしてくれればいいのに、なんで攻撃を仕掛けて来るんだよ。

まあ、やるからにはやってやる。

「こんなもん全てはね返してやるぜ！【ソウルイーター・裁きの剣】

黒い火の玉を切り伏せながら、俺は音葉に向かって切りかかった。でもいつものより身体が重いような気がするが……気のせい

か？

ほとんど事はうまく進んでいたの、大して気にすることはなかった。

「そんなので勝った気になるなよ！」

俺は音葉に向かって剣を思いっきり振り下ろしたが、剣は空を切るかのように軽かった。

「っな・・・」

目を向けると音葉は霧のように揺れながら、俺の目の前から姿を消した。

「残像よ」

【ヘビースクラップ】

声のする方へ振り返った瞬間、腹にとてつもなく重い衝撃がきた。
「グハッ」

あまりにも重たい攻撃で自分の足だけで立っていられなくて、剣を杖代わりにし音葉を睨みつけた。

「信徒よりはしぶといみたいね」

音葉がそう言って、右手を横に振り上げた瞬間、今度は俺の左頬に衝撃が走り、壁を突き破り外まで吹き飛ばされ、木にぶつかって止まった。

一体どうなってるんだ・・・かなりの間合いはあったはずだ。
これが魔法使いの力か？

畜生、もうビクとも身体が動かねえや・・・

「どうしてそつとしておいてくれなかったの？」

「あ・・・？」

ダメだ。もう声もだせねえ

「なんのために私達がこんな所に済んでたかわかる？」

泣いているのか？声が震えて聞こえるが・・・クソ！目も開けるほどの力も残っていないのか

「もう私達の前に現れないでね」

そう言われた瞬間、俺の身体が地面から離れた。

ここまでか・・・流石片桐の血を受け継いでるだけあるな。

俺は死を受け入れ、眠ろうとした瞬間

「隼人ー！」

「うげっ」

光明寺さんの声が聞こえてきたと同時に、また身体に痛みが走った。

多分浮いていた身体が地面に落とされたのだろう。

「何そんなところで寝とるねん！ワイが助けにきたったんやから、さっさと起きい」

つと如意棒で俺の頭を頭を小突いているのがわかった。

そんなこといわれても身体が・・・ってアレ？身体が動く？

俺は不思議に思い立ち上がったが、さっきまでの痛みはなくなっていた。

「お前が捕まった時に神経かどつかをいじられとったんやろ。」

マジっすか？通りで身体が言う事聞かないと思った。

俺はとっさに剣を召喚し、再び音葉に向かって構えた。

「ちょっと感傷に浸りすぎちゃったかな。」

音葉残念そうに呟き、左手の指の間に4本のダーツ、右手に細長い剣を召喚した。

「女やからって、手加減はせんで！」

光明寺さんは如意棒を頭上で回しながら、右から回りこんで音葉に突撃した。

俺はそれに便乗した。

「幹部会の力見せてもらおうかな」

音葉はダーツ4本を連続で、向かってくる光明寺さんに投げつけた。

それを光明寺さんは受けようとせずに避け、後ろにいた俺の方に飛んできた。

「こんなもの」

「あかん！」

俺はそのダーツを叩き落とした瞬間、ダーツは起爆し、中から無数の針が飛び出してきた。

一つ起爆すると、後の3本もそれに乗じるように起爆し、針が飛び出してきた。

【ソウルター・ブラッドシールド】

自分の血を飛ばし、なんとか針の勢いを殺した。

この技は俺が流血してる場合しか使えないし、必要以上に出血するからあまり使いたくなかったんだが・・・

「危なかったなあゝこりゃ毒針やでえ」

落ちていた針を、マジマジと見ながら言われた。

防いで正解だったようだ。

「うゝ」

音葉は急に頭を悩ませて、俺たちに背後を見せて逃げようとした。

「【メデューサ】そいつが逃げんように見張っとけ！」

光明寺さんがそう言った瞬間、無数の首を持つ生き物が音葉の目の前に現れた。

あれが、魔力の化身・・・

「ここまでやらしといて、今更逃げるのはなしやろ？」

光明寺さんは、ゆっくりと音葉に近づいた。

「来ないで！来たら・・・」

「来たらどうなるんや？」

いつの間にか音葉の両手足が石化していた。

「年貢の納め時やな」

光明寺さんが音葉の目の前に如意棒を突き出した。

「それはどうかな？【デュラン】やっちゃって！」

いきなり巨体な暗黒騎士が光明寺さんの背後に現れ、剣を振り下ろした。

「光明寺さん！」

カン

光明寺さんは振り返らず、如意棒を上突き出して、暗黒騎士の攻撃を受け止めた。

「やっぱ、そうきたか。魔法使いのクセに魔力の化身を出さんのはおかしいと思っただわ」

そう言っただ暗黒騎士の剣を振り払い、間合いを取った。

すごい、これが魔法使いと幹部会との戦いかあ。

「こんな簡単に受け止められちゃうなんて・・・」

音葉は両手足を石化されているにも関わらず不敵な笑みを浮かべている。

「おい隼人！」

「はい？」

「お前、あいつの魔力の化身を殺れ。ワイはあいつの手足を石にさせながら戦うのはちときついねん」

え？俺があだ暗黒騎士と？勝てるはずねえだろ

「今のお前だと無理だが、あいつの力を吸い取れば勝てる。ワイのメデューサの力も少し、分けたる」

「あの・・・意味がわからないんですけど」

「黙っとったけど、お前のソウルイーターはまだ不完全やねん。魔力の化身の力を吸収して、より強化され、その紋章の魔力の化身が

生まれるんや。」

知らなかった。そんな効果があつたなんて・・・

「でも吸収ってどうすれば・・・」

「なんもせんでええ。ソウルイーターを発動させながらその紋章を突きつけたれ！」

「いつまで待たせる気？デュランもうやつちゃっていいよ！」

痺れを切らした音葉は俺たちに魔力の化身を突撃させてきた。

「まずはワイのメデューサから吸収せえ！」

「はい！で、でもそんな事したら光明寺さんの化身が・・・」

「能力を吸収するだけや！吸収する言っても、化身が消えたり弱くなったりとかはせえへん！」

その言葉を聞き少し安心して光明寺さんの魔力の化身、メデューサに紋章を突きつけた。

【ソウルドレイン】

その瞬間見た目は変わらない気がするけど、どこかパワーアップしたかのよう to 思えた。

それに新しい技も頭の中に流れ込んできた。

それじゃあ早速使わせてもらおうかな。

【ソウルイーター・蛇眼】

メデューサの技をソウルイーターが吸収したため蛇眼が使えるようになった。

蛇眼のおかげで暗黒騎士の動きは一瞬止まった。

「え？一瞬だけですか？」

「まだ隼人の力が弱いんや！強かったらいくらでも止めてられるし

石化させたりできる！ワイみたいにな」

光明寺さんが音葉に向かつてさっきの不敵な笑みを返した。

「それで勝ったつもりなの？そんなのでは私のデュランは止められないわよ！それに・・・」

音葉は館の方に目をやった。

「お姉様！」

音葉の視線の先に琴葉がいた。

【デジョン】

琴葉が光明寺さんのメデューサを、黒い霧で包み込んで消し去った。

「つち、美里らは何しとるねん！」

メデューサが消えたため音葉の石化を解け、光明寺さんは俺のほうへ間合いを詰めた。

「琴葉、そっちは大丈夫なの？」

「はい。あとはおじい様に任せてますお兄様は・・・でも幹部会2人と神兵2人ぐらい余裕だと思います」

「なっ・・・俺は耳を疑った。あと4人ってことは、もう4人やられたってことか？」

「こりゃキツくなってきたわ」

光明寺さんは楽しそうに笑いながら如意棒を構えた。

「なんかすごい楽しそうなんですけど・・・」

第7話：ソウルイーターの能力（後書き）

次回は隼人じゃなくて烏丸サイドで琴葉との戦闘シーンを書きたい
と思います。

でもこの7話で琴葉が現われたってことは……

第8話烏丸達VS琴葉（前書き）

この物語は烏丸サイドで6話の続きです。

第8話 烏丸達VS琴葉

「カッカッカ、まずは一人」

「朝霧先輩!!」

俺が構えた瞬間、源次郎は瞬時に俺の隣に移動して、右手の鉈で朝霧先輩を切り裂いた。

「ぐわぁ」

それと同時に朝霧先輩の反隣にいた隼人が急に吹き飛ばされた。

こいつらやべえ・・・こんな奴相手にできるかよ。

こっちは和ちゃんと皐月ちゃんの女2人、敵は総大将の源次郎と孫娘が一人、3対2でも勝てる気しないんだけど・・・

「次はお前だ」

一瞬の出来事に呆然としていた俺を、源次郎のこの一言で我に目覚めた。

振り向くともう既に目の前に鉈が・・・

やられる・・・俺は咄嗟に目をつぶってしまった。

ドッカーーーン

「最後まで諦めるな!」

目を開けると、そこには水無月さんたちがいた。

他に光明寺さんに沙耶ちゃんに美里もいた。

つということはあの男と戦ってるのは久遠時さん一人ってことか・

・・・

「カッカッカ、不意打ちとはやるな、小僧!」

俺と20メートル程離れた場所に源次郎がいた。

「源次郎は俺が抑えとくから、残りのメンバーで先にあの女を殺れ」
水無月さんは皆にそう命令し、源次郎に飛び掛った。

「ワイら幹部会3人を一気に相手せなあかんとは可哀想やなあ」

光明寺さんが泣くフリをしながら、髪の毛の長い女の子を挑発している。

確か名前は琴葉ちゃんだったっけな？

「可哀想なのは貴方の神兵です。捕まった時に薬を盛られてとも知らずに戦ってるんですから・・・」

琴葉ちゃんは何故か悲しそうに言った。

なんであんな顔するんだよ？しかもそういうこと言っちゃっていいのかわ！

「大和！早く隼人君の所へ行つてあげた方がいいんじゃない？」

「罾かも知れんけど、あいつ一人じゃあ心配やからちよい行つて来るわ！」

沙耶ちゃんの咄嗟の判断で、光明寺さんは隼人の救援に向かった。

「これでどうにかこの場は凌げそうです」

「真田先輩あの女すごいム力つきます！」

自分がピンチな状況でも敵をバカにしている琴葉を見て、皇月ちゃんに怒り出した。

「そうね。私達がそう簡単にやられない所を・・・え？」

一瞬目を離れた瞬間、琴葉ちゃんが消えた。

「一体どこに・・・」

沙耶ちゃんも和ちゃんも皆、武器を手にして、いつどこで現れてもいいように身構えた。

当然俺も岩石で拳を強化した。

「そんなに背後をから空きにして、刺して下さいって言うてるようなものですよ」

シュッ

沙耶ちゃんは背後から琴葉ちゃんの気配を感じたのか、後ろに剣

を振り回したが空を切った。

「今度背中向けっぱなしだと、プスっといっちゃうからね」

「うお！」

俺の背後からそういう声が聞こえ振り返ったが、背後には誰もいなかった。

「背中合わせにして壁を作るのよ」

美里の指示通り、俺らは背中を合わせ、前方だけに集中した。

「どこに目つけてるんですか？」

「え？」

「危ない！」

ズズズズシャ

地面から鋭利な針が突き出てきて、俺らを庇うために美里が犠牲になってしまった。

「あ、これは思いがけない収穫です。」

「真田先輩！！」

皐月ちゃんが美里を必死に助けようと針に登り始めた。

【ウィンドクロー】

琴葉ちゃんが皐月ちゃんに手のひらを向けた

「皐月ちゃん」

俺は咄嗟に皐月の前に飛び込み庇おうとしたが、何か風がすり抜けただけだった。

「キヤーー」

ズシャズシャズシャズシャ

「ひどい……」

その技は皐月ちゃんを宙に浮かし、何回も何回も空中で切り裂いた。

「わざわざ助けに行かなくても、針は抜いてあげるから」

そう言つと、美里に刺さっていた土でできた針が地面に引いていった。

「真田さん？皐月ちゃん？大丈夫？」

和ちゃんが2人の生存を確かめに行った。

俺も行きたい所だが、またこいつから目を離すと何をするかわからないから、じつと睨みつけていた。

「このままじゃ魔女狩りの面目も丸つぶれね」

沙耶ちゃんが俺の隣に来て囁いた。

思えば今生き残ってる中で、唯一の幹部会なんだよなあこの人。

「1分でいいわ。突撃して時間を稼いでくれる」

そんな短い時間で何が出来たのかと疑ったが、今の俺にはそれしかできそうになかったので承諾した。

「うおおおお！」

【ニードルシャイン】

俺は突っ込みながら、土で出来た無数の針を琴葉ちゃんに飛ばした。

【エアースールド】

しかしその針は当たる直前でポトポトと落ちていった。
「まだまだー！」

【ブレイクヴァン】

両手を地面に当て、土で出来た一つの巨大な手を琴葉ちゃんの前
に召喚し、わしづかみした。

「あ……」

よし！下手したら倒せるぞ！

【ブレイクヴァンショット】

琴葉ちゃんをわしづかみにしてる巨大な土の手に触れて、その手
を爆発させた。

「キャッ！」

ダメージあり！このまま倒してやる！と思ったたら
「はぁ？人体模型？」

無数の人体模型が俺のほうへ飛んできた。

【砂嵐】 サイフルス

砂嵐を起こし、人体模型をなんとか回避した。

「間に合ったようだな」

「お兄様……」

うわ！敵の援軍来たよ……確か名前は瞬だっけ？

つということはこいつと戦っていた久遠時さんはどうなったんだ？
「すいません。逃げられてしまつて……いい所でしたか？」

瞬が出てきた方向から、服とかボロボロの久遠時さんが出てきた。

「うち、まだ生きてやがったのか。しぶてえなあ」

瞬はめんどくさそうに、矛先を久遠時さんに向けた。

「あなたは余所見していいんですか？」

しまった！また目を離れた瞬間、琴葉ちゃんが……

「私のこと忘れてません？」

沙耶ちゃん！

ジャムヴウル
【雷龍】

「琴葉！！」

バリバリバリバリ

瞬時に瞬が琴葉を突き飛ばし、瞬が琴葉の身代わりになり、沙耶の最高ランクの雷魔法を受けた。

「お兄様……」

ほんの一瞬だった……まばゆい閃光が走ったと思ったら、瞬が感電して……

黒焦げになった瞬を見て、琴葉はその場に座り込み、泣きじゃくった。

「あなたもすぐにお兄さんの所へ連れてってあげるわ」

沙耶ちゃんは、瞬の横で泣いている無防備な琴葉ちゃんに刃を向けた。

「待ってください！」

俺は両腕を広げ、いつの間にか琴葉ちゃんを庇っていた。

「鋭霧、そこをどいてちょうだい」

「嫌です」

本当に悪ならば兄が死んでも涙など見せないはず。ここまで取り乱さないはず……

「烏丸君、今君がしている行為は僕たちにとって立派な反乱だよ。もし君がこのままこの子を庇いつづけるなら容赦なく君も殺す」

ボロボロの久遠時さんが真剣な目で言った。

「最後のチャンスよ。そこをどいて」

「……」

俺は女の子一人守れないとは情けない……

ドカーーーン

「な、なに？」

「龍二！どうしたんですか？」

さっきの音は水無月さんが壁を突き抜けて飛んできた音だった。

「油断した」

そう言つて、水無月さんはすぐに立ち上がった。

「カッカッカ、中々骨のある小僧だわい」

パン

何かをひっぱたく音が部屋中に鳴り響いた。

「琴葉！何をしておる！ここはいいからさっさと音葉の所へいってこい！！」

源次郎が琴葉ちゃんの目の前に来て言った。

琴葉ちゃんは両手で右頬を抑えていた。

さっきの音は源次郎が琴葉ちゃんの頬を叩いた音だった。

つかいつの間に移動したんだ……

琴葉ちゃんは目に涙を浮かべながら、無言で隼人がいる方向へ走っていった。

「行かせない！」

「それはこっちのセリフだ！」

ブシュ

突然朝霧先輩がやられた時のことがフラッシュバックしてきた。

今その光景と全く同じ光景で、沙耶ちゃんが切り裂かれた。

「沙耶！！！！」

「カッカッカ、あと3人……いや4人か」

源次郎はそう言い、変な方向へ走っていった。

あっちの方って．．．．．和ちゃん！！

「鋭霧！急ぐぞ」

水無月さんに背を叩かれ、俺も急いで源次郎を追った。

第8話烏丸達VS琴葉（後書き）

次回はまた7話の続きの隼人サイドに戻ります（通常通り）
この烏丸サイドの続きを書くかは未定ですw

第9話：戦いの終幕（前書き）

ソウルイーターの本当の能力を知った隼人。

音葉、琴葉VS光明寺、隼人の勝負の行方は？

（注：これは7話の続きです）

第9話：戦いの終幕

「隼人、こりや長期戦になったらワイらの負けや。だからお前はさっさとあいつの魔力の化身を吸収しろ」

そう言い残し、光明寺さんは音葉と琴葉に突っ込んだ。

暗黒騎士デュランは構わず俺のほうへ突撃してきた。

「吸収しろいわれても、こいつは全くスキがないのにどうしろと？」

蛇眼を使っただけ動きを止めてる間に吸収する手もあるが、俺の力じゃあ1秒が限界だ。

いや、1秒もあれば十分だな。

そうこう考えてるうちに暗黒騎士が目の前まで来た。

「今だ！」

暗黒騎士が大きく振りかぶり、俺に当たる直前ギリギリで

【ソウルイーター・蛇眼】

動きを止めて瞬時に後ろに回った。

「よっしゃあ！ソウルドレ……ぐは！」

「私のデュランに何する気？」

音葉が俺に体当たりしてきた。

「つてか紋章が熱い！中途半端に吸収しちゃったせいで、おかしくなってるやがる」

それより光明寺さんは……いない

琴葉もついでにいないけど一体どこへ……

「2人は館の中にワープさせたわ。まあ琴葉まで飛ばす気はなかったんだけどね」

「つということは、またふりだしにもどったってわけか。」

そんなことより紋章が焼けるように熱い。

こりや早めに吸収しないとやばいな。

俺は瞬時にそう判断し、音葉を無視し、暗黒騎士デュランに飛びついた。

だがデュランは剣を横になぎ払ったせいで、俺との間合いが一気に広がってしまった。

【ギガフレア】

デュランの攻撃を避けて地面に着地した瞬間、音葉の魔法が俺に直撃した。

「グハッ……」

【アイアンブレス】

【エアロブロウ】

俺の体が宙に浮かされたと思えば、変な重力に地面に押しつぶされ、強烈な風でカマイタチで吹き飛ばされた。

「っち、見事な連携じゃねえかぁ……」

流石に今回ばかりはもう無理か……

「デュラン！ トドメを刺してきてちょうだい」

「いや、まだチャンスはある！」

デュランは少しづつ音葉から離れ、俺に近寄ってきた。

チャンスは一回！これを外せば終わりだ。

俺はデュランがギリギリまで間合いを詰めるのを待ち……

「よし、今だ！！」

【ソウルドレイン】

暗黒騎士が大きく振りかぶった瞬間に、俺は飛び上がりデュランの能力を吸収した。

「ちょっと、デュランに何したの？」

「いや、何もしてねえぜ。ちょっと力をもらったただけだ」

「どうやら少しだけだが、体力も回復するみたいだ。」

「どれ、こいつの力がどんなのか試させてもらうぜ。」

【ソウルイーター・勇者の剣『デュランダル』】

「ほお、暗黒騎士から吸収したのに、勇者の剣とは変わってるなあ」
俺は先ほど手に入れた能力（太剣）、デュランダルをマジマジと見つめた。

「何？そんなのを出してどうする……」

ビュン

デュランダルを横に振っただけで真空波が飛び出し、暗黒騎士デュランを消滅させた。

「うそ？どうして……？そんなはずは……」

【フレイムフォース】

音葉は炎の壁を作り、目くらまし代わりにした。

「そんなもん通用するか！」

俺は炎に飛び込んで背を向けていた音葉に、デュランダルを軽く突きつけた。

「動くな！」

そう叫ぶと音葉は立ち止まり、その場に座り込んだ。

「なあ……」

俺はデュランダルをしまい、恐る恐る話し掛けた。

「いいよ、殺して。私を殺しにきたんでしょ？」

「はあ？」

音葉は俯きながら言った。

「お前なあ、コロコロ態度変えるのやめろよなあ。さっきの威勢はどうしたんだよ？」

「ってかなんで俺は敵を慰めてるんだ？」

「うん。もういいの」

なんかわけのわからないこと言い出したぞ……

「お姉さま！」

俺が困り果ててる中、琴葉が館から駆け出してきた。

「おじい様が……」

「うん。わかってる」

そういえばデュランとメデューサを吸収したおかげで、魔力を感じられるようになっており、今思えば源次郎の魔力が感じられなかった。

水無月さん達が勝ったんだ。

ん？っということは……

「まさか、今まで操られていたと？」

「それに近いものです。おじい様の影武者が現れた時だけ、私達はおじい様に逆らうことができないのです」

琴葉が説明した。

「逆らったら、私達は殺される。それほどおじい様の力は強大なのです」

「ってかその前に影武者ってなんだ？いや、意味は知ってるけど俺らが戦ったのは影武者なのか？」

「ええ、本物のおじい様はどこにいるかはわかりません。でも私達が捨て駒にされたのは確かです。」

だから私達3人兄妹で静かに暮らしてたのに……

俺らが攻め上げてきたってわけか。

っということ……

「お前たち、今すぐここから逃げろ！ここにいたら殺されるぞ！」
座り込んでいる2人を立ち上がらせ、館の外の方へ引っ張っていった。

「これから2人でどうしろと言うのですか？」

今まで黙りっぱなしの音葉が、俺の手を払い叫んだ。

「またおじい様の影武者に見つかり、言いなりになり、誰かを殺してしまつて……」

「お姉さま……」

そう言つてまた座りこんでしまった。

「世間には音葉と琴葉は死んだと公表しておく。これで源次郎からも狙われずに済むだろう」

俺は2人にそう言い残してその場を去つた。

こつするしかできなかった。

俺が守つてやりたかつたけど……俺は無力だ。

「隼人無事やつたんかあ」

館に戻ると、皆が出迎えてくれた。

「あの2人は？」

戻つた瞬間予想通りの質問がきた。

「ちゃんと殺しました。今さつき、墓を作つてきた所です。」

こつ言え、俺がさつき館の外に出てても、おかしくはないと思つた。

「そつか……悪いなつらいことさせてもて」

光明寺さんが俺の肩を叩き励ましてくれた。

「じゃあ帰るか。早くしないと朝霧達がくたばつちまう」

「重てえ……」

烏丸の背には、朝霧先輩、真田、皐月、が乗つかかっていた。
安井さんと相馬さんは、水無月さんの肩に捕まり、辛うじて歩け

るほどの深手を負ってるみたいだった。

「それにしても、あの源次郎が二セモンとはやられたなあ」

帰り道、光明寺さんが愚痴を溢した。

「まあ、逆にあれが偽者でよかったんじゃないのか？本物だったら今の俺だったら勝てる気しないな」

「反則並に強かったからなあ、あのクソジジイ」

「そういえば、光明寺さん、館の中に飛ばされた後どうしたんですか？」

「ん？あゝ戦つとつた女を見失つてもて、捜しとるうちに龍二と合流して源次郎と戦つとつた」

はあゝ光明寺さんらしいですね・・・

「おいお前たち、喋つてて谷に落ちるなよ」

「なんやて？！お前を落としたるかいい」

そう言いながら、光明寺さんは、水無月さんを如意棒で谷の方へ突付いた。

「やめろつて！本当に落ちたらやばいぞ」

確かにこんな所で落ちたら助かりなさそう・・・

俺は一旦足を止めて、マジマジを谷を見下ろした

タタタタタタ

ん？誰かが走ってくる音？

俺が館の方へ振り返ると・・・

「瞬！」

「な！！あいつ生きてたのか！」

死んだと思つてた片桐瞬がすごい勢いで走ってきた。

「俺一人では死なん！お前も道連れにしてやる！」

「はあ？」

瞬はそう言つて思いつきり最後尾にいる俺の腰に纏わりついてき

た。

「うわわわわ」

俺はバランスを崩し、重心が谷のほうへいき、今にも落ちそうだった。

「隼人君！」

相馬さんが手を差し伸べてくれたが、俺の手はその指をかすめ谷に落ちていった。

「うわわわわわああああ」

「隼人！！！！！！」

第9話：戦いの終幕（後書き）

片桐家滅亡計画は失敗に終わり、しかも隼人は谷底へ．．．．
はたして隼人は無事なのか？

第10話：白魔導師と魔女狩りハンター（前書き）

片桐瞬と谷底へ共に落ちた隼人。
果たして無事なのだろうか？

第10話：白魔導師と魔女狩りハンター

痛ってえ・・・

ここに落ちるまでの間に、木の枝とかがクッションになったおかげでなんとか助かったみたいだが、

骨は完全に逝ってしまったてゐるみたいだ。

手足を動かそうにも激痛が走り、まったく動けない状態だ。

傍らには瞬が倒れていた。

こいつはもう死んだのか？

死ぬなら一人で死ねよ・・・

クソ、瞼が重くなつてきやがつた・・・

俺は死ぬの・・・か？

パチパチパチ

俺は木々が燃える音で目を覚ました。

その場所は俺が落ちた場所ではなくて、何処かの小屋の中の布団の上にいた。

しかもまた傍らには瞬が違う布団で眠っていた。

「あ、目が覚めました？」

奥から女の人が出てきた。

黄色い髪のツインテールで、エプロン姿で現れた。

「お前が助けてくれたのか？ありがとう」

「いいえ、そんな大した事してませんから」

彼女はそう言い、両手で俺の片手を握った。

「っな・・・」

一瞬戸惑ったが、彼女の手のひらから緑の光が発して、治癒魔法

をかけてると気づいた。

ん？治癒魔法？つてことは魔法使い？

「うん！もう大丈夫みたいね」

今思えば、あの時全身の骨が折れてたはずなのに、今では何の変わりもなく動いている。

「お腹すいてるでしょ？今、何か持ってきてあげるから」

彼女は立ち上がり、また奥の部屋に行ってしまった。

つていうか俺がここにいたらまずいだろ？

多分今ごろみんなは俺を探してるだろうし、もし見つかったとしても、あの人は殺される。

ということは俺がここから出て、早く本部に戻ればいいだけじゃねえか。

そうと決まれば早い所・・・

「あ、まだ動いちやダメじゃないですか」

俺が布団から飛び起きたと同時に、彼女が部屋に入ってきた。

「怪我人なんですから、まだ動いてはいけません！はい、おかゆ」

そう言つて無理矢理布団に戻されて、おかゆを突きつけられた。

俺は病人ですか！

「ところで君、名前なんて言うの？」

おかゆを食べてる最中に話し掛けてきた。

「鬼庭隼人。」

「そう。私は井上美咲。いのうえみさきよろしくね、鬼庭君」

「おい美咲！今帰ったぞ」

奥から低い声が響いてきた。

「お、坊主、目が覚めたか」

その人はすごい巨体で肌の色は色黒。白髪のとゲトゲ頭で背には背丈ほどの槍を肩にかけていた。

「お帰りなさい、猛さん」

井上さんはその大きい人に笑顔で出迎えた。

この人たちは夫婦なのか？それにしても全くつりあわないぞ

「祝いだ祝い！今日は飲むぞ！ほら坊主も来い」

そう言われ、俺は無理矢理布団から出され、イスに座らされた。

「ちよつとまだ怪我人なんだから・・・もう、仕方ないわね」

仕方ないんですか？井上さん

「坊主名前はなんていうんだ！」

「え、鬼庭隼人です」

なんで俺はこんなおっさんに絡まれてるんだ・・・

助けてもらったのはありがたいんだが、一刻も早くここから出ないと皆が心配するだろうし、それに井上さんの身も危ない。

「隼人か！俺は長瀬^{ながせたけ}猛だ。これでも有名な竜騎士なんだぜ！」

そう言い、得意げに十文字槍を振り回した。

でもよく見るとその槍は結構年期が入っていて、かなり使い込んでいるのがわかった。

「あの、その槍で何を・・・？」

「よく聞いてくれたぜ！隼人は魔女狩りって知ってるか？」

「！！！！」

「知らねえだろうなあ。魔法使いでもなんでもないしな。俺は魔女狩りハンターでその魔女狩りと戦っているんだ」

魔女狩りハンター。聞いたことないけど、幹部会の人たちは知っているのだろうか。

「それとこいつは真正正銘の魔法使いだ！」

「ちよつと猛さん・・・」

長瀬さんは笑いながら、井上さんの肩をバンバン叩いた。

ってか俺が魔女狩りって言わない方がいいな。

言ったとたんブスツつじやあたまんねえからな。

「おい隼人！なに深刻な顔してるんだよ！お、まさか全部嘘だと思ってるだろ？」

「い、いえそんなことは……」

「いいていいって、こんな話信じるって言う方が難しいもんな」
そう言つて長瀬さんは隅っこに移動し、横になった。

「ちよいと休むから飯ができたら起してくれ！」

井上さんに向かってそう叫び、目を閉じた。

なんかすごい豪快そうな人だ……。

「ねえ隼人君」

料理が出来上がるまで、椅子にもたれ腕を組みながら考え事をしている、急に井上さんに話し掛けられた。

「怪我人に言うのも心苦しいんですけど、調味料切らしてるみたいなので、一緒に買いに行くの付き合ってくださいませんか？」

いつもは猛さんが一緒なんですけど……」

そう言いながら長瀬さんのほうに目をやった。

豪快に大の字になり大きないびきをかきながら熟睡していた。

「あの猛さんの言う事信じていらっしやらないかもしれませんけど、私魔女狩りに狙われていて、一人で外に出られないんです。」

多分一人でも大丈夫だと思うんですけど、一応念のため……」

そう言つて井上さんは俯いてしまった。

うーん、もし狙われて俺ということがバレるものヤバいんだけど・

……まあしゃあねえか

俺はそんな軽い気持ちで井上さんの誘いを承諾してしまった。

「下の町まで降りなきゃ行けなかったんですけど、大丈夫ですか？」

井上さんは何回も、俺のことを気にしながら山を降りていった。

「もう全然大丈夫ですよ。アハハ」

それにしてもこれほど完璧に治せるとは、すごい白魔道師だなあ。
その後、俺たちは山を降りちゃっちゃと買い物を済ませた

「ぜえ、はあ、ぜえ・・・」

あのととき谷底に落ちたはずなのに何故登る必要があるんだ。

しかも片桐一家の屋敷に行くときよりもきついような・・・

「大丈夫ですか？もう少しですから頑張ってください」

女の人にリードしてもらうとは情けない。

しばらく歩くと上り坂から急に平坦の道に変わった。

この山なんかおかしいぞ、おい。

「井上さん、この山少しおかしくくないですか？」

「え？ああ、ここの地形のことね。何か知らないけど、この山には大魔法使い様がいるみたいなの。」

そのせいで変な異次元に入り込むことがあつて、知らない場所に出てきちゃうってわけ」

通りでおかしいと思った。多分大魔法使いってのは片桐一家のこ
とでまちがいないだろう。

っておい、異次元とかに入り込んでるんだったら、帰れないんじゃないのか？

「そんな心配な顔しなくても大丈夫だよ。きっと帰れるから」

何の根拠もない言葉だが、満面の笑みで言われちゃあ信じるしかなかった。

ガサガサ

木々が揺れ、今までなかった音が辺りを響かした。

「え、え、まさか・・・」

そのまさかだ。信徒が現れやがった。

こんな時に限って・・・俺のことバレなきやいいけど。

「井上さん。身を低くして」

俺は井上さんをしゃがませ、木の枝から枝に飛び回ってる信徒に目をやった。

1、2、3、4、4人か。これだったらなんとかかなりそうだ。

【ソウルイーター・蛇眼】

俺は信徒の動きを止め、落ちてきた所を撲殺しようとしたが・・・

無反応

「な！なんで発動しないんだ？」

【ソウルイーター・勇者の剣、デュランダル】

・・・・・・無反応

ダメだ。何故かソウルイーターの力が使えなくなってる。

「井上美咲！覚悟」

4人の信徒は上空から一斉に井上さんに襲い掛かった。クソオ、四方から攻められたら庇いきれん。

俺は無我夢中で井上さんの上に覆い被さった。

ズシャッ

「グハッ！」

俺の背に4本のナイフが突き刺さり、瞬時に抜かれた。出血多量で殺す気が・・・

「っち、邪魔が入ったか」

「隼人君！」

「大丈夫です」

俺は井上さんをそのまま動かないように言い聞かし、4人の信徒を睨みつけた。

「おうおう、数分後にもそういう顔できるのか楽しみな所だが、あいにく俺たちも忙しい身でね。今すぐ死んでもらおう」

確かに、もう既に血を流しすぎて、意識が飛びそうだが……

バキッドカツ！

一瞬にして向かってくる信徒2人を殴り倒した。

どうやら身体能力まではなくなっていないみたいだな。

「な、なんだこいつ……ただの人間じゃねえのか？」

俺のことを知らないってことは支部の信徒か。

「クソ！一旦出直した」

残りの2人の信徒は仲間を置いていき、逃げ去ってしまった。

「隼人君だいじょうぶ？今治癒魔法で……」

ほんわか背中に温かみを感じ、落ち着けたが、流石に流れ出た血まで元に戻すことはできず、俺は貧血で倒れた。

「あ……」

目覚めたのはまた、前と同じ布団の上だった。

横には瞬が……いない！！

俺は布団から起き上がり、広間に出たが、井上さんと長瀬さんもないみたいだ。

キィ

ドアが開く音。きつと井上さん達が帰ってきたんだ。

俺はそう思い、玄関の方に行った。

「よお、まだ生きてたみたいだな」
帰ってきたのは井上さんでも長瀬さんでもなく瞬だった。

第10話：白魔導師と魔女狩りハンター（後書き）

- ・ さあ、次回男同士の修羅場が起こる！・・・とか起こらないとか・・・

第11話：帰還（前書き）

ソウルイーターの力が使えなくなっている隼人
そんな時に瞬との対面

第11話：帰還

つく、ソウルイーターの力を使えない今、こいつに襲われたら太刀打ちできないぞ。

でもなんでこいつは俺が寝てる間に殺らなかつたんだ？

「お前、今でも俺を恨んでるのか？」

「いいや、恨んでるのは、お前じゃなくて魔女狩りにだ。まあ、あの時道連れにするのは誰でもよかったんだけどな」

予想外の返答に意表をつかれた。

でも俺も一応魔女狩りなんだが・・・

しかも誰でもいいってお前は通り魔か！

「正確に言えば、音葉と琴葉を殺した奴だ」

「！！！」

「音葉と琴葉には何も悪いこともしてないのに・・・。ただ片桐家に生まれてきただけで殺されたつてのが、許せねえんだよ」

瞬は大きな声で叫び、壁に拳を叩きつけた。

「とりあえず落ち着け、音葉と琴葉は生きてる」

「は？それは本当か？」

瞬は興奮しているのか、俺の胸倉を思い切り掴んだ。

「ああ、俺が逃がした。でも魔女狩り内では死んだと公表はされている」

「そうか・・・よかった」

瞬は膝を折り、その場に座りこんだ。

「あら？隼人君目が覚めたの？ごめんねちょっと留守にさしちゃって」

その時ちょうど、井上さんと長瀬さんが帰ってきた。

「おお、坊主、そんな所で座り込んでどうしたんだよ」

長瀬さんは座り込んで、瞬を片手で立ち上がらせた。

この人は一体どれほどの怪力の、持ち主なのかと疑いたくなるように軽々と。

「そういえば坊主、この前は悪かったな」

昼飯の最中に長瀬さんが口を開いた。

「ってかこの人は誰に対しても、坊主って呼ぶから俺のことか瞬のことかわかりづらいんだよな。」

「魔女狩りから美咲を守ってくれたんだってな。俺のかわりに」

この一言で俺に言ってることだとわかった。

「そんな、俺なんかじゃあ長瀬さんの役不足で・・・」

「お前、魔女狩りの癖に仲間と戦ったのか？」

瞬が2人に聞こえないように耳打ちをしてきた。

「そのことには触れるな」

俺は平常心を保ち、普通の声で言った。

「おい坊主、そいつに何を言ったんだ？」

「え、え・・・それは・・・」

瞬はこの後小一時間ほど長瀬さんに絡まれた。

でも決して俺が魔女狩りだとは口は割らなかった。

意外といい奴なんだな。

その後俺は瞬に外に来るように呼び出された。

「いつまで黙っとくんだ？それともこのまま真実を言わずに消えるつもりか？」

「そんなこと言う必要ないだろ」

「そうか。だが覚えておけよ。お前のせいで美咲さん達に迷惑がかかってることをな」

そう言い残して、瞬は小屋に戻っていった。

あいつなりに心配してくれてるのだろう。

俺も小屋に入ろうと足を進めた瞬間

「人だ！人がいるぞ！！」

「な・・・」

振り向いて、声の正体を確かめて、俺はうろたえた。

まだしも普通の人とか迷い人ならよかったものの、声の正体は信徒だった。

しかも今見えてるのは十数人だが、ざっと百を超えるほどの気配を感じた。

俺は急いで小屋に戻り、3人にこのことを伝えた。

「長瀬さん、井上さん、瞬、信徒にここが見つかった」

「やっぱりな。そろそろここも終わりと思ったぜ」

長瀬さんは十文字槍を手に、外に飛び出した。

俺たちも長瀬さんに乗じて外に出たが、完全に囲まれてしまっていた。

「オラオラオラ！」

長瀬さんは槍を振り回し、ジリジリと近づいてくる信徒を、俺たちから引き離れた。

流石の長瀬さんも一人だったら、俺たちを守りながら戦うのはきつそうだ。

「これじゃあ捕まるのも時間の問題だな」

瞬は冷静に解説してるだけで、まったく動こうとしなかった。まあ、それは俺も同じなんだけだな。

「おい、あれって光明寺様直々の神兵、鬼庭様じゃねえか？」

一人の信徒がそう言うてるのが耳に入ってきた。

もしかして本部の信徒も混じってるのか？

「隼人君・・・？」

井上さんが俺の顔を窺ってきた。

こりゃバレるのも時間の問題だぞ。

「あゝウザってえ！おっさんどいてろ！！」

【ヒューマノイドボム】

瞬が長瀬さんを後ろに下がらせ、俺の話をしていた信徒の方に人の模型をいくつも飛ばし、爆発させた。

「お前、魔法使いか……」

長瀬さんは驚きを隠せないほど、びっくりしている。

「そこから逃げろ！ここは俺一人で充分だ！」

でも2人とも足がすくんでいるのか、いっこうに動かない。

「鬼庭！さつさとそいつらを連れていけ」

瞬は他の信徒にも、さつきと同じ技で爆撃しながら叫んだ。

「あ、ああ。必ずまた合流するからな」

俺はそう言い残し、井上さんを担ぎ、長瀬さんと一緒に、瞬が作ってくれた逃げ道に逃げ込んだ。

「はああ、ここまでくれば」

俺は井上さんをちょうどいい切りカブに座らせた。

その後は瞬が帰ってくるまで、俺たちは黙りっぱなしで長い沈黙が続いた。

「あ……」

一番最初に口を開いたのは井上さんだ。

その対角線上には瞬がいた。

「大丈夫？いま手当てするから」

井上さんはさつきまで自分が座ってた切りカブに瞬を座らせ、治療魔法をあてはじめた。

かなりの激戦だったのだろうか、瞬の服はボロボロになっていた。「おい、鬼庭。本部の信徒を率いてるのは相馬和だ。知りあいだろ

？」

瞬がいきなり俺にそう言い驚いた。

そうか。相馬さんが俺を探しに・・・

「出て行く前にちゃんと説明ぐらいはしとけよ」

そうだな。出て行く前にちゃんと俺が魔女狩りだと説明するのが筋つてもんだな。

俺は瞬の言葉で決心し、2人に俺が魔女狩りであることを打ち明けた。

「薄々気が付いていました」

「まあ、坊主はそこの魔女狩りとは違うし、放っておいても大丈夫だろ」

2人の薄い反応に少しばかり驚かされた。

やっぱり、2人ともさっきの信徒の言葉を耳にしてたのか。

「じゃあ2人にこれ以上迷惑かけるわけにはいけないので俺、行きますね」

そう言つて、3人に背を向けてさっきの小屋の方へ歩き出した。

「坊主！これだけは覚えとけ。次に会う時は敵同士だ」

俺にとって長瀬さんのその一言はすごい重かった。

俺はさっき逃げてきた道を戻り、魔女狩りと合流しようと試みた。
「さっきの奴がいたぞ！」
「は？」

俺は瞬く間に信徒に囲まれてた。向こうは殺す気満々だ。

おいおい、まさかこういう展開が待ってるとはな。まあそっちらかかってきたら自己防衛だよな？

そう都合よく介錯した俺は、向かってくる信徒を次から次へと殴り倒していった。

流石にソウルイーターの力抜きじゃあきつすぎるぞこれ。

「どけお前ら！」

体力の限界がきそうになった時、一人の男が信徒を掻き分けて現れた。

その男は黒のズボンとコートに、茶色のマント、赤髪で肩まで伸ばしていて後ろにくくっていた。

左の腰には名刀っぽい刀を一本、背中に2本クロスさせて計3本の刀を背負っている。

あと、左右の腰に小刀が2本づつぶら下がっていた。

「裏切り者が再び戻ってくるとはいいい度胸じゃねえか」

男は左の腰にぶら下がっている刀を抜き、俺に向けてきた。

「誰だ、お前？ 見ない顔だが……」

「っふ、俺のことを知らないか。無知の神兵だな。いいだろう冥土の土産に教えてやる。武田毅だ」

な！！！噂だけはよく耳にする名前だ。

血、血、血、武田毅の声を聞くとところ全て血の色に染まる。

女、子供、老人、全てに平等に華麗な剣技を持って制する。

残忍、凶暴、悪辣、卑怯、およその悪の形容すべて当たる男。

最恐にして最強の男。

血の滴る音の中に生き、骨の折れる音を好み、血の叫びの中で微笑む。

なのに今までの死者は0。魔女狩り内で最も危険な男

幹部会並みの實力を持つが、支部長官を務めている、と聞く。

こんな奴に狙われたら……

プス

体の中に冷たい物が入り込んできた感触。

見ると刀で胸をつらぬかれていた。

「ぐはっ」

剣はすぐに抜かれ、俺は血を吐き跪いた。

「隼人君！！」

カン

金属が交わる音と共に相馬さんの声が聞こえた。

「案ずるな。急所は外してあるし、臓器にも傷はつけてない」

武田はそう言いながら、血のついた刀を舐めた。

「どうして隼人君を刺したんですか？」

「こいつは井上美咲と一緒にいた。理由はそれで充分じゃねえか」

「だからって、痛っ……」

相馬さんが喋っている途中に、武田は相馬さんの右腕に小刀を突き刺した。

「ごちゃごちゃうるせえぞ。二度と剣を持てねえ腕にしてやろうか？」

武田はそう言いながら、小刀で右腕をえぐった。

やめろっ！

叫びたくても俺は胸を貫かれていて、声も出ない。

ただうずくまるしか……

「穀、これ以上勝手をする、あなたを反逆者とみなすわよ」

えぐりつづける穀の腕を押さえながら、安井さんが言った。

安井さんも一緒に来てたのか。

そう安心していると……

「おもしろい。上等じゃねえかあ」

は？本当に反逆者になるつもりか？

「それやったらここで死んでもらおか？」

「や、大和……っち」

武田は光明寺さんの姿を見ると、舌打ちをして、自分の信徒を引き連れて去っていった。

「隼人も見つかったし、さっさと帰るで。和と隼人の手当てもせなあかんしな」

光明寺さんの指揮で信徒らは一斉に退却し、俺たちはのんびり電車で本部まで戻った。

俺は疲れ果て途中寝てしまい、本部に着くまで目を覚まさなかった。

「あゝ、よく寝た」

魔女狩り本部の医務室のベッドの上で目を覚ました。

傷は痛みもないし、すっかり癒えているらしい。

俺は伸びをして、皆のいる所に向かった。

つてか今日は何曜日だ？

外はまだ明るいし、もし平日だったら皆は今ごろ学校だな。

「よう隼人。ご苦労だったな」

どうやら今日は日曜日のような。

朝霧先輩が後ろから俺の肩に手を回してきた。

「朝霧先輩も元気そうで」

「まあな。つてかメシア様がお前を呼んでたぞ。行つてこいよ」

俺は朝霧先輩に背を押され、メシア様の所へ向かった。

一体何の用だろう？

まさかソウルイーターの力を失ったことに気づかれたのか？

考えても仕方ないし、行くか。

第12話：一時の休息

「鬼庭隼人様が来られました」

見張りの信徒がメシア様の部屋に入って報告した。

数秒後その信徒が出てきて、顎で俺に部屋に入るよう合図した。

「失礼します」

メシア様の部屋は殺風景で、何もなく、真っ白い部屋に、唯一あるのはベッドと魔法の辞典がいつぱいならんだ本棚だけだった。

「隼人、よく無事で戻って来てくれました。それと片桐一家滅亡計画、失敗に終わりましたがご苦労でした」

「もったいなきお言葉」

つてかメシア様と2人だけで話すのとか初めてだぞ。

俺はどうすればいいのかわからず、ただただ頭を深く下げた。

「でもまだ、力が弱いみたいですね。私の魔力を少し分け与えてあげます。」

力をもらえるのは嬉しいが、そしたらソウルイーターの力がなくなっただけがバレてしまう。

でも力はほしい・・・どうすれば・・・

「そんなに気にしなくても結構ですよ。他の4人もちゃんと受け取りましたから。さあ紋章をだしなさい」

「いえ、力をもらえるのはありがたいのですが、結構です。弱いのは俺が未熟なせいなので」

「隼人？」

「それでは失礼します」

俺はメシア様に一礼して逃げるようにその場を去った。

「よお隼人！どうしたんだ？」

「はあはあ烏丸か・・・」

廊下を走ってる途中に烏丸とすれ違った。

「メシア様にはもう会ったのか？」

「ああ」

「じゃあもう強化してもらったよな？俺と一戦交えようぜ」

「は？」

俺は理解に苦しんだが、烏丸は速攻戦闘モードに入り、俺に攻撃を仕掛けてきた。

「なんで俺がお前と戦わなくちゃいけないんだよ」

「どっちが強いかわ黒つけるのは当然だろ？因みにお前に勝てば5人の中で1番強いのは俺だ」

烏丸は自慢気にそう言い、俺に挑発してきた。

白黒つけるって何を急に・・・

でも今戦ったら明らか負けるのはわかりきったことだ。

それに俺だけ強化してもらってないのに、勝てるはずがない。

【ニードルスコール】

まあ、考えるのは後だ。

土でできた図太い針が、嵐のように俺に向かってきて、自らの拳で相殺するので精一杯だった。

「どうした？早く俺に何か仕掛けてこねえとやられるぞ」

確かに、このままあいつの攻撃を相殺してばかりだと、俺の体力が持たない。

だからといって、何か手があるはずもない。

「つぐ・・・」

何とか今まで烏丸の攻撃を防げていたが、油断をして肩に針が刺さり、ひるんだ瞬間無数の針が俺を襲った。

「油断していたとはいえ、この勝負俺の勝ちだな」

烏丸はそう言い去っていった。

俺に刺さった針は消えたが、かなりのダメージで立つこともままならなかった。

「烏丸の奴ひでえよな、おい立てるか？」

朝霧先輩が俺に手を差し伸べてきた。

「見てたなら助けてくださいよ」

「いや、俺がいつても無駄だと思うし」

「力をもらった時から烏丸君、なんか人が変わったからね」

朝霧と皐月に肩を借り、医務室に向かった。

まあ、当分は魔女狩りとしての任務がないため、やっと学校の勉強に精を出せるってもんだ。

でもあんま勉強しないんだが、今の俺は久しぶりに学校に行くことが嬉しかった。

ごく当たり前のことでも、現実離れた経験をした後は、特に嬉しく感じるもんだ。

「隼人」

後ろから聞こえる昔から聞きなれた声。

「隼人！」

「うわ！」

亜矢が後ろから俺に飛び込んできた。

「危ないだろ！・・・亜矢？」

「心配したんだよ。和ちゃん達から隼人が行方不明って聞いたときは私どうしたらいいか・・・」

「ごめん。心配かけたみたいだな」

俺の胸に顔を埋ませてる亜矢をそつとなでた。

「でもよかった。無事に帰ってきてくれて」

「亜矢」

「バカッブルもほどにしとけよ」

「な!!」

横から何気なく素通りしながらそいつは言った。

そういえば学校に行く道中に俺は一体なにやってるんだ。

しかもよりによってこいつに見られるとは・・・

「おい悠夜！お前は どうして急に現れるんだよ」

「偶然だ」

そう何度も偶然があつてたまるかつてんだよ。

「隼人~~~~」

「ぐは」

今俺の腹にヘディングをしてきたのは、悠夜の双子の弟、光喜だ。

「隼人、生き返れてよかったね」

は??俺は死んでないから。一体どこでそういう話になったんだ?

つてか普通、人が死んだら生き返るなんか有り得ないから。

「このメンバーで学校行くの久しぶりだね。昨日まで悠夜君も光喜君も長い間学校休んでたし」

「え?お前たちも休んでたのか?なんかあつたのか?」

「えっとね、魔女ツモガモガ・・・」

「お前には関係ない」

悠夜が光喜の口を押さえてそう言った。

今、魔女つて言つたよな?まさか魔女狩りつて言おうとしたわけじゃないよな?

そういえばこいつの名字つて陽河だよな。

陽河と言えば魔法使いの中で3本の指に入るぐらいの大魔法使いの家系だが・・・

考えすぎだな。

俺はそう自分なりの答えを出して、そのまま他愛ない話をしながら学校に行った。

学校に着いて、5分も経たないうちに1限目の授業が始まった。けっここのんびりしすぎたみたいだ。

まあ、それはいいとして、ひとつ気になったのは烏丸の席だ。

聞けば、この前片桐家から戻ってきてから、1回だけ学校に顔を出して、それ以来来ていないらしい。

一体どこで何をしているのか・・・

「鬼庭くん」

「ああ？」

いつの間にか先生にあてられてたみたいだ。

「なんツスカ？」

「あなたこのクラスの文化祭実行委員なんだから前に出て来なさい」
「はあ？」

理解に苦しむ俺にクラスの皆がごちゃごちゃと言い出した。

まあ話をまとめるところだ。

もう明後日にこの学校の文化祭があるらしく、数週間前に俺が文化祭実行委員に推薦されたらしい。

ってか絶対推薦とか嘘だろ。たまたま休んでる奴にやらしとけ、見たいな感じだったんだろう。

「それじゃあ後は任せたわよ」

先生はそう言い残して教室から出て行った。

因みに今日と明日は授業なしで文化祭の準備だけらしい。

勘弁してくれよ。どうして俺がこんなことを・・・

そう嘆きながら黒板の前に立ち、まず何をすればいいのか考えた。すると俺の隣に女の子が立ち、黒板に何やら書き始めた。

彼女は北条薫^{ほつじょうかおる}。緑のショートヘアで眼鏡っ子。

この学校の生徒会長まで務める優等生だ。

どうやら俺と同じ文化祭実行委員らしい。

生徒会長までしてよくこの実行委員もできるもんだと感心する。

「それじゃあ、今から皆にやってもらうことを説明するね」

北条さんが、やる仕事の一覧を黒板に書き出して、皆に説明しました。

「俺の出るまくはほとんどねえな」

ただ北条さんの説明聞いとくことしかできなかった。

俺のいない間も彼女一人で頑張ってくれてたんだろっな。
ってか俺必要ないじゃん。

「ほら行きましょ」

「え？」

急に北条さんに手を引つ張られ驚いた。

「行くつてどこへ？」

「買い出しっ」

そう言われながら学校を出た。

よく見りゃ、自転車とかで学校から出てどこかに行く生徒をよく見る。

このまま帰ってもバレないんじゃないか？

「あー今、このまま帰ってもバレないんじゃないかって思ったでしよ？」

北条さんが俺の顔を覗きながら言った。

「そんなことないって、アハハ……。それよりうちのクラスは何をやるんだ？」

「あゝ鬼庭君昨日まで休んでたからね。おばけ屋敷よ」

おいおい、高校生にもなっておばけ屋敷とかシケるだけだぞ。

「あんな狭い教室でおばけ屋敷とか無理だろ？せいぜい子供だまし程度だぞ」

「甘いよ・生徒会長の特権で体育館を貸しきることにしたの」

満面の笑顔で彼女は言った。

生徒会長の特権って・・・そんなことできるのか。

そんなこんなで文化祭の話をしてるうちに俺たちはホームセンタ―に着いた。

何を買ったんだこんな所で。

第12話：一時の休息（後書き）

次回はちよつと戦闘から離れたいと思います。次回だけですけど・
・ ^ ^ ;

第13話：文化祭の準備（前編）（前書き）

久しぶりに学校に来た隼人は休んでる間に文化祭実行委員に任命させられていた。

そして同じ実行委員の北条薫と文化祭に使う道具などを買いにきていた。

第13話：文化祭の準備（前編）

「それでこんな所に来てどうするんだ？」

「んゝまずは板を買わなきゃね」

「はあ？」

「それと釘とのこぎりと・・・」

びっしりと文字が詰まったメモ帳を眺め、ぶつぶつ言いながら次々に買い物つかごをいっぱいにさせていった。

この人は一体どこまで本格的にやるつもりなんだ。

「あ！鬼庭せんぱい」

誰だ？そんな大声でしかも店の中で叫ぶ奴は・・・

「こんな所で会うなんて奇遇ですね」

同じ神兵の皐月だ。それと隣にもう一人。

「誰だそいつ？」

「あ、この子は陽河梓さんひかわあずさ」

ペコリ

その子は無言で俺に会釈した。

この子が光喜が言ってた血がつながっていない妹か。

黒髪のショートヘアで、前髪の左半分が妙に長い。

ってか兄よりも髪の毛短いってなんか・・・悠夜が長すぎなんだよな。

「つで皐月らは何しに来たんだ？クラスの出し物の買い出しか？」

「まあそんな所です。」

「ふゝん。皐月のクラスは何をやるんだ？」

「えゝとですね、看板作りです」

「なんだそれ？」

「大きい看板を作って、門の前に飾るんです」

「飾ってどうするんだ？」

「それだけですよ」

「うわ、すげえ楽じゃん。俺のクラスももつと楽な出し物にしとけよな。」

「それじゃあ鬼庭先輩もお化け屋敷頑張って下さいね。絶対行きますから」

皐月はそう言っで、学校に戻っていった。

梓はまた俺に一礼して、皐月の後を追った。

一言も喋らなかったけど、喋れないのか？

それとも人見知りか何か？

俺は近くのベンチに腰をかけて、北条さんが戻ってくるまで待った。

「こんな所にいたの？探したんだよ」

手ぶらで北条さんが戻ってきた。

「あれ？買った荷物はどうしたんですか？」

「アレ」

北条さんは笑顔でトラックの方を指を指した。

そのトラックを見ると、どんどん板やら布団やらアクリル板？やらが担ぎこまれていた。

「まさか・・・」

「今から運んでくれるって」

なんて無茶な人なんだ。これじゃあ軽く予算オーバーだな。

「じゃあ帰りましょ」

北条さんは先々学校のほうへ帰って行って、俺はその後を追った。

学校に着くとトラックはもう来ていて、生徒たちの注目の的になっていた。

「あ、これを体育館までお願いします」

一人だけ動揺とかせずに、運送屋さんに指示をしてる人がいた。

「明日香、ただいま」

「あ、会長お帰りなさいませ」

服部明日香、黄色の髪で前髪が目に被るくらい長く、髪型は小さいポニーテール。

同じクラスで生徒会の書記をしていて、北条さんとは大の仲良らしい。

クラスで一番背が低くて、あまり目立たない子なんだが、今日に限ってはよく目立つ。

「北条さんこれは一体なんですか!？」

「またこんな無理をして……」

先生達が集まり、北条さんに説教した。

俺はとばかりを食わないように、教室へと逃げ帰った。

つが、そこにいるのは悠夜一人だけだった。

どうやら皆は体育館に集まって作業をしているらしい。

黒板にはでかかとお化け屋敷の図面まで書いて、目指せ1位と大きく書かれていた。

俺がいない間にも話は進んでたみたいだな。

「お前はいかねえのか？」

「あ？隼人か、めんどくせえ」

こいつにやる気というものがあるのか疑いたくなる。

「お前実行委員だろ。さっさと行って来い」

「お前も来い」

俺は悠夜を起こし、共に教室を出た。

「隼人どこ行ってたの？もう薫は作業に入ってるよ」

体育館の目の前まで来て、遠くから亜矢が手を振ってる。

「おお、俺も今から悠夜と……ってあいつどこいった？」

てつきり後ろについて来てると思ったんだが、知らない間に逃げたらしい。

まあ仕方ない。探すのも時間の無駄だ。

俺はそう思い、作業に入ろうとしたが何をすればいいかまったくわからん。

板をノコギリで切ったり、釘で組み立てたり、暗幕をつけたり、いろんなグループに分かれてるみたいだが・・・

「隼人はこっちだよ」

光喜にひっぱられ、体育館の隅に連れて来られた。

「何やってるんだ？」

そこには机に炊飯器やら梅干し、かつお、塩、ジュースなどが並べられていた。

「夜食を作ってるの。こんなの明日までにできるわけないしね」

また北条さんが無茶を言い出した。

まあここまで用意してるんじゃないやあ今更言っても徒労だろ。

「会長、お待たせしました」

服部さんが家庭科室の皿を持って、美里と一緒に帰って来た。

あ、こいつもいたんだっけ。

てつきり忘れてたが美里も同じクラスだったんだ。

俺と同じ年なのに、なんで幹部会なのか問いたいが、どうせ無駄だろう。

「それじゃあ張り切って作るわよ」

北条さんは炊飯器を開けて、まずごはんを全部大皿に移した。

俺がなんでもおにぎりなんか作らなきゃなんねえんだよ。

悠夜と一緒にサボればよかったと、今更後悔したが遅いか・・・

「そろそろ下校の時間ですよ・・・って北条さん何してるんですか！」

先生が俺たちを見つけ、すごい勢いで走ってきた。

「夜食です」

「夜食ってそんな遅くまで学校に残ることは許しません」

どうやら先生の許可なしでやってたみたいだ。

つということはこの家庭科室の皿を黙って持ってきたってことか。

まあこれで帰れるだろうと、俺は一息つくうとしたら

「作りなさい」

服部さんに初めて怒られたが

「でも多分中止だろ？」

「会長なら大丈夫です」

どこにそんな根拠があるんだよ。

っと思っていると先生は何故か帰っていった。

「さあ始めるわよ」

笑顔で振り返って言った北条さんは、おにぎりを作り始めた。

「隼人、楽しいね」

光喜は自分の顔くらいのでかさのおにぎりを握りながら言った。

「ああ、そうだな」

まだ今日は長そうだ・・・

第14話：文化祭の準備（後編）

「はいみんな、休憩だよ」

北条さんのその一言でクラス全員が一点に集まった。しかも多いぐらい作っていたおにぎりが数秒でなくなったのは驚いた。

「ほらほら、鬼庭君、手動いてないよ」

「え？まだ作るの？」

北条さん達に焦らされながら、再び米を握り始めた。

「そついうのつて、女がやる仕事じゃねえか？」

背後から悠夜がおにぎりを食べながら話し掛けてきた。

「しゃあねえだろ。他にやることないみたいだし。ってかお前も手伝え」

「嫌だね」

「はいこれ悠夜の分」

ナイス光喜。

気を利かせた光喜が悠夜が作る分のご飯を渡した。ざつと5合くらいあるだろう。

それを悠夜はめんどくさそうに片手で握り始めた。

「おい、ちゃんと真面目にやれ」

「やってるだろ。ちゃんと物見てから言え」

態度は最悪だが、綺麗な丸いおにぎりがすごい速さで出来ていった。

「うわ、悠夜君上手だね。こっちもお願い」

「げ・・・」

北条さんが炊飯器ごと悠夜の所に持っていった。

「やってられるか！」

悠夜はおにぎりを5、6個持って席を立った。

「じゃあ悠夜君の代わりに鬼庭君と光喜君お願い」

うわ、とばっちりきたよ。

「うん、わかった」

しかも光喜はあっさり承諾してるし。

まあこれで終わりだし、もうひと頑張りするか。

「終わった」

「ご苦労様」

俺たちの仕事が終わった頃には皆ご飯を食べ終えて、作業に戻っていた。

「それじゃあ私達も食べようか」

そう言えば俺らはまだだったんだよな。

そう思って皿を見てみると、ドでかいおにぎりばっか残っていた。光喜の作ったやつだ。

「なんで俺のばっか余るんだよ」

でかすぎるからだろ。

俺は光喜の作ったおにぎりを食べてみた。

「甘っ」

「塩の変わりに砂糖をかけてみました。あとはちみつとか練乳とかも練りこんでみた」

なんでそんなものいれるんだよ。

通りで全く減らないわけだ。

「でもこれしかないし、お腹に入れば一緒だよ」

北条さんはそう言っつて、光喜の作ったおにぎりを食べ始めた。

服部さんと美里はどうやら受け付けないらしく、食べるのにためらっている。

まあそれもそうだろう。俺も甘いのは苦手だからな。

でもせっかく光喜が作ったやつだし、食べないわけにはいかない。なので無理して食べたの言うまでもない。

「それじゃあ今日のところはこの辺にしましょ」

ちょうど12時過ぎた辺りで、北条さんはそう言った。
ってか明日も学校あるんだぞ。

日付的には今日になるけど・・・

明日欠席者が続出したらどうする気なんだよ。

「そのときは私直々迎えに行くわ」

いや、そういう意味じゃなくて体調を悪く・・・って言うだけ無駄か。

「それじゃあ気をつけて」

一応実行委員である俺たちが全生徒を見送った後、門を閉めた。
「送っていいこうか？」

「大丈夫、こう見えても護身術には自信あるから。それとこれ」
そう言われ、手紙を2通預かった。

「なんだこれ？」

「ひとつは鬼庭君のもう1つは烏丸君。会ったら渡しといて。
それじゃあまた明日」

北条さんはそう言い残して、走り去ってしまった。

はあ、久しぶりの学校だから少し疲れたな。

でも今日は例外かな。

「遅いよ」

俺を待つていてくれたのか、すぐそこで亜矢と出くわした。

そりゃ家が隣なんだから、普通は一緒に帰るよな。

「それにしても今日は疲れたねえ。明日起きれるかなあ」

「ああ」

家に着くと意外な人物がいた。

「よお、遅かったな」

「烏丸！」

「烏丸君、久しぶりだね。明日は学校来れるの？」

「いや、明日も無理だ。今日はちよつと隼人に話があつてな」

烏丸はそう言い、俺の顔を見た。

「そう、じゃあ私はもう帰るね。隼人明日寝坊しちゃだめだよ」

亜矢はそう言い、家に入つて行つた。

「つで話つてなんだ？」

「他の奴らもそうだけど、いつまでそんなこと続けてる気だ？」

何を言つてるんだ？ そんなことつてなんだ？ 学校生活のことか？

「俺らの使命は魔法使いを一人でも多く狩ることだ。そんな変な祭り事の準備とかしてる場合じゃねえだろ」

「それもそうだが、人間休息は必要だ。そういうお前は今まで何してたんだよ」

「俺か？俺は今日で魔法使いをざつと100人は狩つた」

学校にも来ないで何をしてるかと思えば、人殺しかよ。

「お前も来い。そんなままごとみたいなことをやつてる奴らはほつといてよ」

烏丸は俺に手を差し伸べた。

「悪いがそのままごと結構楽しいんでな」

俺は烏丸の手を払いのけ、振り返らずに家に入った。

「あ、手紙渡すの忘れた」

そのことに気づき、外に飛び出たが烏丸の姿はもうなかった。

「隼人！学校遅れるよ」

亜矢の声で目を覚ました俺は時計を見た。

7時50分。やば！飯食う時間ないじゃねえか。

昨日あんな遅くまで残すから……

ブツブツと北条さんに文句を言いながら支度をし、家をでた。

俺はなんとか遅刻は免れたが、その日はクラスの半分が遅刻してきた。

「たるんでるわ」

体育館で皆が作業中、北条さんが叫んだ。

「何が？」

「明日までに完成させないといけないのに、遅刻してくるってこと！」

それは北条さんが遅くまで残したからだよ。

「ちよつと私も手伝ってくるから、見張り頼んだわよ」

俺らの仕事って見張りだったのか。

「じゃあ光喜頼んだ」

「え〜」

北条さんに押し付けられた仕事を、光喜に押し付けて俺は屋上へと逃げた。

烏丸は今日も来てないし、今ごろ魔法使いでも狩ってるだろうな。

「サボりか？」

俺が外の景色を眺めてる所、上から悠夜の声が聞こえた。

悠夜は屋上のドアの屋根の上に仰向けに寝ていた。

「お前も人のこと言えないだろ」

「俺は元々やる気ないからな」

「そうかよ」

まあ俺には関係ないけどな。

「お、隼人じゃねえか」

その声は朝霧先輩、それと隣に黒髪の男がいた。

「朝霧先輩、なんか学校で会うのは久しぶりですね」

「そうだな。つで隼人もサボりか？」

「そうですね、朝霧先輩もですか？」

「まあな。あ、隼人はこいつとは初対面だったよな。俺の友達ひかの陽河竜わじょうだ」

陽河・・・もしかして悠夜の・・・

「どっかで聞き覚えのある声がすると思ったら竜かよ」

横になつていた悠夜が身体を起こした。

「悠夜、そんな所で何してるんだ？」

「昼寝だよ昼寝……保健室行つてこ」

悠夜はそう言つて下に降りてつた。

「じゃあ俺は作業に戻るんで」

朝霧先輩と竜先輩にそう言い残して、屋上を後にした。

別に悠夜の後を追つたわけでもないし、作業に戻るつもりもサラサらない。

ただ誰もいない所でサボリたかつただけだ。

俺は次のサボリ場所、教室に向かつた。

ここなら誰もいないだろ……っているし。

北条さんが教卓の前に立っていた。

「遅かつたね」

北条さんはまるで俺がここに来るのが分かつたような口調で言つた。

約束とかはしてないはずだ。

「ん？何？どうしてそんなに驚いてるの？」

「だって、俺がここに来ることが分かつたみたいだし」

「あれ？手紙を読んだからここに来たんじゃないの？」

手紙つて昨日もらつたやつか。

昨日は疲れてたから読まずに、そのまま寝てしまつたんだよなあ。

「まあ、来てくれたからいいかな」

「俺をこんな所に呼び出して何の用だつたんだ？」

俺は自分の席に移動して机にうつ伏せになって、堂々とサボることにした。

「2人つきりになつてもなかなかやるチャンスがなくて困つたよ」

「やるつて何をだよ？」

「あなたを殺ること」

急に寒気がして顔を上げた瞬間、刃が俺の机にでかいキズをつけ

た。

「な……」

俺は椅子から立ち上がり、すぐさま北条さんと距離をとった。ドアに手をかけたが、鉄のように重く開かなかった。

「残念。さすが神兵なだけはあるわね」

北条さんは笑顔でそう言った。

当分は戦いとかないと思ったら、すぐこれか。

しかもなんで俺が北条さんに狙われなくちゃならねえんだ？

ん？待てよ、俺のことを神兵って知ってるってことは……

「まさか」

「そう、そのまさかよ。魔女狩りハンター北条薫。」

魔女狩りハンターって、こんな所にも潜んでたのかよ。

「魔女狩りであるあなた、神兵鬼庭隼人、あなたの命ちようだいするわ」

北条さんの両手には双剣を握られており、右の双剣を俺に向けた。

第14話：文化祭の準備（後編）（後書き）

意外な展開でまた戦いが始まり～

隼人はこの危機からどう脱するのか？

第15話：隼人VS北条薫（前書き）

たまたまサボるために教室にやってきた隼人だが、そこには同じ実行委員の北条薫がいた。

そして自分が魔女狩りハンターと明かし、今ココに魔女狩りと魔女狩りハンターの戦いが始まる

第15話：隼人VS北条薫

命をちょうだいってマジかよ。

何でも俺の力が使えない時に、襲ってくるんだよ。

「安心して、一瞬よ」

北条さんは高く飛び上がり、上空から攻撃してきた。

何考えてんだか、上からの攻撃なんかすぐに避けれると思った瞬間、後ろから誰かに捕まれ身動きがとれなくなった。

やばい、このままじゃ本当に一瞬で終わっちまう。

「つぐ」

「明日香、ちゃんと捕まえててよ」

俺は渾身の力で、後ろにいる奴の腕をなんとか振り解いたが、肩にかすり傷を負った。

「すいません。予想以上の力だったもので」

って服部さんがどうしてここに。

俺の後ろにいたのは服部さんだった。

まさか服部さんも魔女狩りハンターなのか？

状況は更に悪化したといっても過言ではないだろう。

何しろ向こうは殺しのプロ？が2人でこっちは存分に力を奮えない奴が一人。

こうなるんだったら昨日、烏丸に手紙を渡しとくんだったな。

「抵抗しないで死んでくれるかな？時間かけすぎるとめんどくさいから」

はいそうですか、って簡単に死ねるか！

こうなったらとことん抵抗してやる。

「明日香！鬼庭君の動きを封じて」

「はい」

北条さんがそう指示すると、服部さんは瞬時に姿を消した。すると急に足に力が入らなくなり、俺は膝を折った。

見ると両足にクナイが刺さっていた。

「これであなは動き回ることとはできない」

北条さんは双剣を大きく振り上げ、俺に突っ込んできた。
クソ、足に力がいらねえ。

俺が逃げるのに必死だった時、突然『カン』と金属が交わる音が
聞こえた。

「こんなにも魔力を放出して、私達に居場所を報せてるのと同じよ」
見ると相馬さんが北条さんの双剣を受け止めてくれた。

「3組の相馬和さんね。ちょうどいいわ。先にあなたから血祭りに
あげてくれるわ」

そう言つと、周りの景色が暗い教室から、辺り一面の焼け野原に
変わった。

「ここからは私のテリトリーよ。誰も侵入を許さないし、出る事も
できない」

「元々誰かに助けを呼んでる訳でもないし、逃げる気もさらさらな
いわ」

相馬さんはそう言つて、刀を構えた。

2刀流同士、これはすごい戦いになるかも。

つてまた俺は助けられてばかりかよ。

「後ろがガラあきよ」

しまった。服部さんのことを忘れてた。

「相馬さん危ない！」

俺がそう叫んだと同時に、相馬さんは右の刀で服部さんの攻撃を
受け止め、左の刀で向かってくる北条さんの双剣を薙ぎ払った。

「すげえ……」

つと感心してる場合じゃねえ。俺も早く参戦しないと。

出血がひどくなるが、クナイを抜き、なんとか立とうとした。

その間にも3人の攻防は続いてた。

血……もしかしたらあの技なら！

【ソウルイーター・ブラッドソード】

よし出た！

自分の血を剣に具現化した。

この技は自分の血を代償とするため、魔力の消費が少ないから出せると思った。

それともソウルイーターの力が戻りつつあるからだせたのか？

それにしても毎回出血量がひどい。

まあそんなことはともかく今は相馬さんを！

俺は咄嗟に3人の間に割り込み、2人に攻撃をしかけた。

北条さんは服部さんは、俺の剣の能力に勘付いたのか間合いをとった。

「へえ、そういう能力を持つてるんだ」

「魔力が低い者はかすりでもしたらあの世行きです」

そういうことだ。

ってか服部さんは謀報部員かなにか？詳しすぎるぞ。

「それはまずいわね。要するに当たらなければいいってことね」

【霧時雨】

突然周囲は霧に包まれ、すぐ隣にいる相馬さんさえも見えなくなっってしまった。

「うち、どこに隠れやがった」

「慌てないで、見えないのは向こうも同じはずです」

【破壊魔法・ギガデリックス】

「ぐは！」

「キャ！」

俺のまん前で何かが爆発した。

よく見るとカラフルな玉が飛んできてただけだが、目で確認できた時には、すぐ爆発されて防ぐことはできない。

魔法とは相手が見えなくても、こうも確実に当てられるものなのか？

「違う、最初はただ適当に魔法を放っているだけよ。そして1発目は当たった瞬間、私達の声を頼りに放ってるの」

下から相馬さんの声が聞こえた。

「しゃがんで」

相馬さんに足を引っ張られ、ずっこけた。

俺の頭上では、未だカラフルな玉が飛んでいた。

「次、相手が攻撃を仕掛けてきたら、決着を決めるわよ」

「どうやって？」

「あの魔法が飛んできた方向に彼女らはいるはず。だったら・・・」

「

話しの途中でまたあのカラフル玉が俺に当たり、その瞬間相馬さんは、玉が飛んできた方に突撃した。

「ってか俺は囧ですか？」

そろそろ足も限界に達してきて、そのまま寝そべっていると、霧が晴れだした。

起き上がると、相馬さんが北条さんの肩に刀を2本突き刺していた。

「会長！」

「よく私の居場所がわかったわね」

「これでも神兵よ。甘く見てもらったら困るわね」

焼け野原化した景色は、見慣れた教室に戻り、北条さんは膝を折った。

「よくも会長を！」

服部さんはクナイで相馬さんに立ち向かったが、簡単に弾かれてしまい、力なく座りこんでしまった。

「その程度で挑んだのが運のツキね」

相馬さんは北条さんの首に刀を突きつけた。

「殺すのか？」

「当たり前でしょ？隼人君殺されかけたんだよ？」

確かにそうなんだが、殺すのは後味が悪い。

「なあ見逃してやらないか？」

「え？」

「俺もこうして生きてるわけだしさあ」

「……」

あれ？俺なんか変なこと言っただけ？

「あなた本当に魔女狩り？しかも神兵？」

北条さんが確かめるように俺に聞いてきた。

「そうだけど、なんでそんなこと聞くんだ？」

「ちよつと魔女狩りの神兵が言う言葉じゃなかったから」

やっぱり見逃すのはおかしいよな

「いいよ。隼人君がそう言うなら」

相馬さんは剣を鞘に収めた。

「礼は言わないわよ」

北条さんはそう言って、立ち上がり教室から出ようとした。

「会長、私も……」

服部さんが立ち上がろうとした瞬間

「ダメ」

北条さんは振り返らずに叫んだ。

「鬼庭君、見逃してくれたついでに一つお願いしてもいいかな？」

「なんだ？」

「明日香をそっちで使ってほしいの」

「はあ？」

「会長どうしてそんな」

要するに服部さんを魔女狩りに入れろってことだよな？

「明日香、あなたには鬼庭君と一緒に行動して、真の魔女狩りを見

てほしいの」

「真の魔女狩り？なんだよそれ？」

「さあね、魔女狩り皆が鬼庭君みたいな人だったら、こんなことにならなかったのにね」

そう言い残して、北条さんは教室から出て行ってしまった。

「会長の言葉に従います。隼人様、これからはあなたに忠誠を誓います」

右手を前に出し、肘を直角に折り、どこぞやの部隊の敬礼みたいに言った。

「何を企んでるのか、わからないから警戒だけは怠らないようにね」
相馬さんもそう言っつて、教室から出て行った。

一人にしないでくれ。それに隼人様つてなんだよ。

その後、担任から緊急ホームルームが開かれ、北条さんは海外に引越したと発表された。

出て行くならせめて文化祭が終わってからにしてくれよな。

準備は俺たちが戦いを繰り広げてる最中に終わったらしく、後は明日の本番を待っただけなんだが、最後に委員長同士の会議があるらしい。

会議とかまどろっしくて嫌いなんだよな。

そいつうときこそ、あいつだな。

「明日香」

「なんでしょうか？」

あれから名前を呼べばすぐに現れるようになった。

校舎、体育館、教室、屋上、男子トイレ、全てで試したが、一言で俺の前に現れた。

でもなぜか服部さんだと現れないので、明日香と呼ぶかしょうがない。

「後の会議は任せた」

俺はそついい残して、家に直行した
はあ、明日休もうかな

第16話：文化祭（前書き）

待ちに待った文化祭

同じ文化祭実行委員は転校してしまい、一人でクラスを纏めるハメになった隼人は、全て明日香に任せることにした。

第16話：文化祭

翌日、9時ジャストのチャイムと同時に文化祭が始まった。

中庭にはたこ焼きやクレープなどの出店が並んでいて、各教室にはいろんな催し物があった。

体育館は俺らのクラス貸切で、そのチャイムと同時に満員状態で長蛇の列を作っていた。

そりゃ、ほとんどの遊園地以上にでかい面積を使い、どこぞの会長さんのおかげでかなりの本格的なお化け屋敷になったからな。

「なんでこんな無駄な行事があるんだか」

クラスの指示は全て明日香に任してあるし、屋上で昼寝でもするか。

そう思い、屋上に足を運ぶ途中で梓ちゃんを見つけた。

今日は皐月と一緒にではなく一人で、窓から外を眺めていた。

「つよ！今日は皐月と一緒にじゃないのか？」

覚えててくれてるか不安だったが、彼女は俺を見て、ペコッと頭を下げた。

しかも無言で。

「ここで何してるんだ？」

俺がそう聞くと、梓ちゃんは外の下の方に指を指した。指を指した方向にはいろんな出店が並んでいた。

「出店を見てたのか？」

ブルブルと首を横に振った。

じゃあ何を？

「人」

初めて聞いた声。

すごい透き通る綺麗な声だったが、小さすぎて聞き取るには相当耳を傾ける必要がありそうだ。

たしかに出店の前には大勢の生徒や保護者、学園と無関係そうな

人が行き交っている。

「あの人の塊を見てたのか？」

コクツと軽く頷くだけ。

「面白いかな？」

また頷くだけ。

「そうかな？」

んゝ話が續かん。ここまで苦戦するとは予想外だぞ。

「そういえば皐月はどうしたんだ？」

そう聞くと梓ちゃんは今度は指を上に出した。

「天井？上の階かな？」

そう聞くと軽く横に首を振り、今度は指を上下させながら、上を指した。

もつと上ってことか？

「屋上にいるのか？」

またコクツと頷くだけ。

「ありがとう」

そう言つて、梓ちゃんと別れた。

なんか悠夜達とうまくいつてるのかすごい不安だけど、光喜がいるから大丈夫かな。

皐月が屋上にいるってことはあいつもサボリかな？

そう思いながら屋上のドアを開けると、かなりの生徒が集まっていた。

生徒に囲まれていたのはブラスバンドの奴らで、今からライブをやるらしい。

「鬼庭先輩！ここは危ないですよ」

皐月に押し戻され階段の影に隠れた。

「おい、何で隠れるんだよ？」

「しっ！ブラスバンドの人たち、知らない間に鬼庭先輩のクラスに体育館を占領されたからカンカンですよ」

あの会長どこまで問題を残していったんだよ。
ちゃんと後始末ぐらいしてから去れよ。

「とにかく鬼庭先輩はここにいないほうがいいですよ」
そう言い残し、皐月は屋上に戻っていった。

まあ今からライブやるんだったら、昼寝もできそうにないし、別にいいけどな。

つとなるとあとサボれる所は……

次に足を運んだの保健室だ。

屋上より遥かに安眠できるし、うってつけの場所だ。

しかも保健の先生はほとんど留守にしているから、ベッドとか使い放題だ。

俺はベッドのカーテンを開け、布団を持ち上げた瞬間

「誰だよ？寝込みを襲う奴は！」

げ！悠夜……こいつも考えることは同じか。

「隼人かよ？お仕事ご苦労さん。言っとくけど俺は働く気ないぞ」

そう言つて、布団を被りなおした。

別に悠夜を呼びにきたわけじゃないんだが。

でもこいつだけ寝かしとくのは気に入らん。

「起きろ！」

「はあゝ寝不足……」

悠夜がでかい欠伸をしながら言った。

あれから布団の取り合いになったり、ベッドは破損するわけで大変だった。

まあ、そのおかげで起こすことに成功したけどな。逃げてきただけ……

「っでこれからどうするんだ？」

どうするって言ったって、全部つまんなさそうだし。

「隼人ゝ頑張るとるかぁ？」

「!!!!」

この声は光明寺さん？

後ろから声が聞こえ、振り向くとそこには光明寺さんと水無月さんと久遠時さんの幹部会3人が来ていた。

「文化祭とは懐かしいですね。学生時代を思い出しますよ」

久遠時さんがスマイル顔で俺に微笑んだ。

「おい隼人、こいつら・・・」

悠夜が俺に耳打ちしてきた。

「ああ、紹介するよ。この人達は」

「久しぶりだな。陽河悠夜」

え？

水無月さんから意外な言葉が出てきた。

知り合いなのか？

「ワイらが留守中にえらい好き勝手してくれたな」

「気に召さなかったか？」

光明寺さんとも知り合いのようだ。

「このお礼はいつか返させてもらいます」

「楽しみに待つといてやるよ」

そう言って3人は悠夜と会話交わし

「じゃあ残りの神兵にも顔みせてくるわ」

つと俺に呟き、去っていった。

それより、悠夜と光明寺さん達の話の内容がいまいちわからないんですけど。

悠夜に直接聞くかと思っても、さっき舌打ちをしてどこか行ってしまったし、光喜にでも聞くか。

俺は体育館に行き、光喜を探した。

「亜矢く光喜知らねえか？」

体育館の入り口で受付をしていた亜矢に聞いた。

「光喜君ならさっき悠夜君が連れて行っちゃったよ。多分裏にいると思う」

よ」

「わかった。サンキューな」

俺はそう言って体育館裏まで走った。

自分でもよくわからないけど、急がないといけないような気がした。

いた。4人で何か話してる。

4人というのは悠夜と光喜と竜先輩と梓ちゃんだ。

おれはバレないように曲がり角の隅に隠れて、聞き耳を立てた。

「なんで幹部会がここにいるんだよ」

「たまたまだろ。っち、あいつらにも俺らが魔法使いつてことを隠してたのに、まさか向こうから出向いてくるとは予想外だ」

魔法使いだと。

しかも陽河っていうと片桐と同じ3大魔法使いの1つだよな？

悠夜達がそれなのか？

「っでどうするの？本部も潰すの？」

「いや、今まで支部は簡単に潰せても、本部には幹部会とメシアがいる。一筋縄では無理だろ」

「悠夜は臆しすぎだ。残るは本部のみ、ここで一気に」

「ダメ」

「梓の言う通りだ。まだその時じゃねえ。返り討ちにされるのは目に見えてる」

支部が全部落ちたってことか？

でも支部にも最低支部長官1人と神兵2人が配置されて、簡単に落ちるはずはない。

それを全て落としたってことは・・・あの4人どれだけの力が・・・

「とにかく、今は隠れとくぞ」

「また転校するの？」

「光喜、名残惜しのはわかるけど諦める」

「じゃあ明日にでも手続きしとくか」

「その前にここにいる神兵5人を潰しとくか」

「誰それ？」

「烏丸鋭霧、相馬和、朝霧耀綱、紅皇月、そして鬼庭隼人だ」

！！！！

やべ完全にバレてる。

どうするべきか？ここで向かいうつても1対4では負けるのは分かってる。

つとなると・・・ここでこの話を聞けたことをラッキーと思っべきだな。

悠夜、悪いが潰れるのはお前だ。

そつと分かれば早速幹部会の皆に報告を・・・

「隼人！光喜君見つかった？」

げ、亜矢！こっちに来るな。

その前にそんな大声だすな。

「そんな所で何してるの？」

「隼人、お前・・・」

やば、見つかった！

第16話：文化祭（後書き）

聞き耳を立てていたことがバレた隼人。
隼人の運命はいかに！！？

第17話：隼人VS悠夜（前書き）

亜矢のせいで悠夜達に聞き耳をたてていたのがバレた隼人。この後
一体・・・

第17話：隼人VS悠夜

「なんで隼人がここにいるの？それに氷室さんも」

悠夜に続き光喜達も俺に気づいた。

「あれ？隼人こんな所でなにしてるの？」

「うち、こりゃ負けるとわかっててもやるしかねえな。」

しかもここは体育館裏、普段でも人気がないのに、今日とここを通る奴などいないだろう。

「……」

「？」

でも悠夜は何も言わずに俺の横を素通りして行ってしまった。

「え？え？待ってよ悠夜」

光喜らは悠夜の後を追った。

危なかった、亜矢がいなかったら今頃……

でも亜矢のせいで見つかったんだよね？

「なに？ケンカでもしたの？」

「いや、なんでもない」

俺は悠夜らと反対の方へ目的もなく歩きだした。

ほっとけば命を狙われるのは目に見えている。

だったら悠夜らが行動を起こす前に相馬さんや皐月達の耳にいれとくべきだな。

俺は校舎を歩き回り、皆を探したが、誰一人見つからなかった。

どういうことだ？もう悠夜の手が回ったってことか？

どっちにしてもこのままじゃあ見つかりそうにない。

「明日香」

「はい」

俺がそう呼ぶと、明日香は俺の隣に忍者みたいに現れた。

「今から言う人物を探してほしい。同じ学年の相馬和、3年の朝霧

耀綱、1年の紅臍月だ」

烏丸は多分探すだけ無駄だろう。

どうせ今この時間は学校にいないだろうし。

「わかりました。あと今から文化実行委員は会議室に集まるよう
と担任が」

「わかった。じゃあ3人のこと任せた」

そう言つて、俺は会議室に向かった。

会議の内容は片付け＋打ち上げのことだった。

でも今の俺にはそんなことどうでもよかった。

今一番気がかりなのは3組の席だ。

本当は相馬さんがいるはずなのに、今は空席だった。

俺はこんな所で無駄に時間を過ごしていいのか？

こうしてる間にも……

「っつ」

急にズシッと体が重くなり、俺は机にうつ伏せになった。

「一体何が……」

俺は会議室一帯を見渡すと、信じがたい光景が目に入ってきた。

「固まっている？ いや、止まっているのか」

おそらく誰かが時間操作をし、この学校内の時間を止めたのだら
う。

こんなでかい魔法を使えるのは、多分陽河4兄弟の誰かに違いな
い。

とりあえず俺は会議室から出て、学校の外を目指した。

他の教室や廊下にいる奴も、みんなその場で固まっていた。

「はあはあ、この廊下こんなに長かったか？」

体が重いせいで、壁にもたれながら歩くのがやつとの状態だ。

「明日香、いるか？」

でも明日香は初めて現れなかった。

「っ」ということは明日香も固まっているのか、それとも明日香の身

に何か？」

「隼・・・人・・・？」

靴箱近くの廊下でどこからか俺を呼ぶ声が聞こえた。

「誰だ？」

周囲を見渡しても、皆止まっただけで、誰が俺を呼んだのかわからない。

でもその中で一人だけ近くの教室の中に顔見知りかいて、俺はそいつの名を叫んだ。

「亜矢！」

亜矢は他の奴らと違い、その場で固まっておらず、その場に倒れているだけだった。

俺は亜矢を抱きかかえ、亜矢の名を呼んだ

「隼人も、動ける・・・みたいだね」

亜矢が苦しそうに言った。

多分俺同様変な圧迫感があるんだろう。

でもなんで亜矢は固まっていらないんだ？

「ねえ、これって・・・一体何なの？」

「わからねえ、でも普通じゃないのは確かだ」

俺は亜矢を壁にもたれさせた。

「亜矢はここで待っていてくれ」

そう言い残して教室を出ようとした。

「どこ・・・行くの？」

「ちよつとな。すぐ戻ってくるから」

「隼人、必ず・・・戻って・・・きてよ」

「ああ」

つと言ったものの、これほどの力を持つてる奴、しかもこんなの
に長く魔力を放出できる奴に勝てるのか俺？

「お！」

とりあえず、外に出てみたら急に体の重みが消えた。

少し離れて、学校を見てみると、薄い赤い膜みたいのに覆われていた。

「やっぱり出てきたか。隼人なら出てこれると思ったぜ」

背後から悠夜の声がして、俺は無意識に悠夜と距離をとった。

「悠夜！まさかこの魔法お前が・・・？」

「あ？ああ時間操作は俺にはできねえ。これをやってるのは竜だ」

「他の3人はどうした？」

「3人？何のことだ？」

「とぼけるな！お前以外だれがやったっていうんだよ！」

俺は悠夜に殴りかかった。

「知らねえっていつてるだろうが」

悠夜は俺の攻撃を避け、右ハイキックでカウンターしてきた。

俺は左腕で防御したが、パワーが強すぎて5メートルほど、吹き飛ばされた。

つくびりびりきやがる。あまりあいつの攻撃は受けないほうがいいな。

「何を勘違いしてるのか知らないが、俺はお前以外の神兵とは戦ってないぜ」

じゃあどうして相馬さんらの姿がなかったんだ。

「さあ、お前の力みせてみるよ」

みせろと言われても、今は口々にソウルイーターを使いこなせないし。

こうなったらハツタリでもかますか。

「そう簡単に手の内をバラす奴いないだろ。お前の方から見せてみるよ」

まともに使える技も持っていないのに、俺は強気に出た。

「俺は弱い者イジメは趣味じゃないんでな。お前が使わん限り俺も使う必要ねえ」

お、これはチャンスじゃね？

悠夜が魔法を使わないってことは、肉弾戦に持ち越せるじゃねえ

か。

「使う気がねえなら使わしてやるぜ」

悠夜はそう言った瞬間、姿を消した。

右！

俺の目を頼りに悠夜が右に移動したと信じ、右に体勢を変え、バックステップで距離をとった瞬間、

突然目の前に悠夜が現れ、両手で吹き飛ばされた。

「ぐはっ……」

俺はそのままグラウンドまで吹き飛ばされた。

「後ろに飛んだことによって衝撃を減らすとはなかなかだな」

いや、ただ単に距離をとろうと思っただけで、そんなことは1ミクロンも考えていなかったのだが。

「寝てるヒマなどねえぜ」

倒れている俺に追い討ちをかけようと、悠夜はその場から俺に向かってきた。

やべ！俺は立ち上がり、体勢を立て直そうとしたが、悠夜のほうが早く、仕方なくガード姿勢をとった。

「そんな所に立ってるだけじゃ勝てないぜ」

「つく……」

もう受けねえと決めたのに、ガードはしたものの、ほとんど両腕の自由は痺れのせいで奪われた。

「どんな能力が知らねえが、早く使わねえと死ぬぞ」

そんなこと言われても、俺に今使える技はない。

唯一使えそうな技も、血を流してない今は使っても無意味だろう。「それともそんな能力元からなかったとか？だとしたら時間を無駄にしたな」

なんだ？悠夜の右手に黒い魔力が集まっている。

「これで最後だ」

くそ、あんなのくらったら死ぬのは確実だ。

こうなったらダメ元で・・・
頼むソウリーター、少しでいいから俺に力を・・・

「なんだ・・・？」

急に俺の体が紫の発光体に包まれ、余韻だけを残し消えた。

しかも体が軽くなり、悠夜の動きが遅く見えた。

なんか知らねえけど、こりゃチャンスじゃねえか？

俺は悠夜に突っ込み右手を払いのけて、左手で悠夜を吹き飛ばした。

だが、悠夜は空中で体勢を立て直し、地面に着地した。

「やっとやる気になったか。それじゃあ勝負はこれからだ！行くぜ
黒蘭」

悠夜がそういうと、幾重にも並ぶ鯨の牙が俺に向かって大きく口
をあけている。

「不気味な魔法だな」

「一瞬で決めてやるぜ」

悠夜はそう言い、飛び上がり、俺にかかとおとしをしてきた。

「そんなの避けねえと思ったか？」

俺は余裕でかわし、落ちてくる悠夜を狙おうとした。

「バーカ、狙いは隼人じゃねえ」
なっ・・・

悠夜はそのまま地面に蹴りを入れ、土ぼこりが舞い、周囲は砂煙
につつまれた。

「めくらましか？こういう状況は前に一回あったんで、通用するか」
俺が見えなきゃ相手も見えない。条件は同じなんだ。

だとすると、悠夜はどうやってこの状況で俺に攻撃を仕掛けてく
るかだ。

俺はどこから悠夜が攻撃を仕掛けてきてもいいように身構えてい
たが、背後から悠夜の黒蘭が噛み付いてきた。

「ぐあー、この野郎」

その黒蘭を掴み、無理矢理引き離した。

何で俺の場所がわかるんだ？

「俺の魔力は闇だ。闇の中で育った動物は目が退化した代わりに、他の察知能力を手に入れる」

砂煙の中に悠夜の声が響く。

「黒蘭がいる限り俺には目は必要ない」

また悠夜の声が響く。それと同時にまた黒蘭が襲い掛かってきた。こいつ、うるちよると。あいつの居場所さえわかれば・・・

俺は黒蘭の攻撃をかわしながら、悠夜の姿を探した。

「これで終わりだ」

【ダークネスバスター】

闇の魔法が一直線に俺のほうに向かってきた。

これ待ってたんだ、この直線上に悠夜がいるはず。

【ソウルイーター・デュランダル】

ほぼ力が元に戻りつつことがわかり、勇者の剣をとりだし、ダークネスバスターが飛んできた方向に剣を突き刺し、高速移動した。

「ぐっ・・・」

捕らえた。

俺は瞬時に剣を抜き、悠夜に向かって剣を振り下ろした。

「ぐはっ」

勝った・・・

そう思った瞬間、俺の身体から紫の光が消えた。

その瞬間、体が石のように動かなくなり、俺もその場に倒れた。

「結構楽しませてもらってたぜ」

うつ伏せで倒れている俺に悠夜が話し掛けてきた。

まだそんな余裕が残っていたとはな。

「幻術は俺の得意分野でな」

幻だったってことか。やられたな。

まあできる限りのことはやったんだ、悔いはない。

「殺せ」

「……」

「どうせ殺すつもりだったんだろ？今の俺には寝返りをうつ力も残っていない」

俺はそう言っただけ目を閉じた

「ああ、でも気が変わった。しかもここで殺すのは惜しいからな」
悠夜はそう言い、俺の隣に腰を下ろした。

「俺らは今日でこの学校を転校する。まあ昼間聞いてたからわかるよな？」

「ああ」

「いずれまた、俺らと魔女狩りはぶつかり合う。それまで……
時間が来たようだ。それじゃあ隼人、俺が見逃した命無駄にする
んじゃないよ。」

悠夜はそう言い、腰をあげた。

「悠夜！」

俺は動けない身体にムチをうつて立ち上がり、叫んだ。

「悠夜を殺すのは俺だからな。それまで死ぬんじゃないぞ」

「っへ、それはこっちのセリフだ。じゃあな」

悠夜は左手を軽く上げて振り向かず、その場を去っていった。

「はあ、体が重てえ」

悠夜を見送った後、俺はまた倒れて、一眠りしようとした。

「隼人様。大変です」

「明日香？どうした？」

今まで行方不明だった明日香が戻ってきた。

「今すぐ魔女狩り本部へお戻りください。皆さんもそこにいます」
皆？相馬さんらもそこにいるのか？

とりあえず行ってみりゃわかるか。

「わかった。でも一人で動けそうにないんだ。肩を貸してくれないか？」

俺は明日香に起こしてもらい、魔女狩り本部へ帰還した。

第18話：裏切り（前書き）

悠夜との一戦中、本部では大変な事が起きていた。明日香にそのことを知らされ、隼人はそれがなんだったのか聞きに行くことに

第18話：裏切り

「隼人！」

帰ってくるなり、3人が騒々しく出迎えてくれた。

3人とは俺が昼間探し回っていた3人だ。

「どうした？急にいなくなったと思ったら呼び出したりして」

「鬼庭先輩もどうしたんですか？そんなボロボロで」

あゝそう言えば悠夜と戦ってそのまま来たからなあ。

「それで俺がいない間何があったんだ？」

「あのね、烏丸が支部長官に任命されたんだ」

あゝそれは結構なことだ。

あいつ仕事熱心だからなあ。

「だからなんだってんだ？別にいいことじゃないか」

「まあね、でも問題はそこじゃないのよ」

そこが問題じゃないってことは何処の支部に行くかってのが問題なのか？

そんな俺たちには全く関係ないじゃないか。

「その支部長官になるための試験が・・・」

「隼人おったんか。メシア様が呼んどるで」

後ろから光明寺さんの声が聞こえた。

なんか急をようしてるみたいだ。

やつば俺だけ集まらなかったからか？

その前に集まるってこと自体聞いてないし。

「今いきます。後は直接メシア様に聞くからいいや。明日香」

また明日香の肩を借りて、俺はメシア様の所へ向かった。

「陽河悠夜と一戦交わしたようですね」

第一声がそれだった。

まあ隠すわけじゃないし、今の姿の理由を聞かれたらバレること

だし。

「何かソウルイーターに異変はありませんでしたか？」

異変って言われても、ここ最近異変ばっかだし・・・

強いて言うなら悠夜との戦闘中に紋章から紫の発光体がでてきて戦いやすくなったことぐらいだ。

他は全く応答がなくなったり、技が使えなくなったりしたが、もう解決済みだ。

でも一応全て話しておくか。

「そうですか。もうバーストまで使えるようになりましたか？」

「なんですかそれは？」

「ドーピングみたいなものです。」

その代わりあまり使いすぎると命を削るのでほどほどにしておきなさい。

それと今まで応答がなかったのは眠っていたからです」

眠っていた？紋章が？なんのために？

「その紋章は敵から能力などを吸収することによって成長します。

そして一番最初の成長中の時は紋章は機能しなくなります。

後は魔力の化身が現れたら、今後は機能を停止せずに成長していきます」

へえ、知らなかった。

もしかしたら、俺ってすごい紋章を手にしてるとか？

しかもこの俺にも魔力の化身が入るとは感激だ。

「それとあなたは陽河悠夜と交戦中だったので呼ばなかったのですが、

鋭霧の今までの功績を称えて支部長官に任命させようと思うのです」
やっとその話か。よっぽど重要なんだろうな。

「それで鋭霧にはその支部長官になるための見極めの試験をしてもらいます。

その補佐をあなたにしてほしいのです」

俺が烏丸の補佐？なんでまた俺なんだ？

まあメシア様にも何か考えがあるのだろう。

「別にいいですけど、補佐って一体何をするんですか？」

「鋭霧の手助けをしてほしいのです。今回はあの子ひとりじゃないと思いますので」

「つらい？あの烏丸がか？」

この前聞いた話だと、普通に魔法使いを100人殺したと言っていたが、それよりつらいことなのか？

「それで試験の内容はなんですか？」

「氷室亜矢の暗殺です」

「はあ？亜矢を・・・暗殺って殺すことだよな？」

「どうして亜矢なんですか？亜矢は魔法使いでも何でもありません・・・」

「はい、あの子の親までは普通の一般人です。でもあの子には魔法使いの血が流れているのです」

「なんでだよ？親が一般人のくせにどうして、その子供が魔法使いなんだよ。」

「彼女の家系は昔魔法使いでした。でもそれは10代前に枯れてしまったのです」

「枯れたならもう・・・」

「魔力隔世って知ってますか？血は受け継いでなくても遺伝子だけは今まで受け継いでたのです。」

そして彼女、氷室亜矢に今まで受け継がなかった10代分の血がまとめて濃く受け継いだのです」

「ああだから学校内の時間が止まってる時、亜矢は動けたんだ。」

「だからって殺さなくてもいいんじゃないですか？」

「確かに今は害がなくても悪の目は小さいうちに摘んどくべきなのですよ」

「ダメだ。もうメシア様にこれ以上言っても無駄だろう。」

「だとしたら烏丸を止めるまで。」

「それで烏丸はなんて返事をしたんですか？」

「快くよい返事をしてくれました」

何考えてんだあいつは……

「それで隼人は？」

「その命承りました」

俺はそう言い残して、烏丸の所へ急いだ。

まだ一人で動くのは応えるが、今は休んでるひまではない。

「烏丸いるか？」

俺は烏丸の部屋のドアをノックした後に叫んだ。

「おお、隼人か。まあ立ち話もなんだから入れよ」

なんでこいつは笑顔でいられるんだ？

亜矢を殺してまで支部長官になりたいのか？

「隼人はそこにでも座っててくれよ。俺はちよつとお茶いれてくるから」

言われなくてもそうするよ。

俺はソファ―に座り、烏丸が戻ってくるまで待った。

数分後、烏丸が戻ってきて早速本題に入ることにした。

「お前、本当に亜矢を殺すつもりなのか」

「ああ、俺も一瞬考えたが、俺の出世がかかってるからな。隼人もそのつもりで来たんだろ？」

「いや、俺はお前を説得しにきた」

「はあ？まさかやめるとかいっわけないよな？」

「そのまさかだ。亜矢とは昔からの幼馴染だ。それは烏丸にとっても同じことだろ？」

俺はできるだけ、感情を押し殺して言った。

感情の赴くままに言ったら、戦闘になりかねんからな。

仲間同士の戦いはごめんだ。

「だから、俺はこの答えが充分に考えた答えだ。

亜矢ちゃんがかいつ魔法使いの血が目覚めるかわからないから、隼

人を補佐につけるって言われたのに、

これじゃあ逆に足手まといだな。もういい、お前は何も手を出すな。

「はあ？言わしておけば、足手まといだ？調子にのるなよ。」

「お前なあ・・・」

「あの試験の話をしているのか？」

俺が烏丸に殴りかかろうとしたとき、水無月さんが部屋に入ってきた。

ああ、烏丸は水無月さんの神兵だもんなあ。

同じ部屋にいるのは当たり前か。

「水無月さん、隼人のやつやめろとか言うんですよ。なんか言ってるって下さい」

「うち、こりやもう説得でやめさすのは無理だな。」

「隼人、メシア様の命は絶対だ。たとえそれが試験でもな」

「そう言い残して、自分の部屋に戻っていった。」

「言い忘れたが、幹部会の人は部屋が2つある。」

「自分の神兵の部屋と、自分専用の部屋だ。」

「つということだ隼人。メシア様の命は絶対なんだから、邪魔するなよ。」

「じゃあもう用はないから帰れ」

烏丸はそう言って、俺を部屋から追い出した。

「お茶ぐらい飲ませてから追い出せよ。」

「まあ、そんなことはどうでもいいが、本当にどうしよう。」

「メシア様を裏切り亜矢を助けるか？」

「いや、そんなことしたら俺の命が狙われる。」

「俺は頭を抱えながら、仕方なく自分の部屋に戻った。」

「隼人、どうしたんや？落ち込んだるようやけど？」

「部屋には光明寺さんがいた。」

「光明寺さんに相談しても、きつと水無月さんと同じ答えが返って

くるんだろっなあ。

「なに遠慮しとんねん。いいからワイに相談してみ？どうした？恋の悩みか？」

光明寺さんは俺の肩に手を回してきた。

んまあ恋の悩みに近いような。

でもだからって俺が亜矢のこと、いや、隠すのはやめよう俺は亜矢のことが好きだ。

好きな人が殺されるのが嫌だから俺はここまでムキになれるんだ。ただの知り合いだったらどうだったんだろっ……？

とりあえず俺は光明寺さんを信じて、全てを話すことにした。

「んゝそりやメシアの命令は絶対や」

やっぱりな。まあ当然のことだろう。

「でもな、気に入らんかったら刃向ったらええ。

それが自分が正しいと思うんやったら、ワイは止めへん」

「光明寺さん……自分の神兵がメシア様を裏切ろうとしてるんですよ。」

それをほっとしてもいいのですか？」

「だから言うとするやろ。隼人がそれを正しいと思ったらそっちの行動をとればええ。」

ワイは隼人がとった行動をが正しいと信じるだけや」

しばらく考え、俺はようやく決心した。

意地でも烏丸を止める。

「ありがとうございます。やっと決心が固まりました」

俺は光明寺さんに礼を言い本部を出た。

烏丸が亜矢を狙ってくるとしたら、自宅の方が迎え撃ちやすいからだ。

「なんたって、亜矢の家は俺の家の隣だからな」

あゝなんか裏切ると思ったら急に緊張してきやがった。

「怖いのか？」

「当たり前だろ、メシア様を裏切るとか自殺行為……」

「って今俺誰と喋ってるんだ？」

「声が聞こえた方に振り向くと」

「相馬さん！ここ2階だぞ」

「俺の部屋の窓から入ってきたみたいだ。」

「まさかもう刺客が……」

「あゝもう、そんな敵意剥き出しにしくても大丈夫よ。ちょっと隼人君の耳に入れておきたいことがあつてね」

「耳に入れておきたいこと？なんだよそれ」

「明日の夜、烏丸君が例の試験実行するみたい」

「明日の夜か。じゃあ今日はとりあえず大丈夫だな。」

「その話信じていいんだよね？」

「なんで嘘の報告しなきゃならないのよ。確かに伝えたからね」
「伝えた？」

「待て、それって誰からの伝言だ？」

「誰からって私達3人よ。あ、それと皐月ちゃんから伝言、」

『もし殺されても骨ぐらい拾ってあげます』だって」

「へへ、あいつらしいな。」

「皐月に言つとけ。死なねえから無駄な心配するなとな」

「わかった」

「そう言つて、相馬さんは窓から出て行つた。」

「明日か。せつかく時間があるのに何も準備してないじゃ馬鹿みた
いだもんな。」

「よし、とことん抵抗してやつか。」

第19話：決戦前（前書き）

メシアに烏丸と共に亜矢を殺す命が下り、隼人はその命に反し、烏丸を止めることを決意した。

第19話：決戦前

さて、実際烏丸を迎え撃つと言ってもこういうことは未経験でなにをすればいいかわからない。

何か、罾でも張ろうと思っても、そう簡単に住宅街に張れるわけがない。

しかもこっちは俺だけで向こうは何人連れてくるかもわからねえ。もしかしたら、信徒を引き連れてくるかもしれないし、烏丸一人で乗り込んでくるかもしれねえ。

俺のほかに烏丸に違う補佐がついたとしても、多分朝霧先輩が妥当な所だろう。

だったら朝霧先輩もどつちかと言うと俺の意見に賛成なんだから見逃してくれるかも・・・

「いや、そういう甘い考えは捨てるべきだな」

俺はそのまま何も思い浮かばないまま朝を迎えた。

「ダメだ。何も思いうかばねえ」

もう日は昇りきって、お昼過ぎだ。

このまま何もせず夜になっちまったら、せつかくの時間も無駄になっちまう。

まず、亜矢にこのことを・・・いや、そんなこと言っても不安にさせるだけだし、第一信じないだろう。

誰かいれば意見の出し合いとかできるのだが。

「仲間がいなくて不便なもんだなあ」

考えてばっかだと能率が悪いと判断し、俺はかなり遅い昼食をとることにした。

その昼食の準備中に家の呼び鈴が鳴った。

「一体誰だよ？」

今日は平日だから亜矢じゃないのは確かだ。

だとすると・・・信徒がもう俺を狙いに？

いや、その前にまだ行動は起こしてないから、メシア様に気づかれていないはずだ。

そう考えてるうちも呼び鈴は止まらない。

つてか連打するやつは俺の知ってる中ではそう多くない。

「はいはい、いまですすよ」

そう言いながらドアを開けた。

「やっぱりいた」

呼び鈴を連打してたのは光喜だった。

「どうした？今日は光喜一人だけか？悠夜はどうしたんだよ？」

「ん？今日は悠夜いないよ。昨日のうちに別れを済ましたんでしょ？」

あゝそういえばそんなことも言ってたな。

「それにしてもよく俺が家にいるってわかったな」

「うん。悠夜がね、『俺との一戦を交えた次の日に学校などいけるはずがない』って」

そういうことね。でも傷はさほど深くなかったし、寝たらほとんど治っちまったけどな。

「まあ立ち話もなんだから、急ぐ必要がないんだったらあがっていいよ」

「ううん、悠夜に黙って出てきたから、早く戻らなくちゃいけないんだ」

「そうか、つで何の用だ」

「うん、隼人が魔女狩りでも俺は隼人といつまでも友達だから。」

悠夜は昨日あんなこと言ってたけど、多分本気じゃないから」

いや、あいつはマジで昨日俺を殺す気だったぞ。

「何かあったらいつでも相談してよ。あ、でも引越し先教えれないからそれは無理か」

笑いながら光喜は言った。

「ありがとう。なあ光喜ちよつと話があるんだけど」

悠夜には期待してないけど、光喜も一緒だと烏丸を止めれるかも。俺は一瞬そう思い、光喜にそのことを話そうとしたけど、

「いや、やっぱりなんでもない。俺も光喜とはずつと友達だからな」
「うん。じゃあ悠夜に見つかったらうるさいから行くね」

「ああ」

光喜は走って帰っていき、俺はその姿が見えなくなるまで見送った。

「よかったですか？」

「な！」

俺の背後から明日香が話し掛けてきた。

「明日香、なんでここにいるんだよ。俺は今から魔女狩りを抜けるんだぞ。そんな奴と一緒にいたら」

「勘違いしないで下さい。私は魔女狩りに組したのではなく、隼人様、あなたに組したのです」

『あなたには鬼庭君と一緒に行動して、真の魔女狩りを見てほしいの』

そつえば北条さんはそう言ってたっけ。

今ごろ北条さんは何してるのか？

こういうときにいてくれたら、頼みやすかったんだが

「隼人様？」

つとそんなこと考えていらなかったな。

明日香がいるってことは、俺一人じゃないってことだ。

しかも明日香は諜報部員だ。

情報さえあればなんとか・・・

「明日香、烏丸の行動を調べてくれ。あとできれば今の魔女狩りの動きも頼む」

「わかりました」

そう言い残して、明日香は消えた。

「今思えば今日はずっと亜矢の側にいたほうがよかったか？」

亜矢は今学校、夜に狙うと情報があるが、それがデマだと今ごろ・

・・・

「亜矢！」

俺は急いで家を飛び出した、瞬間誰かとぶつかった。

「きゃ」

「あ、すいませ、って亜矢、お前学校はどうしたんだよ？」

「早退。隼人が休みって聞いて、昨日何かあったんじゃないか、心配したんだよ」

そういえば、昨日のあの件から会ってなかったしな。

「それに、昨日家に行っても留守だったみたいだし」

「あゝもう寝てた」

バレバレの言い訳をして、その場を凌いだ。

「まあ元氣みたいで一安心だよ。」

そう言いながら家に入り、スーパーから買ってきた野菜などを冷蔵庫にしまっていた。

「そんな物買ってきてどうするんだ？俺、料理できないぞ」

「ん？私が作ってあげるよ。どうせ隼人口クな物食べてないんですよ」

「あ、あ、ありがとう」

急に動揺してしまい、まともに亜矢の顔が見れなくなってしまい、俺は礼だけ言い自分の部屋にかけこんだ。

やべえなあ、急に意識しだしたじゃねえか。

こういうことは月に一回ぐらいしてくれて、もう慣れたと思ったんだがな。

俺は布団に仰向けに倒れこみ、心を落ち着かせた。

「隼人様、今戻りました」

真つ暗な部屋に明日香の声が聞こえてきた。

ん？寝ちまったのか。

俺は部屋の電気を点け、明日香の前に立った。

「どうだった」

「はい、未だ隼人様の行動にメシア様共々気づいていません」

つということは、烏丸は一人で俺と戦うつもりか。

「でも、烏丸鋭霧には100人の信徒ともう一人の補佐として武田毅が派遣されました」

な！武田さんが・・・

武田さんといえば元支部長官で、実力は幹部会の人たちに遅れをとらないすごい人だ。（11話参照）

そんな人も一緒だとは、やっぱり最初から無駄だったのか。

「隼人様、私も共に戦わせていただきます」

「明日香・・・」

その気持ちは嬉しいんだが、明日香は悪魔で諜報部員だ。

戦闘スキルは北条さんとの戦いで充分とは言えないが、大体はわかる。

スピードはそこそこだが、戦闘スキルはもしかしたら、信徒以下だ。

そんな子を戦わせるわけにはいかない。

「お前は隠れとけ。俺と一緒に無駄に死ぬ必要はない」

「死ぬつもりなのですか？」

つい口にしてしまったけど、多分そうだろう。

いくら俺でも烏丸と武田さん2人相手に勝てるはずがないしな。

「嫌です。隼人様だけ危ない目に合わせるわけにはいきません」

こいつがこれほどまで頑固だとはな。

「わかった。でもお前は死ぬな。俺が死んだら北条さんの所へ戻れ。

それだけは約束してもらおう」

「・・・わかりました」

しばらく考えた後、納得のいかない顔で明日香は承諾した。

さて、下ではいい臭いもしてきたし、亜矢はご飯の支度は済んだのだろうか？

「おお、今日は中華か」

食卓には酢豚、マーボー豆腐、チンジャロース、その他いろいろのおかずが並んでいた。

「お口に合うかわからないけどね」

亜矢はエプロンを外して、椅子にかけた。

いや、亜矢の料理の腕は確かだ。

俺が保証する。

「それじゃあ覚めないうちに食べようか」

「お？家で親が待ってるんじゃないのか？」

いつもは作るだけ作って帰るのだが、どういう風の吹き回しだ。

「そのつもりだったんだけどね。今日は一緒に食べようかなあと思って。それに……」

「それに？」

「何か嫌な予感がするの。このまま別れたら、もう隼人と会えないような気がする」

まさか魔法使いの血がそう感じさせてるのか？

「おかしいよね？でもわかつちゃうの。何でか知らないけど、私には見えるの」

見える？もしかして未来が見えるとか？

そういう魔法使いがいるとも聞くが、亜矢がそういう種類の魔法使いかどうかわからない。

でも俺がしてやれることは、

「気にしすぎだ。ほら早く食おうぜ」

「う、うん」

亜矢を不安にさせないことだ。

「それじゃあ明日、学校でね」

「ああ」

そう言って亜矢と家の前で別れた。

「明日香」

「なんででしょうか？」

「今日は常に亜矢の側にいてほしい」

「それでは、共に戦えないじゃないですか」

「お前には、俺が仕留め損ねた信徒を、亜矢の所へ向かう前に撃破してほしい。できるだけ烏丸と武田さんは俺が食い止める」

「わかりました」

そう言っつて、明日香は闇に消えた。

「よし、亜矢のために俺はこんな所で死ぬわけにはいかねえ」

気合を入れなおし、俺は自分の屋根の上に陣取った。

ここなら、どこから攻めてきても1発でわかるからな。

第19話：決戦前（後書き）

さあ、次回いよいよ出会い編での最終決戦が始まる。

第20話：隼人VS武田毅

「新たな支部長官に任命させてもらえんと思つたら、新米神兵のお守りかよ」

武田がしぶしぶ信徒をまとめて、烏丸に報告しにいった。

「この命、お前は黙つて見てろ。失敗は許されないからな」

「何を言っている。指揮官はこの俺だ。お前はただ俺の補佐役だ。それを間違えるな」

烏丸は元支部長官の武田に向かって、強気に出た。

「ここで死にたいらしいな」

「上等だ。おまえがどれほどうぬぼれてるか、教えてやる」

武田は刀を抜いて構え、烏丸は体に岩石の鎧をまとい、魔力を高めた。

「仲間割れはやめろ。今は両者同じ身分なのだから、少しは我慢したまえ」

水無月がそう言いながら現れ、仕方なく武田は剣を収め、烏丸は高めた魔力を戻した。

「何用だ水無月？この命は俺がいるから大丈夫だぜ」

武田が馴れ馴れしく水無月に言った。

「だから不安なのだ。隼人の姿が見えん。もしかしたら立ち向かってくるやもしれん」

「隼人・・・」

「そんな時はこの刀で殺すまでだ」

武田は青い刀を抜き、自慢気に言った。

「それを言いに来たのだ。鬼庭隼人は絶対に殺すな。メシア様の所有物、ソウルイーターを返してもらわなければならないからな」

「っへ、要するに殺さずに連れてこればいいんだろ。面倒だな」

武田はそう言い、先に行ってしまった。

「鋭霧、1つ忠告しておくが、お前がすることは隼人と戦うことで

はない。魔女、氷室亜矢を殺すことだ。それを忘れるな」

「あ、はい。わかりました」

水無月はそう言い残して、去っていった。

武田には強気で出てた烏丸も、水無月にはちゃんと礼をして答えた。

「うゝ寒いなあ」

屋根の上でまつこと3時間、一向に烏丸達が攻めてくる気配はなかった。

「本当に今日来るのか？あいつ」

今ごろ亜矢はもう寝てるのだろう。

亜矢の部屋に目をやると、もう明かりは消えていた。

まあ亜矢には明日香がついてるし大丈夫だろう。

「ちよつと身体を温めるついでにコーヒーでも」

入れてこようと立ち上がった瞬間、妙な気配に包まれた。

「これは・・・結界。そうか、やつと動き出すか」

この結界は大規模な戦いが予想される時に使う結界だ。

結界内にいる魔力の持たない人間は避難されるし、犠牲者を出さない時にはうつつつけの結界だ。

それに例え家とかが崩壊しても、その結界を解けば、結界を張った時の状態に戻る。

「っということは、向こうにはもう俺が刃向かうつてことがバレてることか」

しかも考えてるヒマはもうなさそうだ。

信徒の大群が雪崩のように押し寄せてきて、俺一人簡単に飲み込めるぐらいのスピードでやってきた。

「昔の俺ならうろたえてたかもしれないが、今はもう違う。ソウル

イーターの力をみせてやる」

【サーベルレイン】

技の名の通り、俺が信徒に手のひらを向けるだけで、信徒の大群に、剣の大雨を降らした。

「ぐわ」

「ぎゃ」

色々な悲鳴の中、信徒は次々と串刺しにされていく。

でもその中に2人だけ無傷で乗り越えてきた者がいた。

烏丸と武田さんだ。

「ここからは通すわけにはいかない」

【ソウルイーター・蛇眼】

「無駄だ」

「ぐはっ」

2人の動きを止めるはずだったのが、何故かそれを無効化され、俺は武田さんに殴り飛ばされた。

俺の魔力が低かったのか？

でも低いからって負けとは限らない。

「お前はさっさと氷室亜矢を殺しにいけ。こいつは俺が抑える」

武田さんは顎で烏丸に合図を送った。

「させるか」

【ソウルイーター・デュランダル】

「さて、こいつの切れ味を確かめてみるか、妖刀、大蛇^{オロチ}」

武田さんは腰に下げていた青い刀を抜き、俺の目の前に向けた。

「青い刀？」

俺はバックステップで距離を取り、みすみす烏丸を逃がしてしま
った。

青い刀からは禍々しい妖気が漂っていて、その破壊力ぐらいいは味
わらなくてもわかる。

「その剣で我が妖刀を受けられるか」

俺の剣は勇者の剣だ。

負けるはずない。

それに剣と刀がぶつかり合えば普通は刀が負ける。

「そっちこそ刃こぼれには気をつけるべきだぜ」

刀と剣がぶつかり合い、キンキンと軽い音が響きわたった。

「お前の腕はわかった」

武田さんは後ろに下がって刀を下に下ろした瞬間

【漣】なみ

刀を下から上へ切り上げた瞬間、斬撃が俺に飛んできたのか、肩
を切り裂かれた。

「次受けたら死ぬぞ」

その忠告を聞き俺は急いで、左に避けた。

【粒時雨】

すごい速さで刀を振り回した瞬間、今まで俺がいた場所の屋根が
めくれ上がり、無残な物になっていた。

「あんなのくらったら、痛いじゃ済まねえぞ」

「いやー」

後方から亜矢の叫び声が聞こえ、俺は振り返った。

「まずは自分の心配をしろ」

【漣】

「ぐは」

ダメだ、武田さんに背を向けたら、俺がやられちゃう。横目で亜矢の部屋を覗くと、まだ明日香が奮闘しているみたいで、まだなんとかなりそうだ。

「どうした？もうおわりか？」

俺はデュランダルを消して、魔力を高めた。

俺が魔力を高めてるのに気づかないってことは、武田さんは根本的な一般人？

「一瞬で決めさせてもらう」

【ソウルイーター・バースト】

自分中心に風が渦を巻き、俺の体は紫に輝きだした。

武田さんは、身の危険を感じたのか、刀を構え、俺から全く目を離さなかった。

でも遅い。

俺は一瞬で武田さんの背後に回り、両手で吹き飛ばし、追い討ちをかけるように屋根に叩きつけた。

武田さんは屋根と2階を貫通したが、瞬時に受身をとられて姿を消した。

「やばい、見失ったら厄介だ」

俺も突き抜けた床から、一階に降り、武田さんを追った。流石に一般の民家であって狭い。

こんな所で襲われたらひとたまりもないだろう。

有り得ないと思うけどまさかこれを狙っていたとか？

そう思いながら、探していると・・・

「決着を急いだな」

急に天井から現れ、構える隙もなく

【桜吹雪】

な……赤い刀？

今まで持っていた青い刀ではなく赤い刀で、武田さんは回転しながら、俺を何度も切り裂いた。

「ぐはぁ……」

俺は地に倒れこみ、紫のオーラも消え、荒れた呼吸を戻そうとした。

「2つ目の妖刀、紅桜だ。見る、お前の飛び散った血は桜の如く」
「はぁはぁ……」

あの刀に毒でも塗られていたのか、俺の五感はだんだん麻痺してきて、武田さんが言ってることさえも聞き取れなくなってきた。

しかも目まで霞んできて、とても戦える状態ではない。

「最後にもう一花咲かせてやる」

このままだとやばい。

手が足のどつちかさえ動いてくれれば……

「死ね」

【ソウルイーター・ブラッドシールド】

「ふん、まだ刃向かうきか」

適当にブラッドシールドを発動したけど、なんとか防ぐことができたようだ。

でもピンチなのは変わらない。

「誰だお前は……」

ん？誰か来たのか？

武田さんが知らないってことは、向ここの味方ではなさそうだな
隼人、そんな所で寝てる場合か？」

誰かに揺すられている。

一体誰が……って麻痺していた五感が元に戻ってきた。

治癒魔法の使い者か？

体の自由もきき、俺は目を開けて助けてくれた奴を確かめた。

「悠夜、それに梓ちゃんも。どうしてお前がこんな所に」

俺の目の前には距離をとり膝を折っている武田さんと、ポケットに手をつっ込んだ悠夜、それと俺の横で治癒魔法を当ててくれた梓ちゃんがいた。

「光喜が昼お前の所に行っただろ？それで様子が変わっているから、最後に来たらこれだ。空気が淀んでるじゃねえか」

「だからって俺を助ける必要なんかお前にはないだろ」

「助けた覚えはない。敵が魔女狩りだったから、消しにきたただけだ。光喜と竜は烏丸の所にいる。おまえはそっちにいけ」

悠夜はそう言い残し、武田さんに突っ込んだ。

「お前がかの3大魔法使い、陽河か。おもしろい、おまえをメシア様の手土産にしてくれる」

武田さんは立ち上がり、腰に掛けてあった小刀に手をかけた。

「そんな小刀で止めれると思うなよ」

悠夜はあらゆる体技の連携で、武田さんを休ませる間もなく攻撃しつづけた。

「っへ」

その途中武田さんが不敵に笑い、悠夜はバックステップで距離をとった。

「っぐ……」

悠夜の右肩には、小刀が刺さっており、悠夜はその小刀を抜き捨て、手で止血した。

「【マインドブレイカー】これでお前はただの人間だ」

武田さんはそう言い、ゆっくりと悠夜に近づいていった。

「悠夜、あとは俺が」

俺が前に飛び出そうとしたとき、梓ちゃんに服を引っ張られた。
「ダメ」

「え？」

「隼人、お前はさっさと、烏丸の所へ行つて来い。こいつは俺が倒す」

そんなこと言つても、悠夜の右肩からは止まることなく血があふれ出ていて、とても戦える状態ではない。

それにさっきの武田さんの言葉もきになる。

ただの人間つてどういうことだ。

考えている間に武田さんは、悠夜の前に立ち、青い刀大蛇を振り上げていた。

「死ね、小者が」

そう叫びながら刀を振り下ろし、悠夜はそれに微動だにしなかった。

「なに・・・」

「梓ちゃん！」

悠夜を助けるため、梓ちゃんが素手で、しかも片手で刀を受け止めていた。

「ただの人間とはそういうことか。呪術も妖術も使えねえ、しかも反射神経なども衰えている。これは厄介だ」

悠夜がノンキに立ち上がり

「隼人、逃げるぞ」

「はぁ？」

梓ちゃんを置いて逃げれるわけではない。

本人は武田さんの刀を握り閉めたまま動かない。

「梓は大丈夫だ。もう一人のほうを心配しろ」

確かに、亜矢のほうもこのまま放っておくわけにはいかない。

「じゃあ俺は亜矢の所へ行つて来るが、悠夜は？」

「俺はしばらく高見の見物とさせてもらうぜ。今はあいつのせいで、全く力がでないからな」

「そうか、まだそこらへんに信徒がいるかもしれないから気をつけろよ」

悠夜にそう忠告して、亜矢の所へ向かった。

第21話：隼人VS烏丸鋭霧（前編）

亜矢の家にいないってことはどこかに移動したってわけか。周りを見渡すと、少し離れた所に煙がたっている。

多分あそこで今、戦闘が繰り広げられているんだろう。そこに移動中の時、その場所から何かが飛んでいった。魔法球か何かと横目で確かめると

「明日香？」

すごい勢いで明日香が空中に舞い上がっていた。

俺は明日香を追い、落ちてきた所を地上で受け止めた。額からは出血がひどく、手も力なくなっている垂れていた。

「おい明日香どうした？なにがあった？」

「烏丸・・・化身が・・・気を・・・つけて」

っただけ言って明日香は意識を失った。

とりあえずこのままほっておくわけにはいかない。

何か血を止めるものは・・・

こういう事は経験不足のため、パニックってなにをすればいいかわからなくなる。

「どいてろ」

悠夜が自分の服の袖をちぎり、明日香の頭に巻いた。

「こいつは俺に任せろ。お前は早く行け」

そうだった。こんな所で時間を食ってる暇はない。

「悠夜、悪いな」

俺はそう言い残して、烏丸の所へ行った。

戦塵が立っているのはこの辺りなんだが、烏丸たちの姿が見当たらない。

叫んで光喜達を探すにしても、それじゃあ烏丸にも俺の場所がバ

レちまう。

「グルルル」

なんだ？このうめき声みたいなのは。

人間じゃない、獣のような声。

後ろから聞こえてきたため、振り返ってそれを確かめようとした瞬間、

「ガウ」

青い狼が俺を襲ってきた。

間一髪でその攻撃を避けられたものの、俺は体勢を崩し、その場に倒れた。

狼は休むことなく、俺を襲ってきた。

しかもそのうめき声はそいつ以外に、周りから聞こえてきたため、一匹じゃないことが一瞬でわかった。

でもそれがわかったとしても、今の俺には避ける術がない。

【ダークネスバスター】

闇の波動が青い狼を一気に消し去っていった。

この技は悠夜か？いや、悠夜はまだ魔法は使えないはず。

「そんな所で腰を抜かしたらやられるぞ」

竜先輩、それに光喜と亜矢。

「隼人、これって一体何？私の頭が変になっちゃったの？」

そう言って、亜矢は俺に抱きついてきた。

普通の人はそう思うよな。

「大丈夫、亜矢は正常だ」

そう言って頭を撫でながら慰めてやった。

「やっと隼人が参戦か。てっきり武田にやられたと思ったぜ」

烏丸の周りにはさっきの狼が数匹群がっている。

獣使いにでもなったのか？

「烏丸、考え直せ。亜矢を殺さなくても、他に道はあるはずだ」

「っへ、戯れ言を。隼人もこんな馬鹿なことするよりか、黙って見てたほうがよっぽどよかったのにな」

別に俺の今してることが間違いだと思っていない。

故にこの判断が正しかったと信じている。

「今ならまだなんとかなる。本部へ引き返してくれ」

「そこをどけ隼人。お前と喋っているヒマなどない」

聞く耳持たずか。こりゃ一回痛い目にあってもらわねえとダメみたいだな。

「竜先輩、光喜、後は俺一人で充分だ」

「何言ってるの？こいつめちゃくちや強いよ。隼人一人じゃあ無理だよ」

「そうだぜ。ここは3人で一気に・・・」

「俺のことは大丈夫だ。それより梓ちゃんの方へ行つてあげてくれ。あつちは一騎打ちで勝てるような相手じゃないからな。」

それに亜矢をここに残すのも危なすぎる」

光喜達に梓ちゃんのことを話、助けに行ってもらうように説明した。

「梓もそう弱くはないが、隼人一人で本当に大丈夫か？」

「大丈夫ですよ。俺にはどうしても負けられない理由がありますんで」

俺は2、3歩前に出て、デュランダルを取り出し、烏丸と対峙した。

「作戦は決まったのか？まあ別に隼人がおろうがおるまいが、戦況には変わらないからな」

烏丸は未だ余裕の表情で俺たちを見下してきてる。

「そうか、光喜、その子を連れてこの場から退くぞ」

「う、うん」

光喜が泣き叫ぶ亜矢の手を引っ張り、竜先輩と共に退いてくれた。「隼人ゝ嫌、私も隼人と残る」

妙に亜矢の叫びが、胸に響き、とても息苦しかった。
でもこれでいいんだ。これで周りを気にせず戦える。

「お前正気か？せつかくの仲間を手放すとは負けたと同じだぞ」

「やってみなくちゃわからないさ。うおおおお・・・」

俺はデュランダルを頭上に構え、突撃した。

「死ぬ気か？お前がここまで馬鹿だったとはな」

馬鹿という単語を思い切り強調して言ったあと、右手を俺の方へ差し出した。

すると烏丸の周りに群がっていた狼が次々と襲い掛かってきた。

「邪魔をするな！」

【風魔法剣】 ウィンダー

デュランダルを思い切り下に振り下げて、前方に小規模な竜巻を発生させて、狼たちを一掃した。

単に、思いつきで武田さんの漣をマネてみたただが、ここまでうまくいくとは予想外だ。

まあ、違うと言えば漣は斬撃で、俺のは風で根本的に違うが・・・

「何、魔法剣だと！でもそんな下級魔法剣で俺を倒せると思うな」
思ってねえよ。お前には特大の技をくらわしてやる。

「一気に勝負が終わっちまうのは癪だが、力の見せしめだ。来い、フェンリル」

フェンリル？あの青い狼の親玉ってことか。

普通の狼とは違うのは見た目ですぐわかる。

頭に2本の黒いの角が生えていて、青と白と黄色の綺麗な毛並み、身体は3メートル弱ある。

だがこんな獣一体どうしたんだ？

「驚け。俺の魔力の化身だ。隼人だと10秒ももたんど」

な・・・烏丸はもう魔力の化身を召喚することができるのか。
でもこれはラッキーだ。烏丸のフェンリルをソウルドレインで吸

収して、俺ももう一段階強くなつてやる。

「行けフェンリル。あいつをかみ殺してしまえ」

烏丸がそう命令した瞬間、フェンリルは地面の中に沈んでいった。一瞬戸惑ったが、俺の相手はあんな狼じゃない。烏丸だ。

消えたなら出てくるまでほつておく。

「烏丸」

俺は一直線に烏丸に立ち向かつていったが、烏丸は構えることもせず、ただ突つ立っているだけだった。

その余裕、後悔することになるぜ。

【ソウルイーター・バースト】

俺の身体は紫に輝きだし、一気に加速して、烏丸を殴りつけた。

「やってくれるじゃねえか。フェンリルもうやってもいいぞ」

烏丸がそう叫ぶと、大地が揺れ、地面が割れ始めた。

その割れた地面から、20メートルは軽く超えている、巨大な土の塊の化け物が現れた。

化け物の頭の上には烏丸の魔力の化身、フェンリルが乗っていた。

「こんな奴相手にできるか」

俺の標的は烏丸のみ。

あいつさえ倒せば、あの化身も消える。

「おつとお前の猛攻もここまでだぜ」

体が重い。石化しているのか？

いや、体全体が土に覆われ始めている。

「気づいたか？あの巨人は大して戦力にはならないが、俺とフェンリルの半径30メートルに入ってきた奴は、粘土に覆われ土の塊になる」

なるほど、そういうことか。

俺は身体についている粘土を掻き落とした。

まあ石化に比べれば大したことないが、厄介なことには変わりな

い。

粘土になる前に烏丸を倒すにしても、そんな賭け事は危なすぎる。やっぱりあの巨人から倒すべきだな。

【サーベルレイン】

巨人に向かって剣の雨を降らせたが、その巨人には全く効かず、全て弾かれた。

無敵かよあいつ。

「無駄だ。お前はもう死ぬしかないんだよ」

いや、まだだ。今は勝算がなくても、作ればいいだけだ。

なんとかあのフェンリルの能力をソウルドレインできれば、少しは勝算ができる。

このままバースト状態だと体力の無駄使いだ。

ここは危険だが一気にフェンリルの能力を吸収しに行くか。

俺は巨人の頭の上で高見の見物をしているフェンリルを睨みつけた。

「よし、いくぜ」

気合を入れ、土の巨人の身体を走りながら登った。

「血迷ったか？フェンリルは地面を伝って移動できる。しかもそんな狭い足場だとお前の方が不利だぞ」

そんなことはどうでもいい、俺の目的はあいつをソウルドレインするだけだ。

あと10メートル近くになると、巨人の能力が発揮しだして、俺の身体はどんどん重くなり、登りづらくなってきた。

「くそ、あとちょっとだというのに」

「がはははは、どうした？ヤモリみたいに這いつくばって？」

やばい、重くなりすぎて、指とか足が身体を支えきれず、痺れてきた。

やっぱり、無茶だったか。

「フェンリルそいつをこっちに、蹴り落とせ」

烏丸がそう言い、フェンリルは俺のところへ駆け下りてきた。
チャンス、俺はその巨人を蹴り離れ、右手を空に向かって広げ

【ソウルドレイン】

タイミングはバツチリだ。

俺が技を発動したと同時に、目の前にフェンリルが蹴り落とそうとしてきた。

だが遅い。フェンリルが俺を蹴落とす前に、ソウルドレインが発動し、フェンリルはそのまま苦しみながら落ちていった。

「ってか俺もすごい勢いで落ちる〜」

粘土で固められた身体はすごい重量感で、かなりのスピードで落ちていった。

「痛って〜」

地面に落ちたのと同時に身体に固められた粘土も一緒に割れた。
むしろこの粘土のおかげで助かったとか？

しかもさっきの巨人も何故か消えていた。

「隼人、フェンリルに何をした？」

何をしたって、ちょっと力をもらったただけなんだけど……

——眠りの淵から私を呼び起こしたのは誰だ。

ソウルイーターの主よ、お前が私を呼び起こしたのか。

ならば問おう。お前は私の力が必要か——

俺の頭の中からそういう声が響いた。

しかも妙に胸の鼓動が早い。

それに体中が燃えるほど熱い。

「お、フェンリル無事だったか。もう俺は怒ったぜ」
今の俺には烏丸の声など聞こえず、ドクンドクンと胸の鼓動だけ大きく鳴り響いた。

——時はまだ熟せり。

だが私を必要とするならば、解放しろ

さすれば私はお前の剣ツルギとなろう——

これはもはやフェンリルの能力なんかじゃない。
何かが俺を呼んでる？

いや、ソウルイーターが俺を？

いいぜ、呼んでやろうじゃないか。

「俺の邪魔をしたこと後悔するがいい」

【エアーストリーム】

回転しながらすごい勢いでフェンリルは俺に突撃してきた。
早速お前の力見せてもらおうじゃねえか。

俺はソウルイーターを天に掲げ、そいつの名前を呼んだ。

「来い。ノア」

その瞬間、ソウルイーターは輝きだし、それと同時にフェンリルの泣き声が聞こえた。

「一体何が……」

ソウルイーターの輝きが収まり、俺はその正体を確かめた。

「こいつが……俺の魔力の化身？」

第22話：隼人VS烏丸鋭霧（後編）（前書き）

ピンチの時に隼人を救った魔力の化身。
その正体は……

第22話：隼人VS烏丸鋭霧（後編）

そいつはフェンリルを片手で持ち上げ、めんどくさそうに俺を見ていた。

「おいお前、隼人との一騎打ちに邪魔をするな」

烏丸にそう言われたそいつは、フェンリルを烏丸に投げつけた。

「人間？」

俺の魔力の化身は、人の姿をしていて、長身で肩まで伸びる黒髪、ジーンズにTシャツをカジジュアルな格好をして登場した。

でも人の姿をした魔力の化身など聞いた事がない。

いや、むしろありえないはず。

「実際に存在してるのだから信じるしかないじゃん。それに僕は特別」

そうか特別かぁ・・・

ん？喋った？今喋ったよな？しかも俺の考えてることに口出ししてきやがった。

「何をうるたえてるんだよ。君は僕。僕は君だよ。君の考えてることなど僕の頭に嫌でも入って来る」

テレパシーみたいなものか？

言い方からして弱そうだが使い道はありそうだ。

「1つ言っておくが、僕は君の魔力の化身はじゃないよ。どっちかというとソウルイーターの化身かな」

どう違うのかはいまいち分からないが、これで俺らの優勢だ。

「一気に決めるぜ。お前の得意技を一発ぶち放ってやれ」

「あゝそれは無理」

はぁ？なんでだよ？まさかそういう技は持っていないとか？

「ううん、ソウルイーターには僕を呼び出す力は充分にあったけど、君が未熟なせいで、不完全なんだ」

やっぱ呼び出すにはまだ早かったって事か。

まあ、戦力にはなるだろうし、いないよりはマシだな。

こつもしてゐるうちに烏丸のフェンリルは復活し、こつちに敵意を剥き出しにしてやがる。

「ノア、お前は何かができる？」

「あいつを倒せる」

充分すぎる答えが帰ってきた。

「でもめんどくさい。僕は弱い者いじめは趣味じゃないんだ」

また何を言い出すかと思えば、めんどくさいだと。

お前は俺の剣になるんじゃないやなかったのかよ。

「夜は眠いから嫌だ」

子供みたいなこと言うな。烏丸を倒せるんじゃないやなかったのか？

俺のテレパシーも虚しくノアは他所の民家に入って行った。

「ははは、せつかくの助っ人も意味なかったな」

ああ、呼び損だったぜ。

こつなりや俺一人で烏丸とその化身を……ってフェンリルの姿が見えない。

後ろか？

俺はすぐさま横に転がりフェンリルの突きを紙一重でかわした。

「油断したな隼人」

【ブレイクヴァン】

烏丸が両手を地面に当てた瞬間、地面は強い光を放ち、地をつたりながら、俺に近づいてきた。

その光は俺の目の前で止まり、光の中から土で出来た巨人の両手が現れ、俺をわしづかみした。

巨人の腕にフェンリルが飛び乗り、俺を見つめてきた。

「さあ隼人。早くどうにかしないと死んじまうぞ？それともここで果てるか？」

こんな所で死ぬわけにはいかない。

死ぬ気もさらさらない。でも俺にはこの現状を打破する力はもう残ってない。

光喜に亜矢のことを頼んどけばよかったな。

ノアも俺のこと本当に見捨てやがって、助ける気があるならそろそろ出てこいよ。

「これは君が仕掛けた戦いだろ？すぐ誰かを頼るのはどうかと思うよ」

テレパシでノアの声が頭に入ってきた。

今の状況がわかってるなら助けに来てくれてもいいだろう。

まあ運が悪かったってことか。

「なんだ？もう諦めたのか？」

ああ、身動きできない状態でどうしろっていうんだよ。

「俺の負けだ一思いにやってくれ」

そう言つと烏丸はしばらく沈黙し、舌打ちをした。

「………っち、フェンリル、お前の最強の技で隼人を葬つてやれ」

フェンリルは空高く飛び上がり、頭の角を俺に目掛けて急降下してきた。

【ホーリーシールド】

俺の頭上に白い盾が広がり、フェンリルの攻撃を受け止めた。

一体誰が……

「隼人、大丈夫？」

亜矢、何でこんな所に……

「今すぐ離れる。ここにいたら危ない」

「嫌、隼人が危険な目に会ってるのにどうして私だけ逃げないといけないのよ」

亜矢は必死に、俺をわしづかみにしている、巨人の手を外そうとしている。

すると、急に巨人の手も消え、フェンリルの攻撃も収まった。

これも垂矢の力なのか？いや、違う。烏丸自ら消したんだ。

「苦戦してるのか？俺も一緒に戦ってやるからさっさと終わらせろ」

武田・・・さん、がどうしてここに。

光喜や梓ちゃん達は負けたのか？

いや、それは多分ない。

今でも梓ちゃんたちがいた場所からすごい音が響いてるし、戦塵もすごい舞っている。

「陽河兄弟はどうしたんだ？」

烏丸が武田さんに聞いた。

「幹部会が戦ってくれている。あいつらが参戦してくるのは例外だったらしいからな」

やばいな、例えば光喜達でも水無月さんたちが相手だとやばいんじゃないのか？

それに悠夜もまだ戦える状態じゃないはず。

「仲間が心配か？だったらその女を置いてけばそれで全ては終わる」
武田さんが俺を説得してるようだが、そんな受け入れるはずがない。

「交渉決裂だな。じゃあさっさと決めさせてもらおう。その女の魔法使いとしての力が開眼しかけみたいだからな」

そう言つと、赤い刀紅桜と青い刀大蛇を抜き、構えた。

【漣火】

紅桜と大蛇をすごい速さでぶつけ合って火花を散らせながら、斬撃を飛ばしてきた。

「隼人ここは任せて」

【ホーリーシールド】

その技は……

もしかしてさっき助けてくれたのは亜矢だったのか？

「亜矢、お前その技」

「ん？気づいたら使ってたの。隼人を助けたくて必死だったから……」

その心はありがたいんだけど、まだ早すぎる。

まだ開眼したての亜矢の魔力じゃあ、武田さんの攻撃を全て防ぎきれない。

その証拠に亜矢が今出してる白い盾は、既にひび割れてきている。こうなったら、少し不安だが、亜矢が耐えている間に、俺は武田さんを倒す。

「亜矢、もう少し耐えててくれ」

守りの盾から俺は回り込んで、横から武田さんに突撃した。

やはり武田さんは亜矢を殺すことしか考えてないようだ。

「隙あり！ソウルイーター・デュランダル」

っと叫んだ瞬間、武田さんは地面から出てきた土の壁に覆われた。

「うち烏丸か」

そのとき大きな音で何かが割れる音がした。

亜矢の盾が割れる音だ。

俺はすぐさま武田さんの目の前に立ちはだかり、亜矢を庇おうとしたが、土の壁に覆われていた。

「おい、烏丸！四方とも囲ったら攻撃できねえだろ」

「すいません」

武田さんは土の壁を壊し、傷だらけで出てきた。

大よそ、自分の斬撃が土の壁に跳ね返されて、自爆したって所だろう。

でも烏丸がこんなミスするはずが……

とにかく俺は座り込んでいる、亜矢の所へ向かい、立ち上がらした。

「私は大丈夫だよ。自分の身くらい自分で守らなきゃね」

亜矢は笑顔でそう言ったが、もうすでに魔力が尽きかけてるのはわかる。

これが最後だ。一気に2人を倒せる技、それは……

「やめといたほうがいいよ。冥怖でしょ。」

またこいつか。

口出しばかりするなら、一緒に戦えよ。

「しんどいから嫌だ。ともかくやめときなよ。そんな状態で使ったら暴発するのは目に見えてるし」

確かにこの前使った時も同じ状況だったな。

【津波】

考えてるヒマはなさそうだ。

武田さんは漣より一回り大きい斬撃を飛ばしてきた。

俺らにはもう防ぐ術はない。

「だとしたら避けるだけだ。亜矢、こっちだ」

亜矢を引っ張ろうとしても全く動かず、武田さんのほうを見ていた。

「隼人は私が守るの」

「やめろ。そんな状態で魔法なんか使ったら亜矢の命が危ないだろ」

しかし亜矢は俺の言葉など全く聞く耳持たずで、白い盾を目の前に張りめぐらせた。

「おもしろい。お前の非力さを教えてやる」

【大津波】

「でか」

ついつい口に漏らしてしまうほどの、でかい斬撃を繰り出してきた。

しかも近くにある周辺の民家も一瞬にして切り裂いていった。
ノアがいるはずの民家とともに・・・

しかしこの技は漣とか津波とは違い、連続で出せる技じゃないらしく、一回防げばそれで終わりだ。

でも亜矢の盾はもうボロボロだ。その一回を防げるかも怪しい所だ。

「だったら冥府以外で使える技と言ったらアレしかないだろ」

【ソウルイーター・ブラッドシールド】

自分の血で亜矢の盾をのヒビを補強した。

これでなんとか持ちこたえればいいんだが・・・

俺は血の出しすぎでその場に倒れこんでしまった。

武田さんの大津波と亜矢のホーリーシールドがぶつかりあった時、すごい風圧に襲われた。

気圧の変化か何か？

でもそれはすぐに収まり、亜矢の盾もまだ碎けてはいなかった。

「まだ耐えるか。ならこれでどうだ」

【雨津波】 アマツナミ

見た目は津波とは変わらないが一体・・・

「痛っ」

上から刃物のような物が落ちてきた感じがした。

ヤバイ！！！！上からも斬撃が・・・

亜矢の盾で防げるのは正面だけ。

「逃げる！亜矢」

しかし、俺の声は亜矢には届かず、空から来る斬撃は容赦なく、亜矢に降り注いだ。

「やめろ、やめてくれ・・・」

渾身の力で立ち上がり、急いで亜矢の元に駆け寄り、亜矢に覆い被さった。

亜矢の盾は既に碎けていて、前方と上からの斬撃が止め処なく俺たちを襲った。

武田さんの攻撃が止んだ後、俺は亜矢に呼びかけた。

「亜矢」

でも返事はなく、ただグッタリしているだけ。

揺すってもただ人形のように、動くことはなかった。

手には生暖かい水溜りができているのがわかる。

信じたくない俺は、亜矢から離れることができなかった。

離せば今にもこのぬくもりが消えてしまいそうで怖かった。

どうして……どうして亜矢がこんな目に。

魔法使いの何が悪い？

魔法使いだと何故殺される？

魔法使い全てが悪いわけじゃないはずだ。

魔法使いの中で魔法を悪用するのはごく一部のはずだ。

それをどうして……

「は……や……と」

「亜矢？」

俺は顔を上げ、亜矢を見つめた。

「ごめんね……。私、隼人の足手まといになっちゃったね……。でも私」

「亜矢、もういい喋るな」

血を吐きながら、必死に何かを伝えようとしていたが、俺は聞こえなかった。

「亜矢ちゃん？」

「烏丸くん」

烏丸は俺らの前に立ち、膝を折った。

「隼人、お前は亜矢ちゃんを助けるんじゃないかなかったのかよ。なんでこんな目に合わせてるんだよ」

烏丸が俺の肩に手をかけ、必死に訴えかけてきた。
お前らがやったんだろ。俺にそんなこと言うな。

「よかった。いつもの烏丸君だ」

亜矢が弱弱しい声で言った。

ああ？いつものってこいつはいつもそうだろ。

俺は烏丸の方に目をやると、烏丸は涙を流していた。
男として情けないほどの号泣していた。

「俺はお前が何とかしてくれると信じてこの任務を受けた。お前なら亜矢を逃がしきれると信じてた。なのに・・・」

烏丸・・・

確かに思い当たるふしは所々ある。

俺を殺そうとした時の舌打ち、亜矢がやられる前に、土の壁を武田さんの目の前に張ったり。

しかもこいつはいつでも俺を殺せるタイミングがあったはずなのに殺さなかった。

お前も亜矢のことを・・・

「ぐはっ」

いきなり烏丸の肩から刀が飛び出してきた。

赤い刀、紅桜だ。

「任務完了直前で寝返るとは、おろかな奴だ」

武田さんはそう言いながら、烏丸の肩に突き刺さっている刀をグリグリ回した。

「ぐわぁ」

「やめろ、そんなことしたら使い物にならなくなるだろ」

俺は武田さんに殴りかかったが、軽く避けられた。

まあ、烏丸の肩から刀が抜かれただけでもヨシとするか。
でも俺と烏丸だけで、勝てるかどうか・・・

その時、崩れた民家からフラフラと誰か歩いてきた。

「僕の休息を妨げたのは誰？」

ノアだ。つてか休息してたのか。

「なんだお前？ここはお前見たいな奴が来てもいい場所じゅわ・・・

」

武田さんが話してる最中にも関わらず、ノアは有無を言わず殴り飛ばした。

しかも避ける隙も与えないほどの速さで。

「ノアそいつはお前に任せる。烏丸、一緒に亜矢を運ぶぞ」

「おお」

久しぶりに烏丸の息がピッタリあった。

亜矢の息はまだある。

病院に連れて行けばなんとか・・・

第22話：隼人VS烏丸鋭霧（後編）（後書き）

きる所がなかったなので、中途半端ですけどここで一息入れたいと思います。

第23話：隼人VS水無月龍二（前書き）

瀕死の亜矢を放ってはおけなかった烏丸は隼人と共に行動すること
に。

2人は亜矢を助けるため戦闘を離脱することを試みるが、武田毅に
妨害されてしまう

第23話：隼人VS水無月龍二

俺は担架を作るため、近くの民家の庭から物干し竿を2本、烏丸はシーツを持ってきた。

何も言っていないのにここまで綺麗に分かれるとは、驚くほどのコンビネーションだ。

材料が揃い次第俺たちは、組み立て担架を作り上げ、亜矢を上に乗せた。

ここまでで約1分くらいだ。

「俺を置いてどこ行く気だ？」

【漣】

やばい。既に俺たちは手作り担架で亜矢を担いでる最中なのに、どちらかが手を離せば最悪な状態になる。

その時ノアが俺の目の前に現れ、正面から漣を受けた。

「痛い。けど痛いとしか感じないよ」

ノアはそう言って不敵に笑った。

「烏丸こいつはノアが相手をしてくれる。だから俺達は早く」

「わかった」

俺達はとにかく走った。

絶対に亜矢は死なせない。

それは烏丸も同じ事を考えているはずだ。

でもここから先に待ち受けているのは……

「神兵の鬼庭隼人と烏丸鋭霧がターゲットの氷室亜矢を連れて逃走と連絡が入ってきて確かめに来たら、まさか本当に逃走してるとはな」

「水無月さん」

結界の外に出る手前で魔女狩りNO・1と2を争う強さを誇る水無月さんが待ち構えていた。

誰と争ってるかと言うと、俺の上司である光明寺さんだ。

あの二人はバケモノ並に強い。

因みにメシア様はNO・3だ。

「随分内応者を作ってたみたいだな。おかげで陽河兄弟を捕まえそこなってしまった」

「内応者？一体誰のことだ？」

「しらをきるつもりか？お前たち神兵全員は勿論、大和と美里もこの戦いに加わらなかった」

光明寺さんが？朝霧先輩や皐月まで・・・それに真田まで俺たちに味方してくれてたのか。

「まあ、別にこの戦いに参加しないだけで裏切り者扱いにはならないが、メシア様が不信を持つのは確かだ」

「だから何だってんだ！いいからそこをどけ」

言っても無駄なことだと、わかっててもつい言ってしまうものだ。

「それは無理だ。みすみすそいつを逃がすわけにはいかんからな。

そいつは後々我々にとって厄介な敵になる」

そんなはずない。

たかが魔法が使えるってだけで、俺たちの敵と決まったわけじゃない。

魔法使い全てを狩るからそういう結論になるんだ。

「まだ何もしてない奴を狩るのはおかしい。魔法を使える人だっていい人もいるはず。亜矢もその一人です。だから敵になるなんてありえません」

「事が起きてからだと遅いのだよ。今はいい奴でも後々変わるという可能性もある。お前はそれを断言できるのか？」

「できる。亜矢は絶対にそんなことしない」

「っふ、時間の無駄だったようだな」

水無月さんがそう言って片手を上げた瞬間、数百の信徒が一斉に

俺たちに襲い掛かってきた。

「亜矢ちゃんを一旦降ろそう。担ぎながら戦うのは流石に無理だ」
同感だ。信徒相手ならなんとか応戦して勝てそうだ。

【ニードルシャイン】

【サーベルレイン】

烏丸は無数の土の針をできるだけ広い範囲に放ち、俺は烏丸が仕留め損ねた信徒を狙って剣の雨を降らせた。

だが今回の信徒はしぶとく、一撃では倒れてくれず、ゾンビみたいに何度も立ち向かってきた。

「なんだこいつら？ゾンビか？」

いや、痛がっているからゾンビではなさそうだが……

「氷室亜矢を殺した奴は、神兵への昇格を約束する。だから死ぬ気でかかれ」

そういうことか。弱りきった亜矢を殺すだけで神兵になれるんだっただが俺たちにも負けられない理由がある。

「隼人、上を見る」

烏丸に言われ、上を見てみると、上空に俺らを中心に魔方陣が描かれていた。

この魔方陣は水無月さんだ。でもどんな効果が全くわからないが、ここにいたらヤバイ気がした。

「烏丸、亜矢をおぶってくれ。場所を移動する」

「場所を移動って、この場所から移動できる所などないぞ。360信徒に囲まれているし」

確かに移動したくてもできないのが今の現状だ。

こいつらを一掃できる技は俺にも烏丸にも持ち合わせていない。絶体絶命とはこういうことだな。

その時、地中から白い光が飛び出し、信徒が消えていった。

「烏丸、お前がやったのか？」

「いや、隼人じゃないのか？」

烏丸じゃないってことは……

俺たちは2人して、亜矢の方に目をやった。

「私でも少しは役に立てたかな？」

やはりさっきの魔法は亜矢だった。

「亜矢ちゃん立って大丈夫なのかよ？すごい血を流してたけど？」

「大丈夫、治癒魔法も少し使えるみたいだから」

それは心強い。でも治癒魔法を使ってる割にはかなりつらそうだけれど。

やっぱり、治癒魔法をかけてもつらいものなのか？

「次はあの魔方阵だな……ってなんだアレ？」

烏丸の叫びと同時に俺たちはまた上空を見上げた。

魔方阵からは黒いローブを来た巨人が現れた。

巨人と言っても、顔の血色は悪くとても普通の巨人ではない。

分かりやすく言えばこの世の者ではない、魔王みたいな奴だ。

もっと分かりやすく言えばRPGゲームのラスボスの最終形態みたいな奴だ。

それほど恐ろしい奴が何故あんな魔方阵から現れたのかは知らないが、俺たちの敵には変わりなさそうだ。

「隼人一斉にあいつを狙い打ちにするぞ」

俺たちは一斉にその巨人に攻撃したが、全くの無反応でダメージを受けているのか全然わからない。

不死身かあいつ？

俺たちがうるたえてる中、巨人は手のひらサイズの火の玉を俺たちに放ってきた。

巨人の手のひらサイズでも俺たちから隕石並のでかさだ。

「あんなのくらったらおしまいだぞ。隼人全力で止めるぞ」
わかってるよ。

でも俺たちの生半可の力ではその火の玉は相殺できず、すぐ目の

前まで迫ってきた。

【ホーリーシールド】

亜矢はボロボロな身体で健気に立ち上がり、白い盾を張り巡らせた。

これでなんとか持ちこたえ……

「バカ野郎。そんなことしたら本当に死んじゃうぞ」

烏丸が叫び、亜矢の魔力を盾に注いでいる腕をなぎ払った。

俺は烏丸のその言葉に圧倒させられた。

最悪だな。俺は……自分のことしか考えてなくて、何が亜矢の事が好きだだ。

烏丸は常に亜矢のことを気にかけていたんだ。

あいつは俺よりも亜矢のことを深く想っている。

「2人が助かるなら私はそれでもいい」

亜矢は烏丸の忠告を無視し、再び盾にありつたけの魔力を注ぎ込んだ。

でもあの巨人の火の玉はケタ違いで、しかも既にボロボロの盾で完全に防ぐのは不可能に近かった。

【アースウォール】

「俺達も同じだ。亜矢が助かるならそれでいい」

烏丸は白い盾のひび割れに、土の壁を張り強化させた。

二人はまだ諦めてねえのに、なんで俺だけ諦めかけてるんだよ。どっちみち亜矢を助けるために一度は捨てた命、惜しくはねえ。

「隼人、お前何する気だ」

「俺も烏丸と亜矢と同じだ。二人が助かるならそれで十分だ」

そっぴい残して、巨人の真横に回りこんで、意識をソウルイーターに集中させた。

「「隼人」」

烏丸、亜矢のことを頼んだ。

【ソウルイーター・冥怖】

発動するかわからない俺の最強の技を、あの巨人に放った。

空からは6人の骸骨の死神が円を描くように舞い降りてきて、巨人を囲んだ。

よし、成功だ。これで倒せなったら、終わりだな。

6人の死神は一斉に鎌を振り下ろした瞬間、天から闇の魔法球がとめどなく、巨人に降り注いだ。

それと同時に、ものすごい爆風が襲い掛かってきた。

烏丸達は盾で爆風も凌いでいるが、俺にはそれを耐える力は残っていないかった。

かなり吹き飛ばされてしまったが、どうにか巨人を消滅させることに成功した。

俺は巨人が消滅するのを確かめ、目を閉じた。

クソ！まだ水無月さんが残ってるのにこんな所で……

意識を失わないように、重いまぶたを開こうとするが、身体は全く言うことを聞いてくれなかった。

「まさか、ピサロがやられるとは驚きだぞ」

やばい、早く立ち上がらなくては。

「でもこれでおわりだ。鬼庭隼人」

その言葉を聞いた瞬間、俺は意識を失い、目覚めた時には魔女狩り本部の地下牢だった。

第23話：隼人VS水無月龍二（後書き）

さて、隼人が意識を失った後、どうなったのか？
亜矢と烏丸は無事なのか？

次回、最終話！・・・かもしれない

最終話：新たな地へ（前書き）

亜矢と烏丸を守るため捨て身で水無月に挑みんだが、やられてしまった。

そして目が覚めたときには、牢屋にいれられてしまった。

最終話：新たな地へ

見慣れた空間、見慣れた壁、見慣れた鉄格子、俺はすぐに魔女狩り本部の地下牢にいることに気づいた。

烏丸と亜矢は無事なのか？

「痛っ」

鉄格子から顔を覗かせようと、立ち上がった瞬間、身体全身に激痛が走った。

「ちよつと無茶しすぎたか」

動かない身体にムチを打ち、四つんばいで鉄格子の前まで移動した。

見渡せば、牢獄の行列。

牢の中はもぬけの殻だった。

「つということは烏丸達は無事か」

もし烏丸達も捕まっていたら、俺と一緒に牢屋に入れられてるはずだからな。

「それにしても腹減ったな」

腹の虫の音と共に俺はベッドに飛び込んだ。

今がいつで何時かもわからねえし、俺が何日寝てたかもわからねえし、どうしたものか。

誰か一人くらい見回りに来てもいい頃だつてのに、誰一人通らない。

そりゃ、ここを通る奴は俺みたいな奴に用がある奴だけだ。

俺はそのまま、空腹なのを忘れて、眠りに落ちた。

「ん？」

遠くから誰かが近づいてくる足音が聞こえ、目を覚ました。キィッと重い扉が開き、牢獄の中に光が差し込んできた。

「やっと起きたか」

水無月さんが、信徒2、3人連れ、俺の目の前まで来た。

「亜矢と烏丸は無事なのか？」

俺は冷静に強気に出た。

ここに入れたってことは、近いうちに殺されるってことだから、今更下手に出ても意味がない。

「ついてくればわかる」

っただけ言い残し、信徒に牢の鍵を開けさせ、そのままさっさと行ってしまった。

水無月さんについていく先には、メシア様がいる評定の間だった。その部屋にはいると、見知った顔がたくさん並んでいる。

光明寺さんや真田の幹部会5人、朝霧先輩や相馬さんの神兵3人。メシア様の両隣に烏丸と武田さん。

そうか、烏丸は無事だったのか。

だとしたら、亜矢はどうした？一人で逃げた？いや、一人では逃げ切れないはず。

烏丸が庇ったとしたら、俺と同じ牢屋行きのはずだ。

それじゃあどうして……

「さて、皆さんが集まった所で評定を始めましょうか」

水無月さんはいつのまにか、幹部会の列に加わっており、俺だけ一人、真ん中に取り残された。

「鬼庭隼人、あなたを任務妨害、裏切りの罪により処断します」

いきなりだな、おい。

「その前に1つ聞かせてくれ。亜矢はどうなった」

「ちゃんと始末しましたよ」

っな……！うそだろ？

一瞬頭の中が真っ白になった。

そして、すぐに亜矢と一緒に過ごした日々や、学校生活などの思い出が、鮮明に頭の中に描かれた。

終いには亜矢の思い出と共に幻聴まで聞こえ、俺は今まで堪えていた涙が、大量に溢れ出してきた。

「悲しまなくていいですよ。今すぐ彼女の所に連れて行ってあげますから」

別に悲しくて泣いてるんじゃない。

亜矢を、亜矢を守りきれなかったのが悔しくて……守ると決めてたのに。

俺は無力だ。誰一人守れなくて、調子乗って魔女狩りから離反して。

メシア様はゆっくり俺に近づいてきて、右手に魔力の結晶でできたナイフを取り出し、俺に向けてきた。

唯一心残りなのは光喜達だ。

俺を助けてくれたのに負けちまったし、明日香も悠夜に預けっぱなしだ。

そういえばノアはどうしたんだ？

武田さんがこの場にいるってことはまさかやられちまったのか？

「何か言い残すことはありませんか？」

想いに耽っていると、いつの間にかメシア様のナイフが俺の首筋に当てられていた。

「……………」

「何もありませんね。それでは……………」

「ちよい待ちい」

「なんですか？大和」

光明寺さんが如意棒でメシア様のナイフを振り払った。

「何故邪魔をするのです？」

「罰せる相手、間違えとるんちゃうか？」

「…………俺には光明寺さんが言ってることがいまいち理解できなかった。」

魔女狩りを裏切ったのは俺だから、罰せられるのは俺のはず。

「隼人に氷室亜矢を守れと命令したのはワイや。隼人はワイの命に従っただけで何も悪うない」

光明寺さん、まさか俺を庇おうと…………

「何を言ってるんですか。これは俺の意思で……」

「自惚れんなや」

如意棒をガンと俺の目の前で突き立てた。

「隼人に庇ってもらうほど、ワイはそこまで落ちてへん。

つということで、処断されるのはワイのはずや」

光明寺さんがそう言つとメシア様はしばらく考えた後、口を開いた。

「そうですか。大和ほどの者がそんなことするとは信じられませんけど、仕方ありません」

メシア様はそう言つと、今度は光明寺さんにナイフを向けてきた。光明寺さんは縛られもしてないのに、その場に立ち尽くしているだけだ。

何とかしないと、このままじゃ光明寺さんが……

「メシア様、こいつの処分は俺に任せてくれないか？」

水無月さんが一步前に出て、そう言った。

「龍二に……いいでしょう。大和の処分は龍二に任せます」

メシア様はそう言い、元の場所に戻った。

「龍二、ワイをどないする気や？」

「行け。お前と肩を並べて戦うのも嫌気が差してきたところだ。要するに逃げていいって事なのか？」

「後悔することになんぞ？」

「かまわん。どちらが強いかはつきりさせたいしな。せいぜい俺を楽しませろ」

「そう言つんやったら、遠慮なく出て行かせてもらうわ。ほなな」

光明寺さんはそう言つて、部屋から出て行ってしまった。

簡単に言えば追放という処分が下されたってことか。

「さて、この件は終わりとして、隼人、早く自分の位置に戻りなさい」

メシア様にそう言われた瞬間、信徒に今まで縛られていた縄を解

かれた。

俺は今すぐ亜矢の敵を討ちたかったが、光明寺さんの行為を無駄にすることができなかったので、しぶしぶ位置についた。

「次に任命式を始める。烏丸鋭霧、武田毅、前へ」

2人はメシア様の前に立ち、立膝で頭を下げた。

「鋭霧、あなたには、南支部を任せます。毅はまた東支部を任せます」

「はっ」

2人はより深く頭を下げ、立ち上がった。

「毅には前いた補佐役がまだいましたね。それでは鋭霧、この中からあなた直々の部下を選びなさい」

この中と言うのはここにいる神兵の4人を指す。

あ、俺は含まれないのか？

「それじゃあ・・・」

烏丸は一通り俺たちを見回った後、口を開いた。

「隼人で」

俺に指を指して、そう言った。

「また裏切るかもしれませんよ」

メシア様は俺を本部から引き離したくないはずだ。

「大丈夫ですよ。隼人は俺にとって一番信用できる仲間ですから」

烏丸おまえ・・・俺のことをそんな風に。

「分かりました。それでは毅は東支部に、鋭霧と隼人は南支部に、準備が整い次第、至急発ちなさい」

その一言で、今回の評定は終わった。

「隼人支度できたか？」

烏丸が俺の部屋にでかい荷物を持って入ってきた。

「ああ、あともうちよつと。そこでちよつとくつろいでいてくれ」

俺は荷物をまとめながら、今まで気になっていたことを聞いた。

「なあ烏丸」

「ん？」

「俺が水無月さんにやられた後どうなったんだ？ 亜矢は本当に殺されたのか？」

未だ亜矢が死んだことを信じられず、確認のために亜矢のこともう一度聞いた。

「お前が水無月さんにやられた後、水無月さんは亜矢ちゃんに襲い掛かり、一瞬にして吹き飛ばした。

俺は水無月さんの、おかげで裏切りの罪をかぶらず今にいたるってわけだ」

烏丸は穴だらけの説明をして、それで終わった。

「おい、亜矢を吹き飛ばして、その後どうなったんだよ？」

「わからねえ。水無月さんも驚いていた。そこにいるはずの亜矢ちゃんがいなかったんだよ」

「いなかったって、消えたってことか？」

「そうなるかな。死体も見つかってないウヤムヤのままでこの任務は終わっちまったんだ。

因みにメシア様には水無月さんが跡形もなく消し去ったと報告したら、あっさり通っちまった。

まあ水無月さんそういうことができる人だからな」

死体が見つかってないならもしかしたら……

「でも俺は亜矢ちゃんが生きっていると信じている。そのために隼人を補佐に選び、一緒に南支部で亜矢ちゃんを探そうと考えている」

「烏丸……俺も亜矢が生きっていると信じてる」

「さて、準備も出来たようだし、そろそろ行くか。門の前まで皆が見送りしてくれるみたいだしな」

「ああ」

「鬼庭先輩」

「烏丸」

門の近くで皐月と朝霧先輩が見送りに来ていた。

一人足りないぞ？

「あれ？相馬さんは？」

「そう言えばどこいったんだ？」

俺と烏丸は周りを見渡して、相馬さんを探すがどこにも見当たらなかった。

「相馬先輩なら、武田先輩と一緒にきましたよ。『剣を極めるには腕のイイ剣士の側にいることが何よりの近道』って言い残して」

「2人に挨拶できないことを悔やんでたけどな、永遠の別れじゃねえんだし気にすることないだろ」

相馬さんは、武田さんと一緒に行ったのか。

少し心配だけど、相馬さんなら間違った方向には進まないだろ。

「じゃあお前たちも元気でやれよ」

「私達もいつか、本部を出て烏丸先輩らに負けない立派な支部長官になってみせますから」

「頑張れよ」

俺たちは朝霧先輩と皐月に笑顔で見送られながら、本部を去った。

「光明寺さん」

本部から少し離れた所に光明寺さんが、壁にもたれながら佇んでいた。

「よお」

「すみませんでした」

俺は荷物を置いて真っ先に謝った。

「俺のせいで魔女狩りを追放されて、しかも狙われるハメになってしまつて……」

「いいんや。そんなに気にすんなや。ワイもメシアのやり方気に入らんかったさかい。そろそろ出て行きたかつて、いい口実ができて感謝しとるねんで」

光明寺さん……

「ありがとうございます」

俺は深々と頭を下げた。

「光明寺さん、俺、アレでよかったんですか？」

烏丸が光明寺さんに尋ねた。

アレってなんだ？

「まあ、結果的にはいまいちに終わってもたけど、これが一番いい結果やったと思う」

「・・・」

「あゝすまんすまん、隼人にはまだ話してなかったな」

俺が頭の上に？マークを出しているような顔をしていると、光明寺さんが俺が話しについていけないことに気づいた。

「鋭霧はな、氷室亜矢暗殺の任務を受ける前にワイに相談してきよってん」

烏丸が光明寺さんに？

「まあ、先に龍二に相談したみたいやったみたいやけど、納得いかんかってんな？」

光明寺さんが、烏丸に同意を求めた。

「水無月さんは、メシア様の命令は絶対だ、の一点張りで相談できなかったんだ」

「そこでワイが鋭霧の相談にのり、任務を受けることを勧め、隼人が起こす行動も鋭霧に報せた」

そういうことか、あの任務を受けたのも、全部芝居だったってことか。

「最後は見てられなくて、隼人に手貸しちまったけどな。亜矢も心配だったし」

烏丸が笑いながら付け足した。

「そっぴや、忘れとったわ。隼人らの耳に入れときたいことがあったん。

ワイが思うに、氷室亜矢は絶対に生きとる。メシアがあれだけ恐れとった相手や。そう簡単に死ぬはずない」

メシア様が亜矢を恐れていた？

「何か亜矢ちゃんにすごい秘密があつたってことですね」

「そういうことや。だからそんな落ち込まんでええで」

光明寺さんはそう言い残して、立ち去ってしまった。

「どこか行く宛てもあるんですか？」

俺は大声で光明寺さんに向かって叫んだ。

「どっか山奥にでも潜んどくわ」

そう言つて、左手を軽く上げて、消えていった。

「じゃあ俺たちも行くか。新しい本拠地に」

「そうだな。行つておくけど、一応俺は支部長官で隼人は補佐なんだからその所気をつけるよ」

「そんな細かいこと気にするなつて」

俺たちはバカ騒ぎをしながら、南支部に向かった。

これからの魔女狩りの未来のために。

最終話：新たな地へ（後書き）

ここまで読んでくれた皆様ありがとうございました。

え？話が中途半端じゃないかって？

だってこれは出会い編ですよ

わかりやすく言えば第1章って所かな。

魔女狩りってタイトルだけにして、サブタイトルで1章、2章って分ければよかったんだけど、一応かき終えたっていう余韻に浸りたくてw

でも2章だけ特別で3部構成なんですよね

独立編と旅立ち編と逃亡編に別れ、3人の主人公が同じ時間帯を進んでいくみたいなの・・・

そして3章で2章での主人公がめぐり合うって構成だから分けときたかったんですね

っということで次回、独立編、旅立ち編、逃亡編のどれから投稿していこうと思います。

感想＆評価などいただけたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0461b/>

魔女狩り～出会い編～

2010年10月10日12時22分発行